伏見城跡・桃陵遺跡

２０１４

有限会社 京都平安文化財

第 2 調査区古墳周濠 4 検出状況 (西から)

例　　言

1. 本書は京都市伏見区奉行前町 4 番地 2、5 において集合住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

   [文化財保護課受付番号　12F610]

2. 本調査は株式会社今井建設 (代表取締役 今井　隆) の委託により有限会社京都平安文化財が実施した。

3. 発掘調査の面積は、287.89㎡（第 1 調査区 104.00㎡、第 2 調査区 183.89㎡）である。

4. 発掘調査は平成 25 年 11 月 5 日から 平成 25 年 12 月 20 日まで実施した。整理・報告書作成は平成 25 年 12 月 24 日から平成 26 年 3 月 31 日まで実施した。

5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

   指導機関：京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

   調査主体：有限会社 京都平安文化財

   主任調査員　　河野凡洋

   調　査　員　　卜田健司

   補　助　員　　浅川永子、井上真紀、内川博之、小林雅幸、藤村謙伍、吉岡真史

   作　業　員　　有限会社 京都平安文化財

6. 本書の執筆は第 5 章は河野と卜田、その他は河野が担当した。報告書の編集は河野が担当した。

7. 遺構・遺物の写真撮影は河野が行った。

8. 調査検証委員会として下記の方々のご指導を頂いた。

   京都外国語大学外国語学部英米語学科 教授　南　博史

   同志社女子大学現代社会学部社会システム学科 教授　山田邦和

9. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。

   家原圭太、井戸竜太、今井　隆、宇野隆志、馬瀬智光、奥井智子、木村理恵、小泉裕司、小森俊寛、三木善則、千喜良淳、西野浩二、西森正晃　（五十音順、敬称略）

   京都府教育庁指導部 文化財保護課、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課、

   公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、伏見城研究会、株式会社 今井建設、NPO 法人 文化財支援センター

凡　　例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点はT. P. 値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T. P.」と略称している。
2. 使用した地図は京都市都市計画局発行の1：2500「丹波橋」「中書島」を使用し編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を40・80・100分の1とした。
5. 遺構名は柱穴、土坑、溝、井戸と表記し、その後に遺構の種別に関係なく各調査区別に一連の通し番号を付加した。ただし、建物番号は遺構とは別の番号を付加した。
6. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を4分の1とした。
7. 遺物番号は通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
8. 本書に収録した各資料の図は本書の体載に合わせて整えるためにそれぞれ拡大、縮小した。
9. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、文末に註として掲載した。

調査地位置図

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 1
第１節　調査に至る経緯 1
第２節　発掘調査の経過 2
1．発掘調査の概要 2
2．日誌抄 3
第２章　位置と歴史的環境 4
第１節　遺跡の位置 4
第２節　歴史的環境 4
第３節　周辺の調査 7
第３章　調査の方法 10
第４章　第１調査区の遺構・遺物 11
第１節　第１調査区の基本層序 11
第２節　第１調査区の遺構 11
1.　中世の遺構 11
2.　近世の遺構 16
3.　近代の遺構 25
第３節　第１調査区の遺物 26
1.　中世の遺物 27
2.　近世の遺物 27
第５章　第２調査区の遺構・遺物 31
第１節　第２調査区の基本層序 31
第２節　第２調査区の遺構 31
1.　古墳時代の遺構 31
2.　中世の遺構 36
3.　近世の遺構 36
第３節　第２調査区の遺物 36
1.　古墳時代の遺物 36
2.　平安時代の遺物 38
3.　近世の遺物 38
第６章　総　括 39

挿図目次

図 1　周辺遺跡における調査地位置図 1
図 2　伏見九郷図 4
図 3　伏見城・城下町復元図 5
図 4　伏見奉行所図 6
図 5　伏見奉行所組屋敷配置図 6
図 6　周辺調査（1：2500） 8
図 7　調査地配置・地区割り図（1：1000） 10
図 8　第 1 調査区北・東壁土層断面図 12
図 9　第 1 調査区南・西壁土層断面図 13
図 10　1．中世遺構平面図 14
図 11　2 － 1．近世遺構平面図
（安土桃山～江戸時代初期） 15
図 12　2 － 2．近世遺構平面図（江戸時代） 15
図 13　柱穴 50・土坑 76 平面・土層断面図 16
図 14　掘立柱建物跡 1 平面・土層断面図 17
図 15　柱穴 51・84 平面・土層断面図 18
図 16　土坑 92 平面・土層断面図 19
図 17　井戸 64 平面・土層断面図 20
図 18　柱穴 88 平面・土層断面図 21
図 19　土坑 36 平面・土層断面図 21
図 20　土坑 38 平面・土層断面図 22
図 21　土坑 42・52・55・56 平面・土層断面図 23
図 22　溝状遺構 3 平面・土層断面図 24
図 23　井戸 35 平面・土層断面図 25
図 24　3．近代遺構平面図 26
図 25　土坑 76 出土銭貨 27
図 26　土坑 1・36・38・42・52・55 出土土器 28
図 27　溝状遺構 3・53 出土土器 28
図 28　井戸 35・64 出土土器 29
図 29　近世、近代整地土層・撹乱出土土器 30
図 30　近世、近代整地土層・撹乱出土瓦 30
図 31　第 2 調査区壁面土層断面図 32
図 32　1．古墳時代遺構平面図 33
図 33　古墳周濠 4 平面・土層断面図 34
図 34　2．中世・近世遺構平面図 35
図 35　古墳周濠 4・近世整地土層出土遺物 37
図 36　柱穴 2・近世整地土層出土遺物 38
図 37　近世整地土層出土遺物 38
図 38　古墳半径復元予想図（1：200） 39
図 39　伏見奉行所敷地内における推定配置図 41
図 40　立射用散兵濠断面図 42
図 41　調査区遺構変遷図 43

表目次

表 1　周辺発掘調査 9
表 2　第 1 調査区遺構一覧表 11
表 3　建物跡 1 柱穴一覧表 17
表 4　第 1 調査区出土遺物の概略表 27
表 5　第 2 調査区遺構一覧表 31
表 6　第 2 調査区出土遺物の概略表 37
表 7 ～ 9 遺物観察表 45 ～ 47

図版目次

巻頭図版		第２調査区古墳周濠４検出状況（西から）
図版１	遺構	１　調査地全景（南西から）
		２　調査地全景（南東から）
図版２	遺構	１　第１調査区近代遺構完掘状況（東から）
		２　第１調査区近世遺構完掘状況（東から）
図版３	遺構	１　第１調査区西側柱穴（南から）
		２　第１調査区柱穴 70 礎石検出状況（南から）
図版４	遺構	１　第１調査区中世・近世遺構完掘状況（西から）
		２　第１調査区中世・近世遺構完掘状況（東から）
図版５	遺構	１　第２調査区中世・近世遺構完掘状況（北東から）
		２　第２調査区古墳周濠４遺物出土状況（東から）
図版６	遺構	１　第２調査区古墳周濠４完掘状況（西から）
		２　第２調査区古墳周濠４完掘状況（北から）
図版７	第１調査区出土遺物	土坑１　土坑 52　溝状遺構 53
図版８	第１調査区出土遺物	井戸 35　井戸 64　近世・近代整地土層
		土坑 76　土坑 38
図版９	第１調査区出土遺物	土坑 42　土坑 55　溝状遺構３　井戸 35
		井戸 64　近世・近代整地土層
図版 10	第２調査区出土遺物	古墳周濠４
図版 11	第２調査区出土遺物	古墳周濠４　柱穴２　近世整地土層
		古墳周濠４上層近世整地土層

伏見城跡・桃陵遺跡

第 1 章　調査に至る経緯と経過

第 1 節　調査に至る経緯

経　緯　2013 年、京都市伏見区奉行前町 4 番地 2、5 に株式会社今井建設による集合住宅の建設が計画され、当地が「伏見城跡･桃陵遺跡」に該当することから、2013 年 2 月 26 日付けで、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が行われた。

これに対し、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、京都市と略す）は 2013 年 9 月 18 日に敷地北側で試掘調査を実施したが、遺構は検出されなかった。しかし、

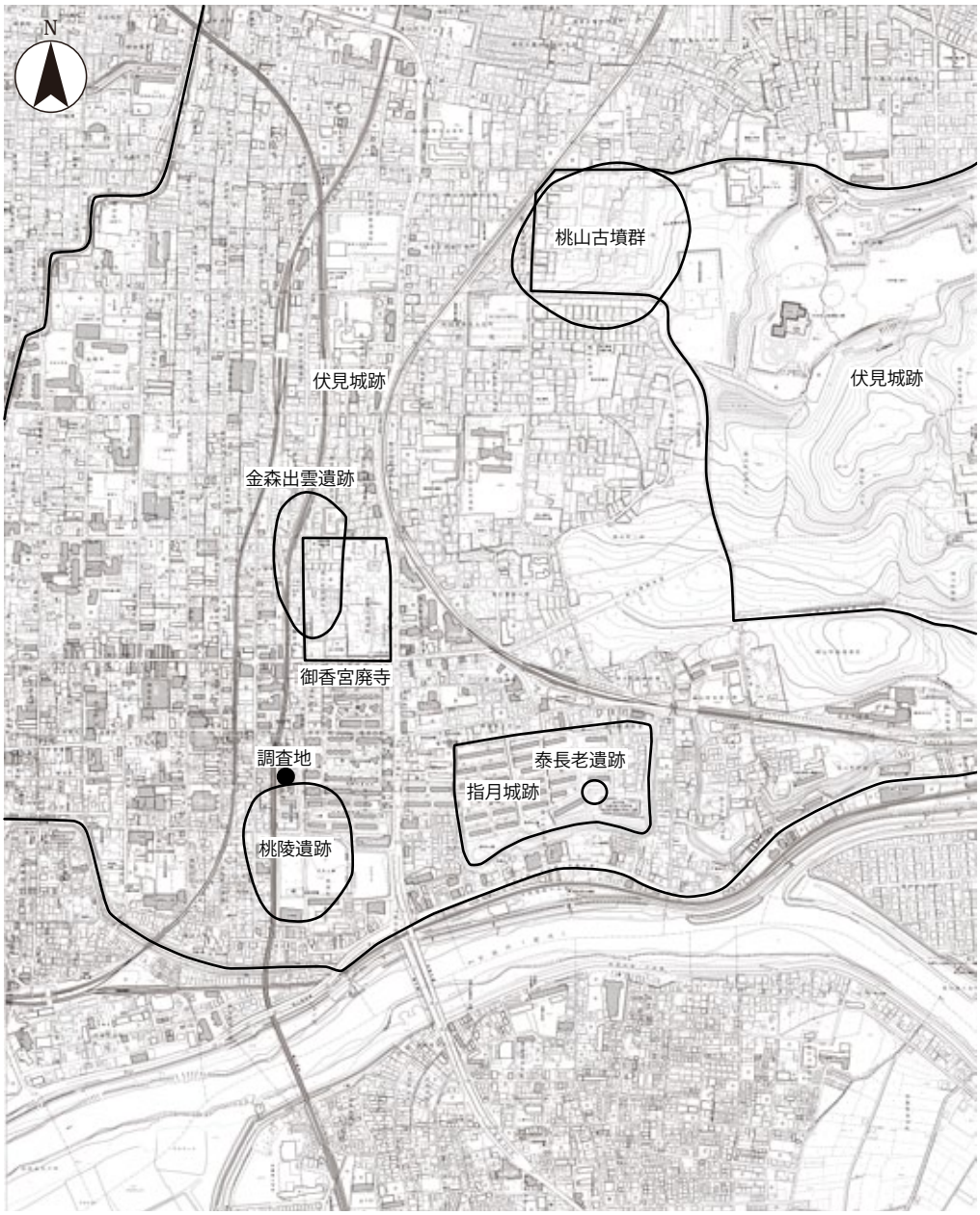


図 1　周辺遺跡における調査地位置図

2011 年 3 月 16・17 日 [文化財保護課受付番号　10F429] に実施された敷地南側の試掘調査において古墳周濠の可能性のある遺構が検出され、埴輪などが出土した。また、2011 年 12 月 7 日に実施された敷地北側の試掘調査 [文化財保護課受付番号　11F294] において安土桃山時代の整地土層、江戸時代の整地土層や遺構が検出され、遺物が出土した。その結果により京都市は発掘調査の指導を行っていた。集合住宅建設予定地はこの 2 か所の試掘調査地を含むため、京都市の指導のもと、有限会社京都平安文化財が発掘調査の委託を受け実施することとなり、文化財保護法 92 条に基づき、2013 年 10 月 28 日に京都府教育委員会に発掘調査の届出を行った。

目　的　当調査地は安土桃山時代には伏見城跡の生駒讃岐守の屋敷跡推定地、江戸時代には伏見奉行所与力組屋敷跡にあたる。また、調査地南側は弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である桃陵遺跡にもあたる。試掘調査で検出された安土桃山時代、江戸時代の遺構の構造、展開、古墳周濠の可能性のある遺構の展開と古墳周濠であるかの確認に重点の置き、周辺と併せ当地の歴史的変遷及び実態を理解することを主な目的とした。

第 2 節　発掘調査の経過

1. 発掘調査の概要

集合住宅建設予定地内の北辺側に第 1 調査区を、南辺側に第 2 調査区と 2 ヶ所の調査区を設け、2013 年 10 月 30 日に調査区を設定し、11 月 5 日から発掘調査の実務を開始した。

第 1 調査区では、重機により現代、近代整地土層を主に除去し、その後の精査作業により近世、近代の整地土層が同一面にある状態で明治時代以降の工兵第十六大隊に関連すると思われる堀状遺構を検出した。その後さらに掘削して全面が近世整地土層になった状態で精査し、江戸時代の遺構を検出した。検出した遺構は主に土坑が中心で、柱穴、井戸があった。それらの調査が終了し、近世整地土層を掘削後に地山層上面において、同一面上で江戸時代の遺構、安土桃山から江戸時代初期の遺構、少数ながら中世の遺構を検出した。

その中で、礎石を据えた柱穴は 1 基検出したにとどまったが、他の柱穴との関係により建物の存在が確認された。また、井戸を 2 基検出したが、掘削中に埋土の崩落などの安全性を考慮したうえで、調査終了後に断割りし、下層は確認のみを行った。

第 2 調査区では、掘削深度を考慮し、段掘りにて重機掘削を行った。調査区内の近世整地土層掘削後、調査区東側にて地山層上で近世、中世の遺構を確認した。調査終了後、西側の整地土層を掘り下げ、古墳時代の溝を検出した。古墳時代の溝からは円筒埴輪、人型埴輪が出土している。溝は調査区西側で、西壁から南壁に向かって緩く弧を描き円形を呈していることから古墳周濠であることが確認できた。

また、周濠内側となる南壁にて墳丘盛土の一部となる可能性のある黄褐色粘質土層が存在したため段掘り部分の整地土層を掘削して検出、調査終了後に断割りをした。

12 月 20 日に調査終了、12 月 26 日にすべての作業を終了した。

尚、各遺構の土層断面、平面実測は適宜行った。

2. 日誌抄

10 月 30 日　調査区設定
11 月 5 日　資材搬入　第 1 調査区重機掘削　検証委員 南博史氏来訪　京都市検査
11 月 6 日　第 1 調査区重機掘削　遺構検出作業　壁面精査
11 月 7 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区重機掘削
11 月 8 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区重機掘削
11 月 11 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区壁面精査　基準点測量
11 月 12 日　第 1 調査区近代遺構検出写真撮影後、掘削開始　第 2 調査区壁面精査
11 月 13 日　第 1 調査区撹乱掘削作業　第 2 調査区壁面精査　検証委員 南博史氏来訪　京都市検査
11 月 14 日　第 1 調査区撹乱掘削作業　小森俊寛氏来訪
11 月 16 日　第 1 調査区撹乱掘削作業
11 月 18 日　第 1 調査区清掃作業　撹乱掘削後近代遺構検出写真撮影　第 2 調査区遺構検出作業　京都市検査
11 月 19 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区精査
11 月 20 日　第 1 調査区近代堀状遺構掘削　第 2 調査区遺構検出作業　検証委員 南博史氏来訪　京都市検査
11 月 21 日　第 1 調査区近代堀状遺構掘削　第 2 調査区清掃作業　中世、近世遺構検出写真撮影
11 月 22 日　第 1 調査区撹乱残り掘削　第 2 調査区遺構掘削作業　京都市検査　伏見城研究会来訪
11 月 26 日　第 1 調査区清掃作業　近代遺構完掘・江戸時代遺構検出写真撮影
　第 2 調査区遺構掘削　清掃作業
11 月 27 日　第 1 調査区遺構掘削　第 2 調査区中世、近世遺構完掘写真撮影　伏見城研究会来訪
11 月 28 日　第 1 調査区遺構掘削　第 2 調査区遺構検出作業　京都市検査
11 月 29 日　第 1 調査区遺構掘削　第 2 調査区遺構検出作業
11 月 30 日　第 1 調査区遺構掘削　小森俊寛氏来訪
12 月 2 日　第 1 調査区清掃作業　第 2 調査区清掃作業　古墳時代遺構検出写真撮影　検証委員 南博史氏来訪
12 月 3 日　第 1 調査区清掃作業　江戸時代遺構完掘写真撮影　第 2 調査区遺構掘削　京都市検査
12 月 4 日　第 1 調査区整地土層掘削　第 2 調査区遺構掘削
12 月 5 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区遺構掘削
12 月 6 日　第 1 調査区遺構検出作業　第 2 調査区遺構掘削
12 月 7 日　第 1 調査区清掃作業　安土桃山、江戸時代遺構検出写真撮影　第 2 調査区遺構掘削　京都市検査
12 月 9 日　第 1 調査区遺構掘削
　第 2 調査区段掘り部分掘削　中世、近世遺構検出写真撮影　遺物洗浄作業　京都市検査
12 月 10 日　第 1 調査区遺構掘削
　第 2 調査区段掘り部分遺構掘削　中世、近世遺構完掘写真撮影　遺物洗浄作業　京都市検査
12 月 11 日　第 1 調査区遺構掘削　第 2 調査区段掘り部分遺構掘削　遺物洗浄作業
12 月 12 日　第 1 調査区遺構掘削
　第 2 調査区清掃作業　古墳時代遺構完掘写真撮影　遺物洗浄作業　京都市検査
12 月 13 日　第 1 調査区遺構掘削　第 2 調査区断割り　遺物洗浄作業
12 月 14 日　第 1 調査区遺構掘削
12 月 16 日　第 1 調査区遺構掘削　清掃作業　遺物洗浄作業
12 月 17 日　第 1 調査区清掃作業　中世、安土桃山、江戸時代遺構完掘写真撮影　遺物洗浄作業　京都市検査
12 月 19 日　遺物洗浄作業
12 月 20 日　第 1 調査区井戸断割り　発掘調査終了　遺物洗浄作業　検証委員 南博史氏来訪
12 月 21 日　撤収　第 2 調査区埋め戻し
12 月 24 日　第 1 調査区埋め戻し　整理作業開始
12 月 25 日　第 1 調査区埋め戻し
12 月 26 日　撤収・埋め戻し終了

第２章　位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

本調査地は桃山丘陵が緩く下がる丘陵西斜面中位付近に、また旧巨椋池北岸側にも位置する。丘陵斜面は調査地よりさらに西へ下がり低地へと至る。現在では調査地の東側に国道 24 号線、西側に近鉄京都線が走っている。北側には安土桃山時代の伏見城大手門から西に延びる通りであった大手筋が走り、南側には豊臣秀吉によって旧巨椋池東辺～西辺に築かれた堤防により付替えられた宇治川が流れている。（図 1・図版 1）

調査地は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての豊臣秀吉、徳川家康の伏見城城下町の期間は、伏見城西側で大手筋南側の武家屋敷地区にある生駒讃岐守屋敷跡推定地とされている。江戸時代前期の伏見城廃城後は伏見奉行所与力組屋敷地となる。明治時代に入ると、旧陸軍工兵第十六大隊の兵営地となった。

また、調査地南側は弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である桃陵遺跡の範囲の北辺部にも位置している。

第２節　歴史的環境

調査地周辺では、東側に貝塚が発見された泰長老遺跡があり、また、北側に縄文土器の散布地である金森出雲遺跡[1]があり、早くから人々が生活していたことが窺える。南側には弥生時代前期末から中期の集落遺跡に位置付けられている桃陵遺跡が所在している。集落の中心は明らかとなっていないが、既発掘調査[2]において集落の一端を示すとみられる柱穴や溝、方形周溝墓が７基検出されている。

古墳時代になると中期には桃山丘陵東斜面に黄金塚１号墳、２号墳などの前方後円墳[3]が築造され、後期には丘陵西斜面に桃山古墳群[4]が築造される。

飛鳥時代には明確な遺跡はなく奈良時代になると、再び桃陵遺跡においても集落が営まれ、調査地北側には御香宮廃寺が創建

図２　伏見九郷図
（註 7）より

される。

平安時代後期には、文献上では名はすでに知れているが、実際の所在地は不明である橘俊綱の伏見山荘が営まれる[5]。調査地周辺では平安時代後期の建物跡や池跡が確認されており、貴族の別荘に関連するものとみられている[6]。

俊綱が寛治八（1095）年に歿して後、平安時代末期頃には伏見山荘のあった地は院の御領となり、鎌倉時代になると皇室の伏見殿が営まれていたようである[7]。室町時代後期頃から安土桃山時代初期頃には伏見九郷（図 2）といわれる村落が点在し、調査地はその中の森村の一部であったとみられる[8]。また、室町時代後期頃には将軍足利義晴の家臣三淵藤英によって、伏見山に城が築かれていたようである[9]。

安土桃山時代となる文禄元（1592）年に豊臣秀吉は伏見に隠居所を建造することを決定する。建築資材は他城からの移築を多用するなどして確保し運び入れ、間を置かず城としての威容を整える。これが指月の伏見城であり、現在の泰長老町に範囲が指定されている[10]。

だが、文禄五（1596）年に大地震のため指月の城は倒壊してしまう。しかし、同年中には指月から東北の隣接地である木幡山へ再度築城を開始するのである。慶長三（1598）年に豊臣秀吉が死去すると、翌慶長四（1599）年に徳川家康が伏見城に入城することになる。

慶長五（1600）年には豊臣秀吉が築城した木幡山の伏見城は関ヶ原の前哨戦ともいうべき戦において豊臣方によって焼き払われるのである。関ヶ原の戦い終結後、徳川家康によって伏見

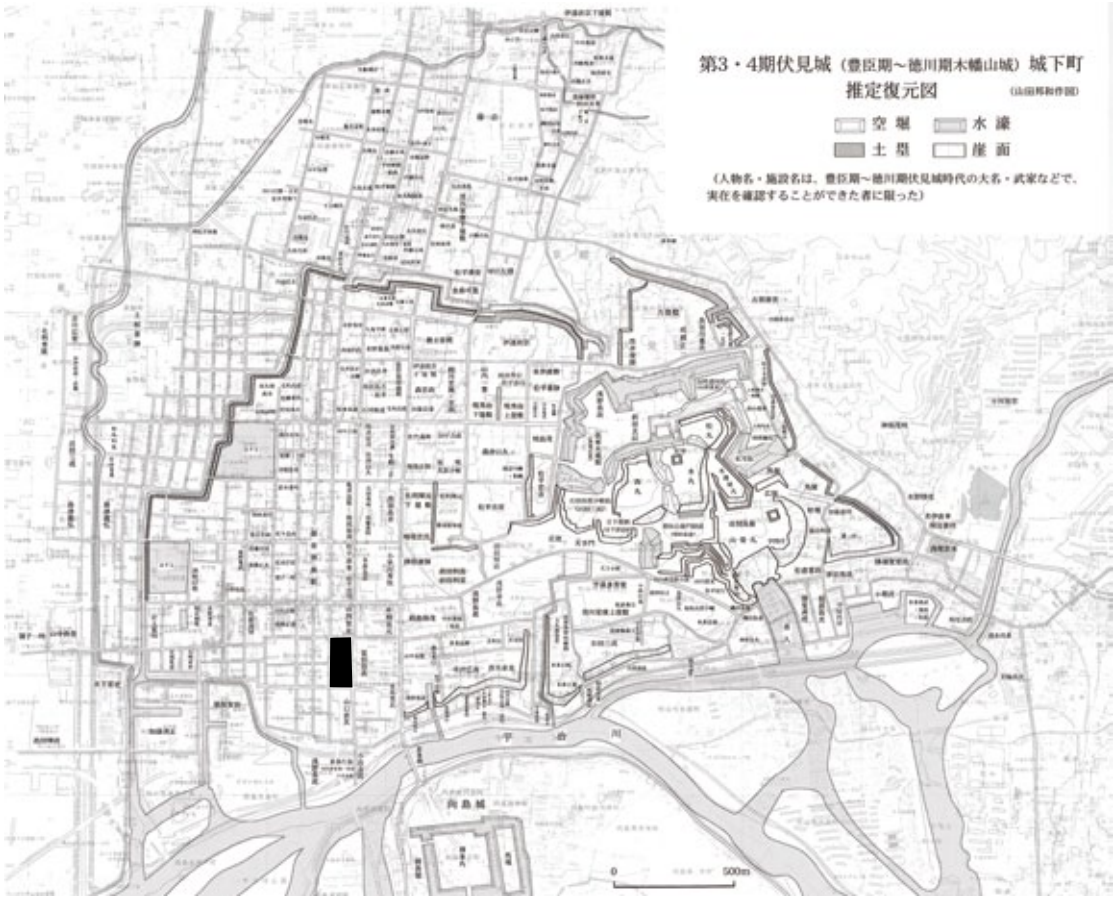


図３　伏見城・城下町復元図
（註 11 に調査地を含む生駒讃岐守屋敷跡推定地を色塗りした。
ここでの第３・４期とは山田氏の復元案の時期である）

城は修築され、畿内における拠点として再び徳川家康は入城している。その後、元和五（1619）年に伏見城は廃城となる。

その過程において、伏見城の城下町は城の発展と共に整備が進み大名が屋敷を構えるようになる。その中で、調査地は生駒讃岐守、すなわち生駒一正の屋敷地に推定されている[11]（図 3）。生駒一正は初め父親正と共に織田信長に仕えていたが、信長死去後は豊臣秀吉に仕える。そして、関ヶ原の戦いの段階ではすでに徳川家康の味方となっており、関ヶ原の戦いの功により父の所領である讃岐国 17 万 1800 石餘を安堵されている人物[12]である。

元和九（1623）年に小堀遠州が伏見奉行職に就任すると、それまで奉行所があった清水谷では交通の利便が悪いことなどから、寛永二（1625）年に調査地東側の富田信濃守屋敷跡への奉行所移転を願い出ている[13]。以後、慶応四（1868）年に鳥羽･伏見の戦いで焼失するまで、江戸時代を通じて、この地に伏見奉行所が置かれていた。伏見奉行所の周囲には与力、同心の組屋敷が配置されており、伏見奉行所とその関連施設が建っていた敷地は広大なものであった（図 4）。

『伏見鑑』[14] によると奉行所北側には奉行所同心の組屋敷、西側には奉行家老、公用人、奉行所与力、同心の組屋敷、南側にも同様に、奉行所与力、同心の組屋敷が、それぞれ名と共に記されている。図 5 は安永九（1780）年の時期の与力、同心の組屋敷の配置となっている。当時の伏見奉行職には小堀政方が任じられていた。この小堀政方は後に文殊九助らによって幕府に直訴され、悪政が暴かれて改易処分となる[15]。

そして、慶応四（1868）年の鳥羽･伏見の戦いにおいては、伏見奉行所は幕府軍の根拠地となっていたが、官軍によって砲撃され、奉行所及び関連施設は焼失する。

図 4　伏見奉行所図（註 11）より

図 5　伏見奉行所組屋敷配置図
（註 7）より

鳥羽･伏見の戦い後は、すぐに官軍の御親兵の駐屯地となり、明治時代以降は旧陸軍の工兵第十六大隊の兵営地として利用されるようになる。昭和時代に入り戦後は連合国軍の駐屯地を経て国家公務員宿舎が建てられ、現在に至る。

第３節　周辺の調査

伏見城跡に関する発掘調査の事例は多く、大名屋敷の門跡や石垣、町家や墓などが調査されている。伏見城が存在していた時期は安土桃山時代から江戸時代初期であるが、それ以外の時代の遺構も多く発掘調査されている。ここでは、調査地のごく周辺でなされた発掘調査の概略を記す（図６・表 1）。

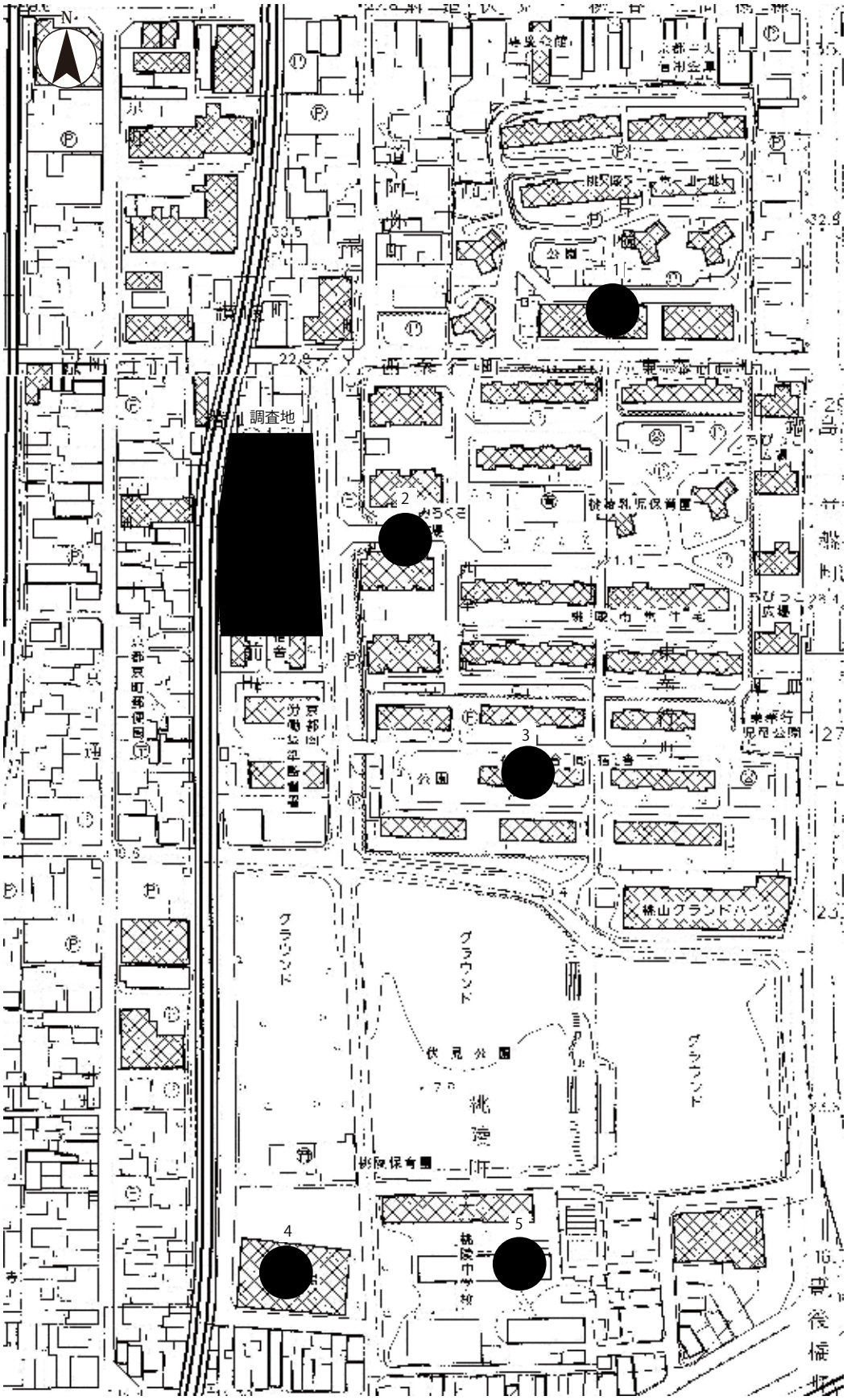
調査地北東側の桃陵市営団地立替えに伴う発掘調査において[16]、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての建物跡、柵列、溝、池跡、江戸時代の建物跡、柵列、蹲踞、胞衣壺等埋納遺構などが検出している。遺物は平安時代から近代に至るまでの土器、陶磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品が出土しており、金箔瓦も少量出土している。

調査地東側に隣接する桃陵市営住宅立替に伴う発掘調査[17]において、平安時代の土坑、溝、池跡、安土桃山時代の柱穴、土坑、溝、門跡、池跡、江戸時代の建物跡、土坑、溝、井戸、石垣、便所などが検出している。遺物は古墳時代から近世に至るまでの土器、陶磁器、瓦、木製品、石製品が出土しており、瓦には 50 点以上の金箔瓦がある。

そのすぐ南側の公務員宿舎伏見住宅整備事業において実施された発掘調査[18]では、弥生時代の建物跡、土坑、溝、平安時代の建物跡、柵列、土坑、溝、安土桃山時代の柱穴、土坑、溝、門跡、堀、江戸時代の建物跡、土坑、溝、井戸、石垣、堀などが検出している。この内、堀は安土桃山時代から江戸時代末にかけて連続して利用されていたものであり、遺物は安土桃山時代から江戸時代末期の土師器、陶磁器、瓦、木製品、金属製品が出土し、瓦には金箔瓦が少数、木製品には墨書のある木簡、金属製品には鍍金された煙管がある。また、江戸時代の石垣、及び側溝を覆っていた焼土中から「享保十一丙午年七月吉日」と側面に銘文の彫られた鬼瓦が出土している。遺物は他に弥生時代から近代に至るまでの土器、陶磁器、瓦、木製品、土製品、石製品、金属製品が出土している。

また、調査地南側の桃陵町の体育館建設に伴う発掘調査[19]において、弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の柱穴、鎌倉時代の墓跡、安土桃山時代から江戸時代初期の柱穴、土坑、江戸時代の柱穴が検出されている。遺物は弥生時代の土器、古墳時代の埴輪、近世から中世に至るまでの土器、陶磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品が出土している。瓦中には多数の金箔瓦、木製品中には墨書のある木簡がある。

そして、桃陵中学校の増築工事に伴う発掘調査[20]において、安土桃山時代の溝状遺構、井戸状遺構、江戸時代の庭池状遺構、井戸などを検出している。遺物は弥生時代から近世に至るまでの土器、陶磁器、瓦、木製品、土製品、金属製品が出土している。


N
調査地
1
2
3
4
5
公園
グラウンド
伏見公園
桃陵
桃陵保育園
桃陵中学校
株山グランドハイツ
東海
東海竹
児童公園
京都市営地下鉄
京都市営地下鉄
京都市営地下鉄

番号	所在地	推定屋敷地	調査概要	参考文献
1	伏見区片桐町	片桐市正	安土桃山時代から江戸時代初期にかけての柱穴、溝、池跡、江戸時代の柱穴、土坑、溝などを検出。	『伏見奉行所発掘調査報告 2 －桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査ー』京都市住宅局　伏見城研究会 1997 年
2	伏見区西奉行町	富田信濃守	平安時代の柱穴、土坑、溝、池跡、安土桃山時代の土坑、門跡、池跡、江戸時代の土坑、石垣などを検出。	『伏見奉行所発掘調査報告 －桃陵団地立て替え工事に伴う埋蔵文化財調査ー』京都市住宅局　伏見城研究会 1990 年
3	伏見区西奉行町・東奉行町	富田信濃守	弥生時代の柱穴、土坑、溝、飛鳥・奈良・平安・鎌倉時代の柱穴、土坑、溝、安土桃山時代から江戸時代末にかけての堀、江戸時代の柱穴、土坑、溝、石垣などを検出。	『伏見城跡・桃陵遺跡　公務員宿舎伏見住宅（仮称）整備事業』西近畿文化財調査研究所 2010 年
4	伏見区桃陵町	山口駿河守	弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の柱穴、安土桃山時代から江戸時代初期にかけての柱穴、土坑などを検出。	『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
5	伏見区桃陵町	石川玄蕃	安土桃山時代の溝状遺構、井戸状遺構、江戸時代の庭池状遺構、井戸などを検出。	『伏見城武家屋敷跡発掘調査報告』大阪経済法科大学 1976 年

表 1　周辺発掘調査

註

1)　京都市文化市民局『京都市遺跡地図台帳【第 8 版】』2007 年
2)　註 1) に同じ
3)　花園大学黄金塚 2 号墳発掘調査団『花大考研報告 10　黄金塚 2 号墳の研究』1997 年
4)　註 1) に同じ
5)　『中右記』十二月廿四条
6)　京都市住宅局　伏見城研究会『伏見奉行所発掘調査報告』1990 年
7)　伏見町役場『京都府　紀伊郡誌　伏見町誌』臨川書店 1972 年
　京都市『史料京都の歴史　第 16 巻伏見区』平凡社 1991 年
8)　伏見町役場『京都府　紀伊郡誌　伏見町誌』臨川書店 1972
9)　註 8) に同じ
10)　註 1) に同じ
11)　加藤次郎『伏見安土・桃山の文化史』1953 年
　山田邦和「伏見城とその城下町の復元」日本史研究会『豊臣秀吉と京都』文理閣 2001 年
12)　『寛政重修諸家譜』
13)　註 8) に同じ
14)　新撰京都叢書刊行会『新撰京都叢書　第五巻』臨川書店 1986 年
15)　伏見義民碑保存会『天明伏見義民傳　雨中之鑵子』1937 年
16)　京都市住宅局　伏見城研究会『伏見奉行所発掘調査報告 2』1997 年
17)　註 6) に同じ
18)　西近畿文化財調査研究所『伏見城跡・桃陵遺跡』2010 年
19)　（財）京都市埋蔵文化財研究所『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1993 年
20)　大阪経済法科大学『伏見城武家屋敷跡発掘調査報告』1976 年

第３章　調査の方法

試掘調査の結果により調査区は、集合住宅建設予定敷地の内、北辺側と南辺側に決定した。北辺側を第１調査区、南辺側を第２調査区とした（図７）。重機掘削が終了した後、４級公共基準点により敷地内に基準点（世界測地系　平面直角座標系Ⅵ系　Ｘ＝－ 118558.987　Ｙ＝－ 21394.603）を設置した。

試掘調査の結果から、第１調査区では現代、近代に撹乱または削平されているが、近世整地土層、地山層上から、柱穴や土坑の検出が予想された。現地表面から遺構面直上まで重機掘削し、人力により掘削できる厚さで表土を残し、それから遺構面検出まで掘削した。掘削作業時の排土運搬はすべてベルトコンベヤーを使用せず人力にて行った。

第２調査区では試掘調査の結果から地山層で古墳時代の遺構がすでに確認されていたため、重機掘削後、地山層上層の近世整地土層での遺構の有無に注意しながら、掘削、精査を行った。また、古墳時代の遺構は古墳周濠の可能性があるため、その平面形や範囲を確認しながら精査を行った。掘削作業時の排土運搬はベルトコンベヤーを使用せず、人力にて行った。

検出した遺構は遺物や埋土に注意しながら掘削するように努めた。

今回、工程上、調査区内にグリット設定をしていないため、遺構以外の遺物は取り上げ時に位置を簡易に記録するようにした。

調査区内の遺構平面図、遺構土層断面図、壁面土層断面はトータルステーション及び電子平板、写真計測により行った。

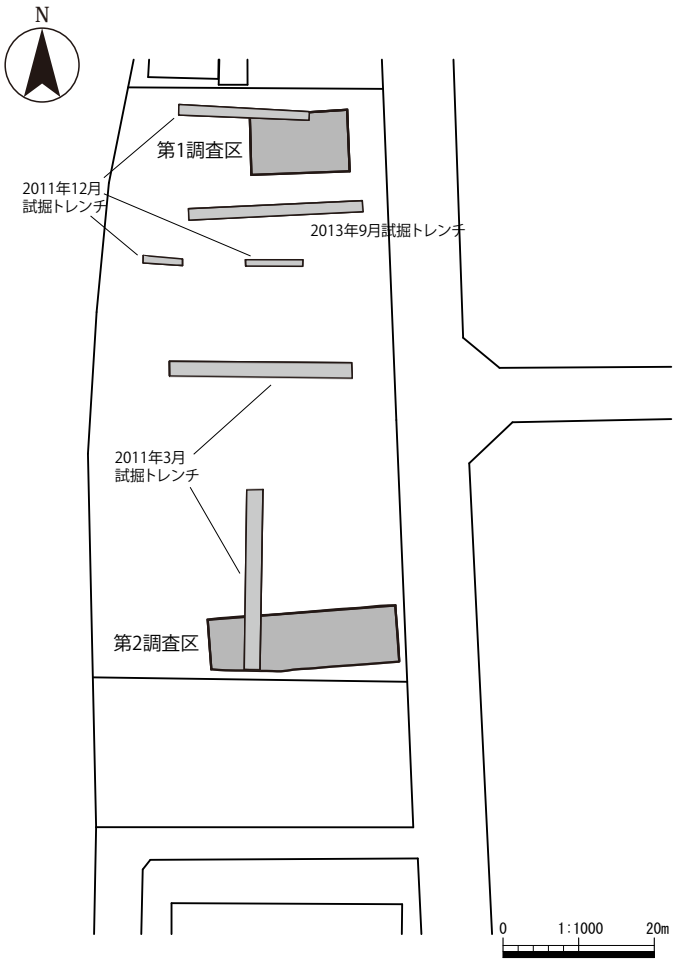


図７　調査地配置・地区割り図（1：1000）

第４章　第１調査区の遺構・遺物

第１節　第１調査区の基本層序

調査地の基本層序は現代整地土層、現代から近代の耕作土層、近代整地土層、近世整地土層、地山層となる。最終遺構面である地山層は暗褐色の砂礫層と赤褐色の粘質土層からなる。

調査前の標高は 22.20 ～ 22.50m で、現代整地土層の厚さが 0.7 ～ 1.1m ある。この整地層はアスファルト・コンクリートを多く含み調査区全体に広がる。北壁、東壁、南壁はその下層に耕作土層が 0.1m 程あり、黒褐色土が残る。

耕作地土層の下層には近代整地土層が全面に拡がるが、大半は撹乱されている。そして、現地表面から－1.5 ～ －1.7m で調査区東側では黒褐色粘質土、西側では褐色粘質土の近世整地土層を確認した。しかし、調査区中央部分は近代の遺構が地山層まで掘られているため近世整地土層はない。近世整地土層を掘削後、標高 20.60m 前後で地山層となる。

また、地山層は全体的に平坦に近いため、安土桃山時代から江戸時代初期の豊臣・徳川の伏見城城下町整備時や江戸時代前半の伏見奉行所成立時に削平されたと考えられる。近世整地土層は伏見奉行所成立以降、現代に至るまでに造成工事などで大きく削平されていると考えられる。

遺構面は近代整地土層、近世整地土層、地山層となり、各層で遺構を検出した。地山層では中世から近世の遺構を検出した（図８・9）。

第２節　第１調査区の遺構

検出した遺構は、近代の堀状遺構、近世の柱穴、土坑、溝状遺構、井戸、中世の柱穴、土坑である。遺構は、近代整地土層、近世整地土層、地山層で検出した。地山層上では、中世から近世の遺構を検出したため、遺物や埋土、検出状況により遺構の時期ごとに報告する（表 2）。平面図は中世を１とし、近世を２、近代を３として図示した。

時　代	遺　構	備　考
中世	柱穴４基、土坑１基	安土桃山時代以前
近世	建物跡１棟、柱穴 14 基、土坑 13 基、溝状遺構２条、井戸２基	安土桃山～江戸時代
近代	堀状遺構３条	明治時代以降

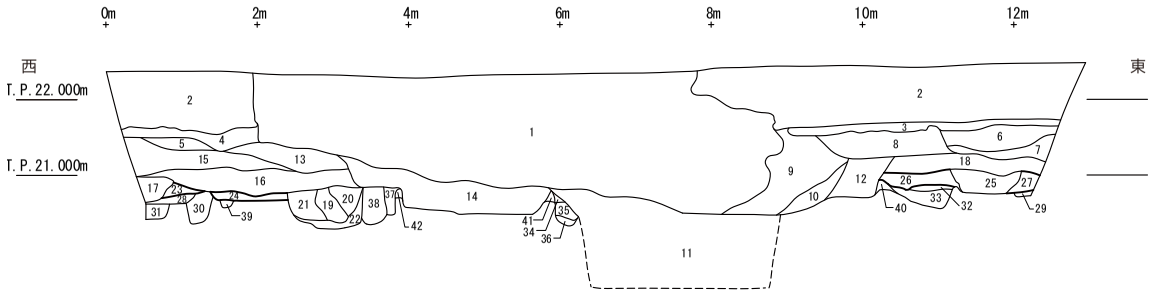
表２　第１調査区遺構一覧表

1.　中世の遺構

伏見城及び城下町が整備される以前の中世の遺構には柱穴、土坑がある。

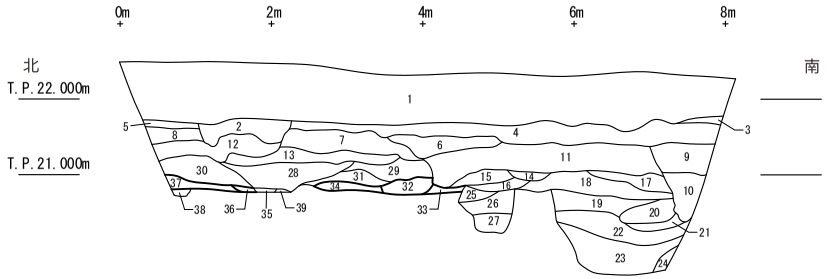
柱穴 50（図 10・13・図版 3・4）　調査区西側で検出した楕円形になるとみられる柱穴である。検出面で

北壁土層断面図



1　試掘撹乱
2　現代整地土
3　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫少量含む）《耕作土》
4　10YR2/2 黒褐色粘質土
5　10YR3/4 暗褐色粘質土（φ2～5cm程の礫少量含む）
6　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混ざる）
7　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
8　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土がブロック状に混ざる）
9　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ0.5～5cm程の礫少量含む）
10　10YR3/3 暗褐色粘質土（10YR4/4 褐色粗砂混ざる）
11　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ0.5～5cm程の礫多量含む）
《堀状遺構33》
12　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（φ0.5～3cm程の礫やや多量含む）《溝状遺構3》
13　10YR2/2 黒褐色粘質土（φ2～20cm程の礫多量含む）
14　10YR3/3 暗褐色粘質土（φ2～10cm程の礫含む）
《堀状遺構32》
15　10YR2/3 黒褐色粘質土（φ10cm程の礫少量含む）
16　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
17　10YR2/3 黒褐色粘質土（φ5～10cm程の礫多量含む）《近代撹乱》
18　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
19　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂
20　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
21　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（φ2～20cm程の礫含む）
22　10YR2/3 黒褐色粘質土
《土坑52》
23　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
24　10YR3/4 暗褐色粘質土
《近世整地土》
25　10YR4/2 灰黄褐色粘質土粗砂混じり（φ1～4cm程の礫少量含む）《土坑1》
26　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
27　10YR3/1 黒褐色粘質土
《近世整地土》
28　10YR3/4 暗褐色粘質土《土坑45》
29　10YR3/2 黒褐色粘質土《柱穴59》
30　10YR2/3 黒褐色粘質土《柱穴74》
31　10YR2/3 黒褐色粘質土《柱穴75》
32　7.5YR3/3 暗褐色粘質土
33　7.5YR4/3 褐色粘質土
《土坑92》
34　10YR2/1 黒褐色粘質土
35　10YR3/1 黒褐色粘質土
36　10YR3/1 黒褐色粘質土
（φ0.5～1.5cm程の礫多量に含む）
《柱穴63》
37　10YR3/2 黒褐色粘質土《柱穴71》
38　10YR4/2 灰黄褐色粘質土《柱穴72》
39　10YR3/3 暗褐色粘質土《柱穴73》
40　7.5YR3/2 黒褐色粘質土
41　7.5YR4/4 褐色粘質土
42　10YR4/4 褐色粘質土
《地山》

東壁土層断面図

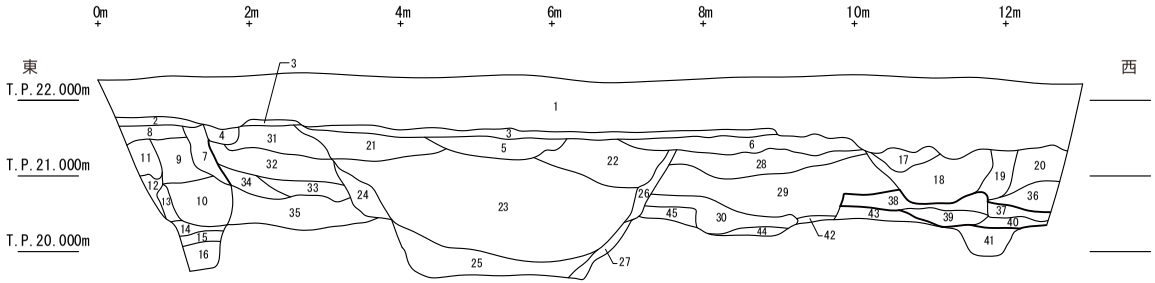


1　現代整地土
2　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む　φ5cm程の礫少量含む）
3　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫含む）《耕作土》
4　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
5　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫含む）《耕作土》
6　2.5Y3/2 黒褐色粘質土と10YR3/3 暗褐色粘質土の混ざり土
7　10YR3/2 黒褐色粘質土と10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土の混ざり土（7.5YR4/4 褐色粘質土がブロック状に少量混ざる）
8　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土（10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混ざる）
9　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む　φ1～5cm程の礫少量含む）
10　10YR3/2 黒褐色粘質土（漆喰を含む）
《近代撹乱》
11　10YR2/2 黒褐色粘質土と10YR3/3 暗褐色粘質土の混ざり土（φ0.5～4cm程の礫少量含む 瓦片含む）
12　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂
13　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ0.5～1.5cm程の礫やや多量含む）
14　10YR3/3 暗褐色粘質土
15　10YR3/3 暗褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ0.7～3cm程の礫やや多量含む）
16　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土粗砂混ざり（φ1.5～6cm程の礫多量含む）
17　10YR5/6 黄褐色粘質土と10YR3/3 暗褐色粘質土の混ざり土
18　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ3～8cm程の礫かなり多量含む）
19　10YR5/2 黒褐色粘質土（φ4～5cm程の礫かなり多量含む）
20　10YR1.7/1 黒色粘質土（φ2～10cm程の礫多量含む）
21　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1.5～4cm程の礫少量含む）
22　7.5YR3/2 黒褐色粘質土（φ0.5～5cm程の礫かなり多量含む）
23　10YR2/2 黒褐色粘質土（φ1.5～3cm程の礫少量含む）
24　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ3～5cm程の礫少量含む 10YR4/6 褐色細砂混ざる）
25　10YR3/2 黒褐色粘質土粗砂混ざり（炭化粒わずかに含む φ1～3cm程の礫やや多量含む）
26　10YR6/6 明黄褐色シルト（φ1～4cm程の礫多量含む）
27　7.5YR4/6 褐色粗砂（φ2～5cm程の礫かなり多量含む）
《近代撹乱》
28　10YR2/1 黒色粘質土（7.5YR3/4 暗褐色粘質土がブロック状に少量混ざる φ0.5～5cm程の礫少量含む）
29　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ0.5～3cm程の礫多量含む）
30　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
31　10YR4/2 灰黄褐色粘質土
32　10YR3/2 黒褐色粗砂（炭化粒わずかに含む 瓦片含む）
33　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫やや多量含む）
34　10YR3/3 暗褐色粗砂
《近世整地土》
35　10YR3/1 黒褐色粘質土《土坑56》
36　10YR3/1 黒褐色粘質土（鉄分粒わずかに含む）
37　10YR3/1 黒褐色粘質土（7.5YR4/4 褐色粘質土混ざり）
《近世整地土》
38　10YR3/2 黒褐色粘質土《柱穴59》
39　10YR3/2 黒褐色粘質土（7.5YR4/4 褐色粘質土混ざり）《土坑57》

0　1:100　5m

図8　第1調査区北・東壁土層断面図

南壁土層断面図

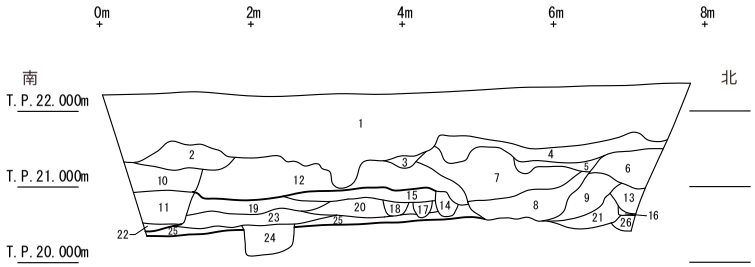


31　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
32　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
33　10YR2/2 黒褐色粘質土
34　10YR2/2 黒褐色粘質土（φ0.5～5cm程の礫少量含む 瓦片を含む）　《堀状遺構94》
35　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂（φ1～10cm程の礫かなり多量含む）
36　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む　7.5YR4/4 褐色粘質土をブロック状に少量含む）
37　7.5YR2/1 黒褐色粘質土（7.5YR3/3 暗褐色粘質土をブロック状に含む）《土坑46》
38　7.5YR4/4 褐色粘質土
39　7.5YR4/3 褐色粘質土　《近世整地土》
40　7.5YR3/3 暗褐色粘質土
41　10YR4/3 にぶい黄褐色粘土細砂混じり（φ1～3cm程の礫少量含む）《木根撹乱》
42　7.5YR4/6 褐色粘質土
43　7.5YR4/4 褐色粘質土
44　7.5YR5/6 明褐色粘質土粗砂混じり（φ1～5cm程の礫かなり多量含む）　《地山》
45　7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土

1　現代整地土
2　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫含む）《耕作土》
3　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫含む）
4　2.5Y4/1 黄灰色粘質土《現代撹乱》
5　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（水道管）《現代撹乱》
6　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂を板状に含む）
7　10YR3/2 黒褐色粘質土
8　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
9　10YR2/2 黒褐色粘質土
10　10YR3/3 暗褐色粗砂（φ0.5～5cm程の礫かなり多量含む）
11　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ1～5cm程の礫少量含む）
12　10YR3/2 黒褐色粘質土（漆喰を含む）
13　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ3～5cm程の礫多量含む）
14　7.5YR3/2 黒褐色粘質土（φ0.5～5cm程の礫かなり多量含む）
15　10YR2/2 黒褐色粘質土（φ1.5～3cm程の礫少量含む）
16　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ3～5cm程の礫少量含む 10YR4/6 褐色細砂混ざる）
17　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（コンクリート含む）
18　10YR3/3 暗褐色粘質土と10YR3/2 黒褐色粘質土の混ざり土（漆喰を含む）
《近代撹乱》

19　2.5Y3/1 黒褐色粘質土粗砂混ざり
20　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
21　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ1～3cm程の礫少量含む）
22　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む φ1～3cm程の礫やや多量含む）
23　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒やや多量含む φ1～5cm程の礫やや多量含む 焼瓦片含む）
24　10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂（0.5～3cm程の礫少量含む）
25　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土粗砂混じり
（10YR3/2 黒褐色粘質土をブロック状に少量含む φ1～3cm程の礫少量含む）
26　10YR4/1 褐灰色粘質土粗砂混じり（φ0.5～5cm程の礫少量含む）
27　10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂（φ1～3cm程の礫少量含む）
《堀状遺構33》
28　10YR3/2 黒褐色粘質土と10YR3/3 暗褐色粘質土の混ざり土
（10YR4/3 褐色粘質土をブロック状に少量含む）
29　10YR2/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む 瓦片を含む）
30　10YR3/3 暗褐色粘質土
（7.5YR4/4 褐色粘質土と10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土をブロック状に少量含む
炭化粒わずかに含む 瓦片、焼瓦を含む）
《堀状遺構32》

西壁土層断面図



1　現代整地土
2　2.5Y3/1 黒褐色粘質土
3　10YR2/1 黒色粘質土（炭化粒わずかに含む）
4　10YR2/2 黒褐色粘質土
5　2.5Y3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
6　10YR2/3 黒褐色粘質土（φ10cm程の礫少量含む）
7　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土をブロック状に少量含む）
8　10YR3/4 暗褐色粘質土（漆喰含む 瓦含む）
9　2.5Y3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む 漆喰を含む 瓦多量に含む）
10　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）
11　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む 7.5YR4/4 褐色粘質土をブロック状に少量含む）
《近代撹乱》
12　10YR3/2 黒褐色粘質土（10YR4/4 褐色粘質土をブロック状に少量、7.5YR4/4 褐色粘質土をブロック状に含む）
13　10YR2/3 黒褐色粘質土（φ5～10cm程の礫多量含む）《近代撹乱》
14　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　《柱穴49》
15　10YR3/2 黒褐色粘質土　《近世整地土》
16　10YR3/4 暗褐色粘質土　《土坑45》
17　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　《柱穴47》
18　10YR4/2 灰黄褐色粘質土　《柱穴41》
19　10YR3/2 黒褐色粘質土
20　10YR3/1 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）　《近世整地土》
21　10YR2/2 黒褐色粘質土（炭化粒わずかに含む）《土坑43》
22　7.5YR2/1 黒褐色粘質土（7.5YR3/3 暗褐色粘質土をブロック状に含む）《土坑46》
23　7.5YR3/1 黒褐色粘質土（土師器片含む）　《近世整地土》
24　7.5YR3/2 黒褐色粘質土　《柱穴82》
25　7.5YR3/3 暗褐色粘質土　《近世整地土》
26　10YR2/3 黒褐色粘質土　《柱穴75》

0　1:100　5m

図9　第1調査区南・西壁土層断面図

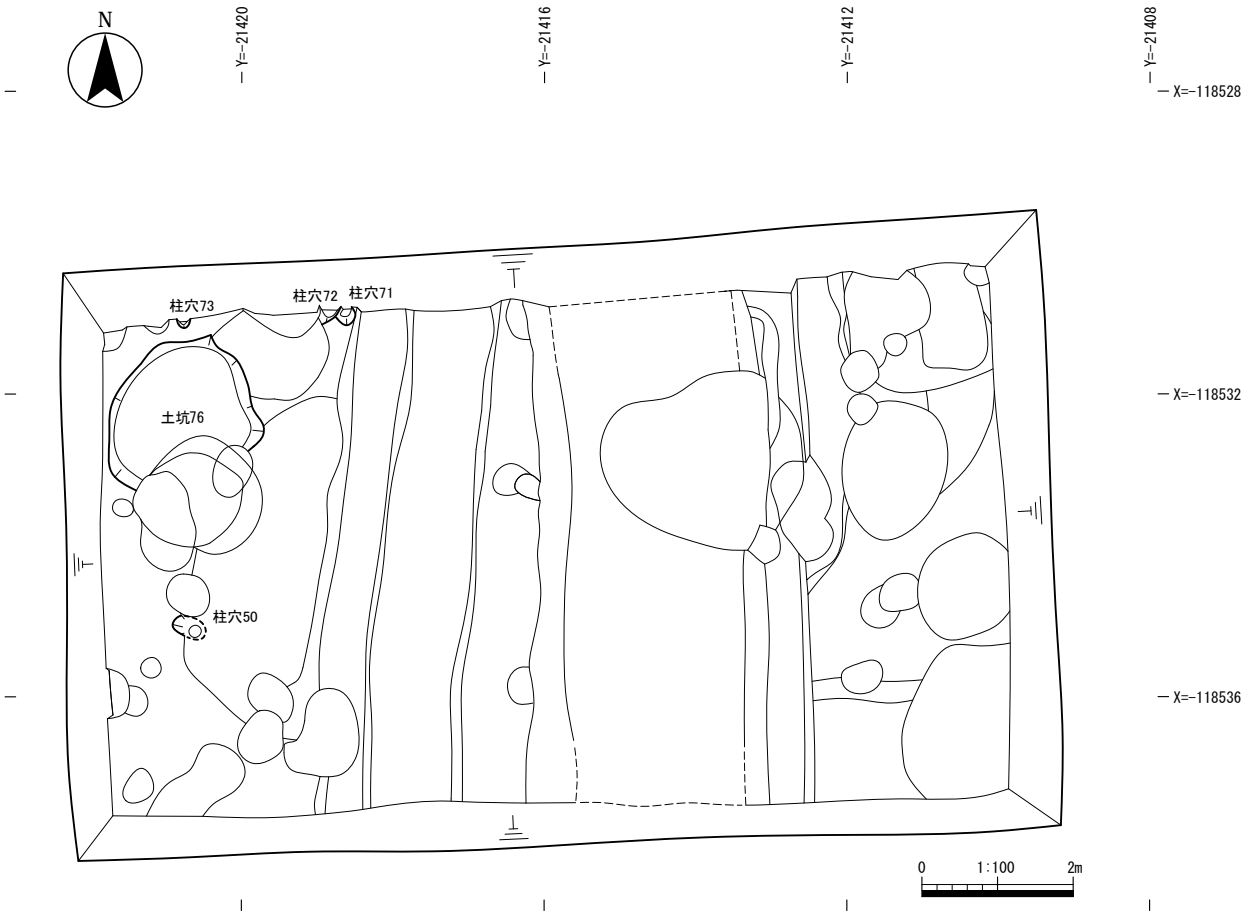


図 10　1．中世遺構平面図

掘方の長径は推定 0.48m、短径 0.28m、深さ 0.28m で、柱痕跡の長径 0.27m、短径 0.12m、深さ 0.22m ある。東側は土坑 38 に切られる。掘方埋土は明るめの黒褐色粘質土が主体で、柱痕跡埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦器、磁器、瓦が出土している。

柱穴 71（図 10･図版 3･4）　調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径 0.28m、短径 0.2m、深さ 0.17m である。西側は柱穴 72 に切られ、北側は北壁にかかるため、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦器が出土している。

柱穴 72（図 10・図版 3・4）　調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径 0.22m、短径 0.2m、深さ 0.37m である。西側は土坑 52 に切られ、北側は北壁にかかるため全体は不明である。埋土は灰黄褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

柱穴 73（図 10・図版 3・4）　調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径 0.18m、短径 0.1m、深さ 0.09m である。北側が北壁にかかるため全体は不明である。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は須恵器が出土している。

土坑 76（図 10・13・図版 4）調査区西側で検出した不整形な円形の土坑である。検出面で長径 2.1m、短径 2.0m、深さ 0.35m である。土坑 42・44 掘削後に検出した。南側は柱穴 90、土坑 44、井戸 35 に切られ、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、瓦、銭貨、焼土壁、上層の土坑 42 からの混入とみられる磁器が出土

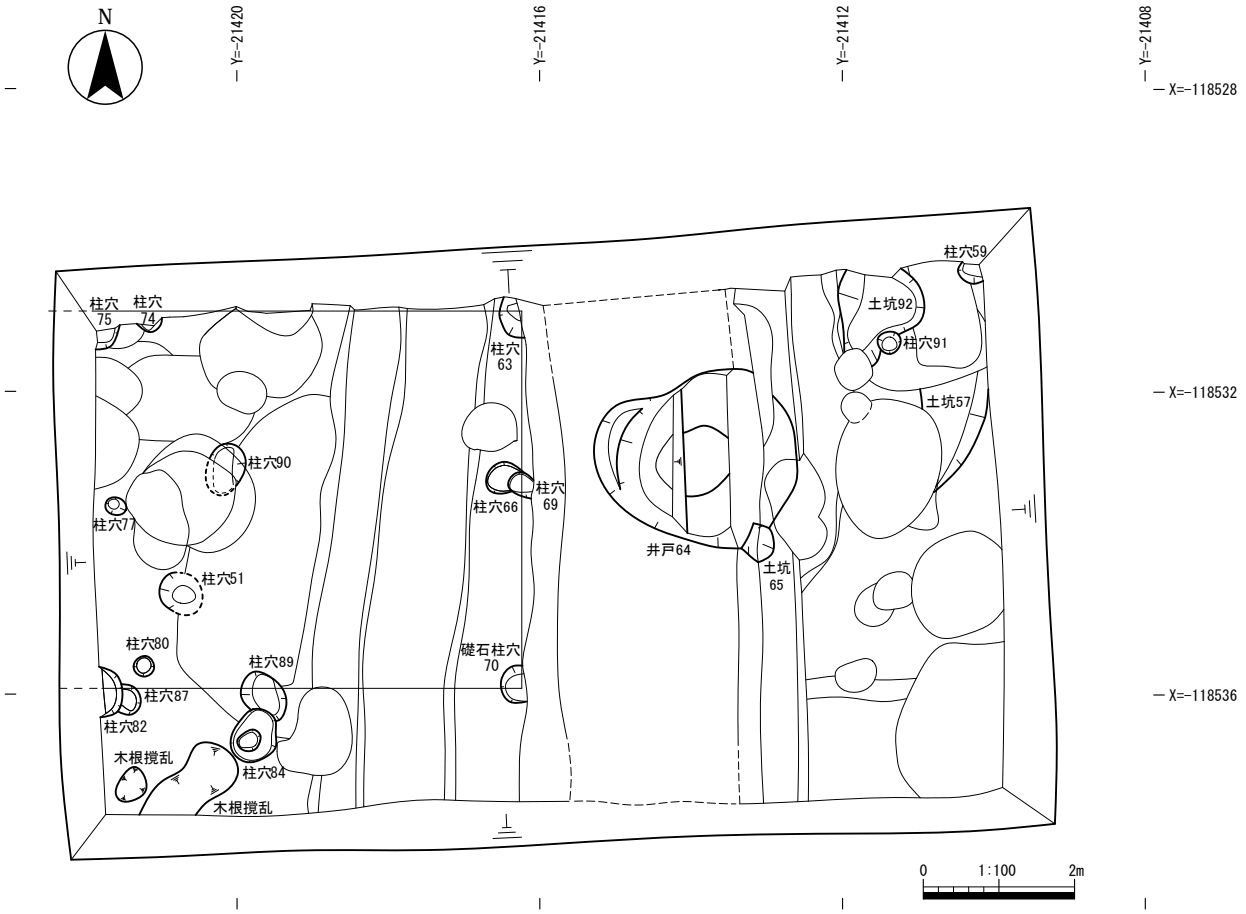


図 11　2－1. 近世遺構平面図（安土桃山～江戸時代初期）

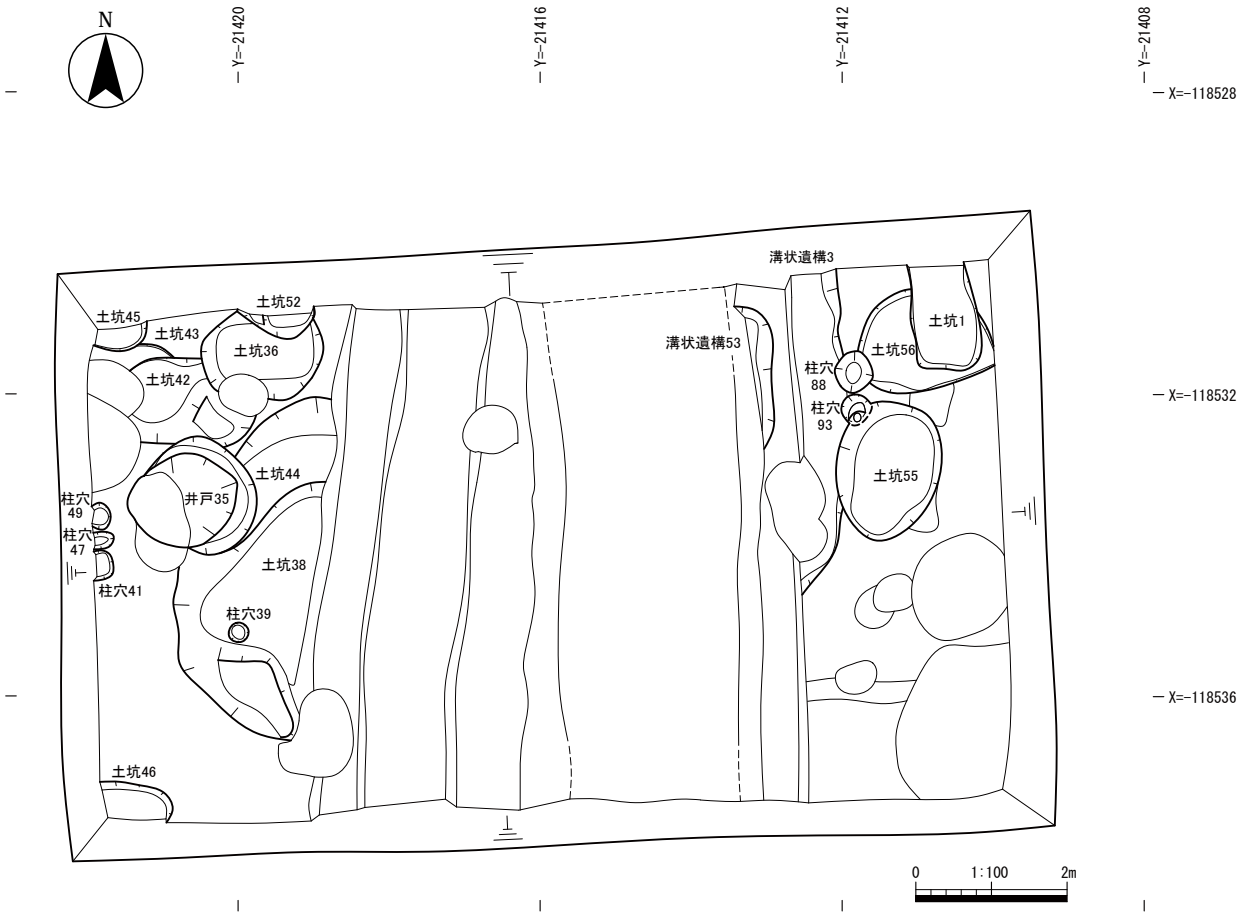


図 12　2－2. 近世遺構平面図（江戸時代）

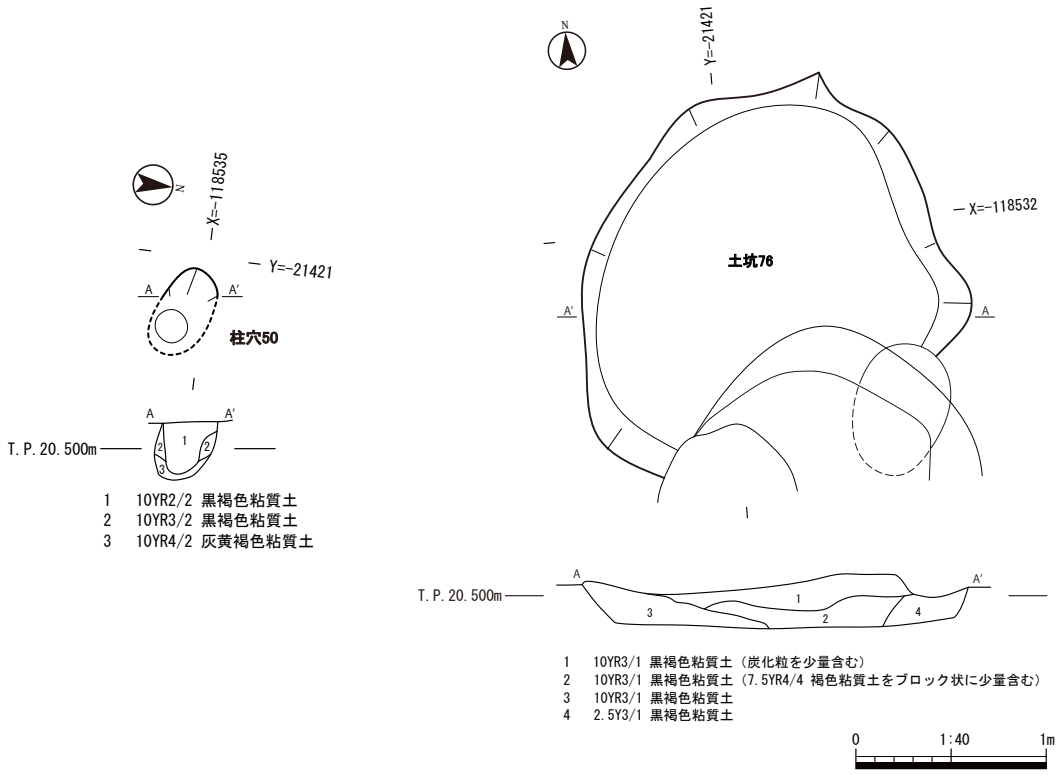


図 13　柱穴 50・土坑 76 平面・土層断面図

している。

2.　近世の遺構

近世の遺構には、安土桃山時代から江戸時代初期の豊臣・徳川の伏見城城下町であった時期、江戸時代前期以降の伏見奉行所が設置されていた時期の柱穴、土坑、溝状遺構、井戸がある。以下では安土桃山時代から江戸時代初期の遺構を 2－1、江戸時代の遺構を 2－2 とする。遺物はほとんど出土せず、各遺構の時期の決定は困難であるが、埋土及び検出状況から判断した。

2－1 安土桃山時代から江戸時代初期の遺構

掘立柱建物跡 1（図 11・14・表 3・図版 3・4）　調査区西側で検出した南北 2 間、東西 3 間以上とみられる建物跡である。検出面で南北 5.0m、東西 5.5m 以上となる。柱間は南北で北から 2.3m、2.7m となる。建物跡を構成するのは柱穴 63、66、69、70、75、89、82、87 である。いずれも一部が他の遺構に切られるか、壁にかかっているため、全体は不明である。いずれも楕円形に近く、長径 0.4 ～ 0.7m、短径は復元すると 0.5m 前後と推定できる。埋土は明るめの黒褐色粘質土と、暗褐色粘質土である。柱穴 70 には、長さ 0.28m、幅 0.28m、厚さ 0.07m の礎石が残こる。伏見奉行所成立時の遺構と考えられる土坑 38 の掘削後に地山面上から柱穴 89 を検出した。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。

柱穴 51（図 11・15・図版 3・4）　調査区西側の柱穴 50 北側で検出した不整形な円形の柱穴である。

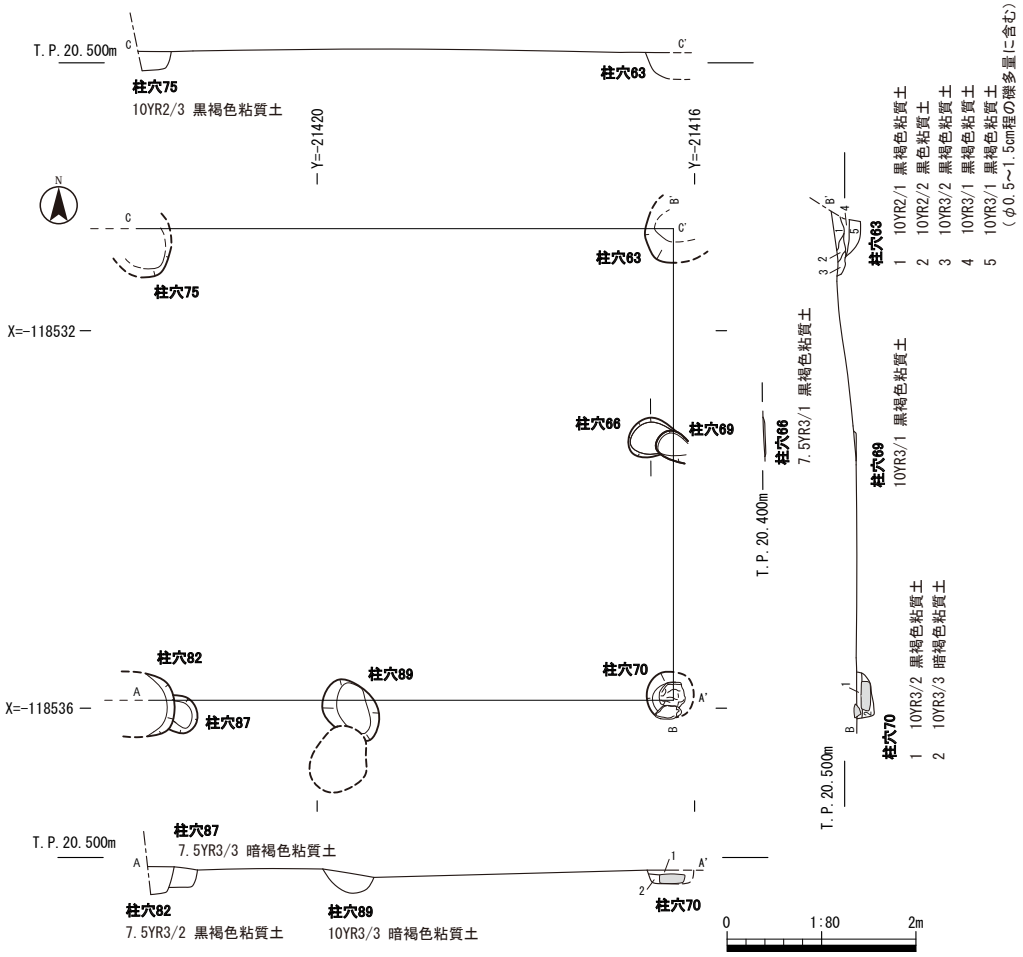


図 14　掘立柱建物跡 1 平面・土層断面図

遺構番号	長径×短径×深さ（m）（検出状態）	埋　土	備　　考
柱穴 63	0.50 × 0.30 × 0.28	黒褐色粘質土	北側は北壁にかかり、東側は溝状遺構 33 に切られる。遺物は出土していない
柱穴 66	0.44 × 0.30 × 0.01	黒褐色粘質土 炭混ざる	東側は柱穴 69 に切られる。 遺物は出土していない。
柱穴 69	0.32 × 0.28 × 0.02	黒褐色粘質土 褐色粘質土混ざる	東側は堀状遺構 33 に切られる。 遺物は出土していない
柱穴 70	0.50 × 0.32 × 0.15	黒褐色粘質土 粗砂混じる	東側は堀状遺構 33 に切られる。遺物は出土していない。0.28 × 0.28 × 0.07 の礎石有
柱穴 75	0.40 × 0.28 × 0.20	黒褐色粘質土	土坑 45 掘削後検出。北側は北壁に、西側は西壁にかかる。遺物は出土していない
柱穴 82	0.60 × 0.26 × 0.29	黒褐色粘質土	西側は西壁にかかる。 遺物は出土していない。
柱穴 87	0.38 × 0.20 × 0.17	黒褐色粘質土	西側は柱穴 82 に切られる。 遺物は出土していない。
柱穴 89	0.70 × 0.50 × 0.26	暗褐色粘質土	土坑 38 掘削後検出。南側は柱穴 84 に切られる。遺物は出土していない。

表 3　建物跡 1 柱穴一覧表

検出面で掘方の長径は推定 0.6m、短径は 0.52m、深さ 0.17m で、柱痕跡の長径は推定 0.3m、短径 0.3m、深さ 0.17m ある。東側は土坑 38 に切られる。掘方埋土は暗褐色粘質土で、柱痕跡埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 59（図 11・図版 4）　調査区北東隅で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.28m、深さ 0.05m である。東側は東壁に、北側は北壁にかかるため、全体は不明である。埋土は明るめの黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 74（図 11・図版 3・4）　調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.1m、深さ 0.3m である。北側が北壁にかかるため全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 77（図 11・図版 3・4）　調査区西側で検出した楕円形の柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.22m、深さ 0.1m である。埋土は黒暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 80（図 11・図版 3・4）　調査区西側で検出した円形の柱穴である。検出面で長径 0.28m、短径 0.26m、深さ 0.09m である。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 84（図 11・15・図版 3・4）　調査区西側で検出した楕円形の柱穴である。検出面で掘方の長径は 0.7m、短径 0.6m、深さ 0.14m で、柱は抜き取られたとみられ長径 0.31m、短径 0.26m、深さ 0.16m である。北側は柱穴 89 を切る。掘方埋土は明るめの黒褐色粘質土が主体で、抜取痕埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 90（図 11・図版 3・4）　調査区西側で検出した楕円形になるとみられる柱穴である。検出面で長径は推定 0.7m、短径 0.5m、深さ 0.14m である。土坑 42・44 掘削後検出した。南側は井戸 35 に切られ、全体は不明である。北側は土坑 76 を切る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 91（図 11・図版 4）　調査区東側で検出した円形の柱穴である。検出面で長径は推定 0.32m、短径 0.28m、深さ 0.23m である。土坑 56 掘削後に検出した。北側は土坑 92 を切る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦器、陶器が出土している。

土坑 57（図 11・図版 4）

調査区東側で検出した土坑である。検出面で長径 1.2m、短径 0.9m、深さ 0.07m である。北側は土

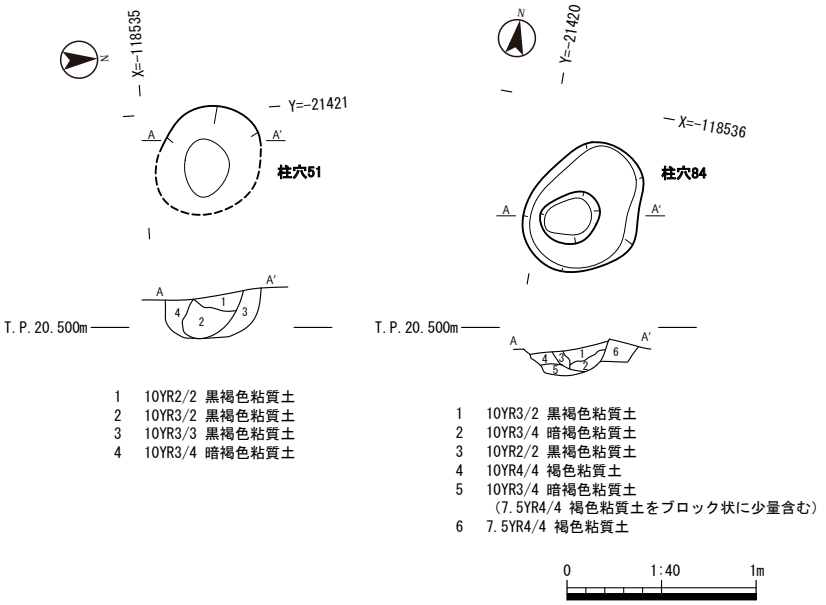


図 15　柱穴 51・84 平面・土層断面図

坑 56、南側は土坑 55 に切られ、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土に褐色粘質土が混ざる。遺物は出土していない。

土坑 65（図 11・図版 4）　調査区東側で検出した土坑である。検出面で長径 0.4m、短径 0.38m、深さ 0.41m である。北側は井戸 64 を切り、西側は堀状遺構 33 に切られる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 92（図 11・16・図版 4）　調査区東側で検出した不整形な土坑である。検出面で長径 1.2m、短径 1.18m、深さ 0.3m である。南側は土坑 1、土坑 56 掘削後に検出した。南側は柱穴 88、柱穴 91 に切られ、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

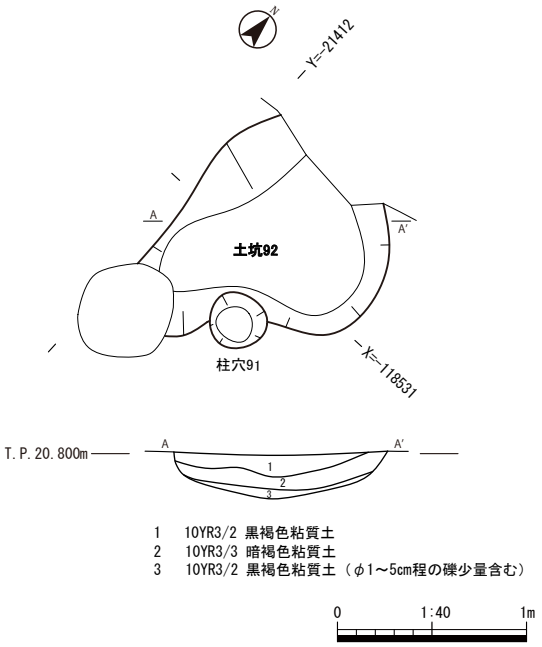


図 16　土坑 92 平面・土層断面図

井戸 64（図 11・17・図版 4）　調査区東側で堀状遺構 33 掘削後に検出した不整形な楕円形の井戸である。検出面で掘方の長径 2.6m、短径 2.0 ～ 2.4m、深さ 2.4m である。井筒の長径は 1.0m、短径 0.9m、深さ 2.5m である。東側は堀状遺構 53 に切られており、西側は上層の大半を堀状遺構 33 に切られている。西側を－1.4m まで半割した段階で掘削を止め、危険防止のために調査終了後に重機により断割りをし、下層の状態のみを確認したところ、井筒部分は底部までほぼ直線状になっていた。掘方上部は北側に斜めに入り込んでいる。埋土は黒褐色粘質土が主体で、掘方埋土には礫が多く混ざる。遺物は土師器、瓦質土器、陶器、焼締陶器、瓦、木製品が出土している。

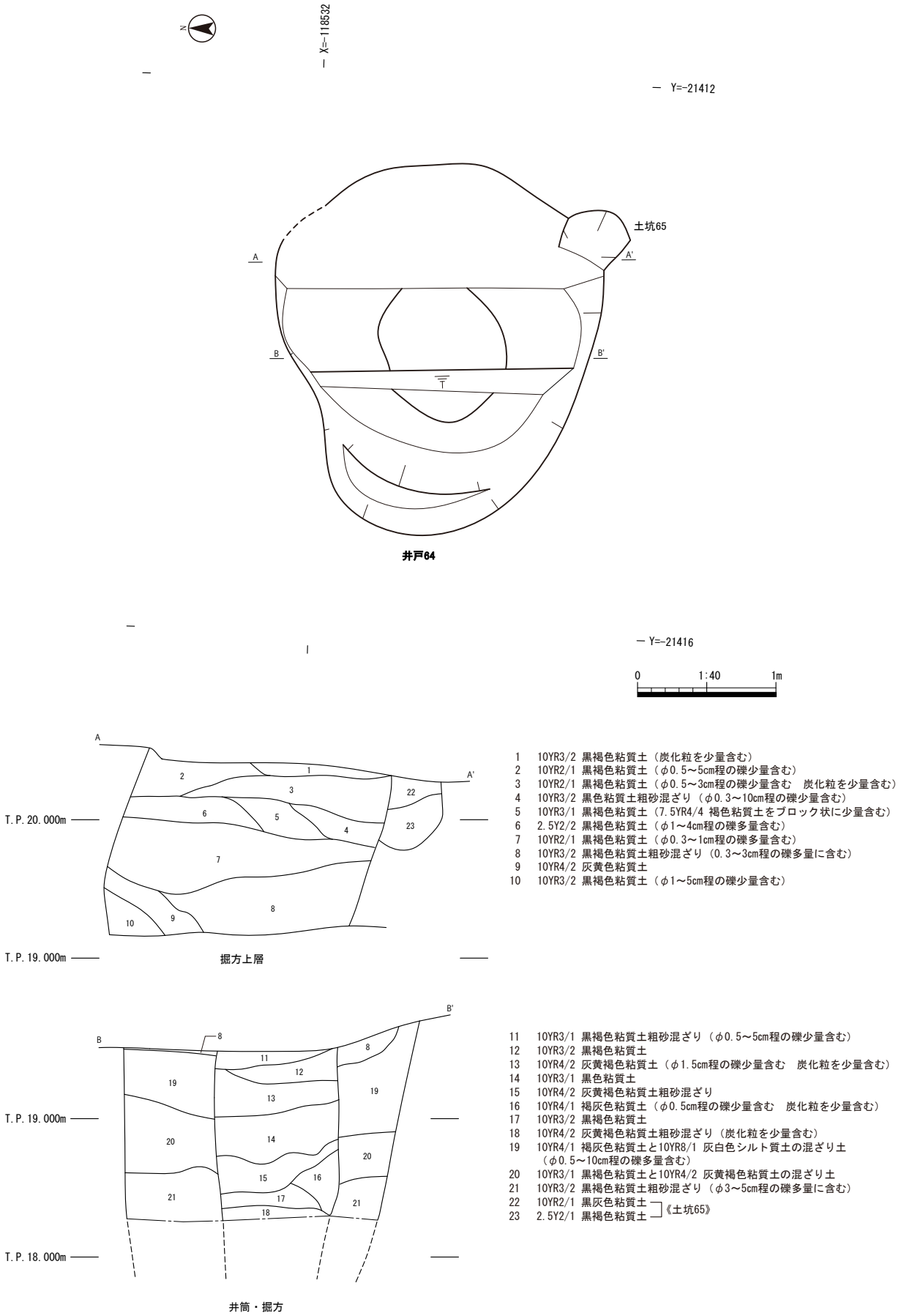
2－2 江戸時代の遺構

柱穴 39（図 12・図版 2）　調査区西側で検出した円形の柱穴である。検出面で長径 0.28m、短径 0.26m、深さ 0.14m である。土坑 38 を切っている。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 41（図 12・図版 2）　調査区西側で検出した柱穴である。検出面で長径 0.4m、短径 0.24m、深さ 0.2m である。西側は西壁にかかっており、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は瓦が出土している。

柱穴 47（図 12・図版 2）　調査区西側で検出した楕円形になるとみられる柱穴である。検出面で長径 0.26m、短径 0.2m、深さ 0.14m である。西側は西壁にかかっており、全体は不明である。埋土は灰黄色粘質土である。遺物は出土していない。

柱穴 49（図 12・図版 2）　調査区西側で検出した不整形な円形になるとみられる柱穴である。検



1　10YR3/2 黒褐色粘質土（炭化粒を少量含む）
2　10YR2/1 黒褐色粘質土（φ0.5～5cm程の礫少量含む）
3　10YR2/1 黒褐色粘質土（φ0.5～3cm程の礫少量含む　炭化粒を少量含む）
4　10YR3/2 黒色粘質土粗砂混ざり（φ0.3～10cm程の礫少量含む）
5　10YR3/1 黒褐色粘質土（7.5YR4/4 褐色粘質土をブロック状に少量含む）
6　2.5Y2/2 黒褐色粘質土（φ1～4cm程の礫多量含む）
7　10YR2/1 黒褐色粘質土（φ0.3～1cm程の礫多量含む）
8　10YR3/2 黒褐色粘質土粗砂混ざり（0.3～3cm程の礫多量に含む）
9　10YR4/2 灰黄色粘質土
10　10YR3/2 黒褐色粘質土（φ1～5cm程の礫少量含む）

11　10YR3/1 黒褐色粘質土粗砂混ざり（φ0.5～5cm程の礫少量含む）
12　10YR3/2 黒褐色粘質土
13　10YR4/2 灰黄褐色粘質土（φ1.5cm程の礫少量含む　炭化粒を少量含む）
14　10YR3/1 黒色粘質土
15　10YR4/2 灰黄褐色粘質土粗砂混ざり
16　10YR4/1 褐灰色粘質土（φ0.5cm程の礫少量含む　炭化粒を少量含む）
17　10YR3/2 黒褐色粘質土
18　10YR4/2 灰黄褐色粘質土粗砂混ざり（炭化粒を少量含む）
19　10YR4/1 褐灰色粘質土と10YR8/1 灰白色シルト質土の混ざり土（φ0.5～10cm程の礫多量含む）
20　10YR3/1 黒褐色粘質土と10YR4/2 灰黄褐色粘質土の混ざり土
21　10YR3/2 黒褐色粘質土粗砂混ざり（φ3～5cm程の礫多量に含む）
22　10YR2/1 黒灰色粘質土
23　2.5Y2/1 黒褐色粘質土
《土坑65》

図 17　井戸 64 平面・土層断面図

出面で長径 0.3m、短径 0.24m、深さ 0.13m である。西側は西壁にかかっており、全体は不明である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は陶器、瓦が出土している。

柱穴 88（図 12・18・図版 4） 調査区東側で検出した隅丸方形の柱穴である。検出面で長径 0.5m、短径 0.48m、深さ 0.26m である。土坑 56、土坑 92 を切っている。埋土は暗褐色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

柱穴 93（図 12・図版 4） 調査区東側で検出した不整形な円形になるとみられる柱穴である。検出面で長径 0.4m、短径は推定で 0.38m、深さ 0.2m である。南側は土坑 55 を切っている。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 1（図 12・図版 2） 調査区東側で検出した長方形の土坑である。検出面で長径 1.36m、短径 0.9m、深さ 0.16m である。南側は土坑 56 を切っている。埋土は灰黄褐色粘質土である。遺物は土師質土器、陶器、瓦が出土している。

土坑 36（図 12・19・図版 2） 調査区西側で検出した不整形な円形の土坑である。検出面で長径 1.6m、短径 0.9m、深さ 0.34m である。北側は土坑 52、上層と南側は撹乱土坑に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、土師質土器、瓦器、陶器、磁器、瓦が出土している。

土坑 38（図 12・20・図版 2） 調査区西側で検出した不整形な楕円形になるとみられる大型の土坑である。検出面で長径 4.5m、短径 1.9m、深さ 0.4m である。東側は堀状遺構 32、西側は井戸 35、土坑 44 に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、土師質土器、瓦器、須恵器、軟質施釉陶器、陶器、磁器、瓦が出土している。

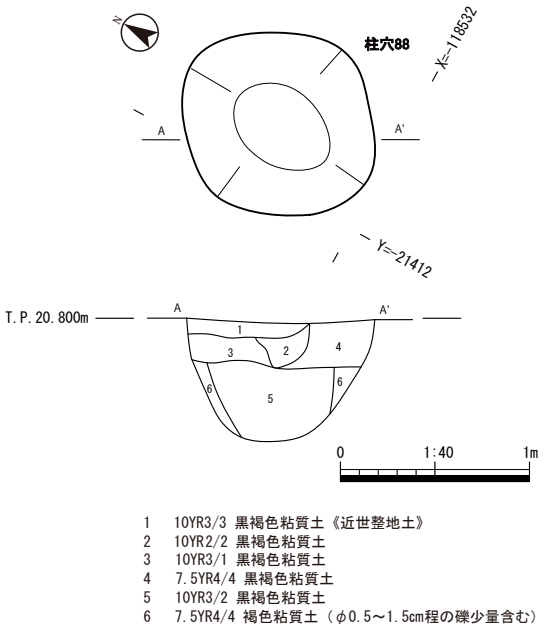


図 18 柱穴 88 平面・土層断面図

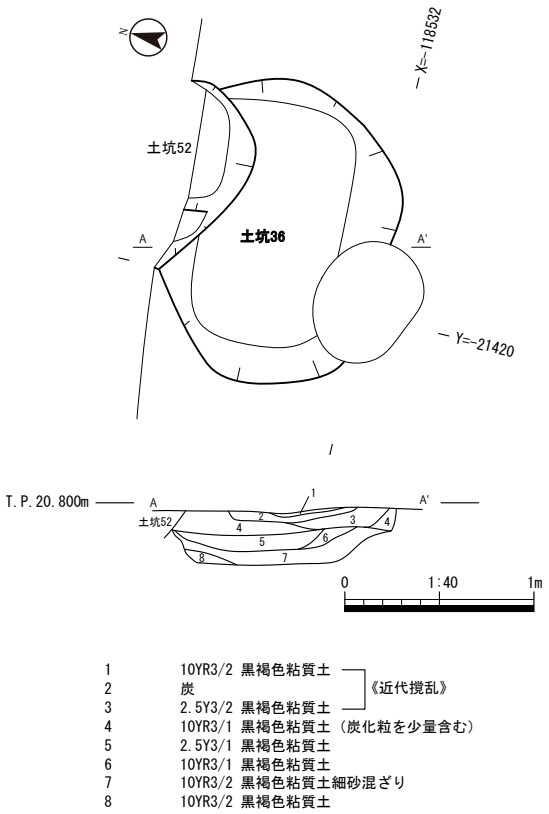


図 19 土坑 36 平面・土層断面図

土坑 42（図 12・21・図版 2） 調査区西側で検出した楕円形になるとみられる大型の土坑である。検出面で長径 1.7m、短径 1.1m、深さ 0.24m である。東側は撹乱土坑、土坑 36、西側は撹乱土坑、南側は土坑 44 に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶器、

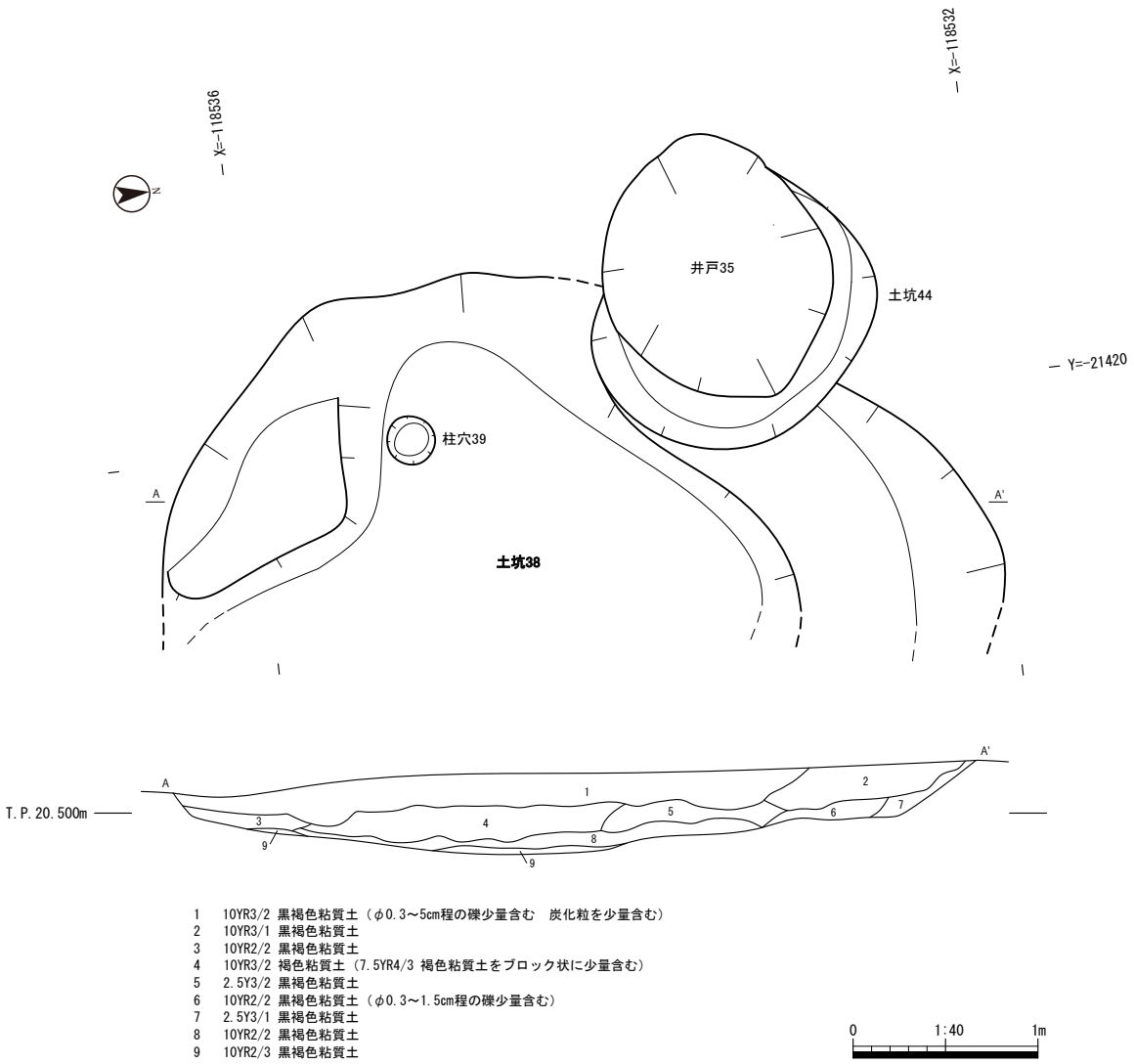


図 20　土坑 38 平面・土層断面図

焼土壁が出土している。

土坑 43（図 12・図版 2）　調査区西側で検出した土坑である。検出面で長径 0.5m、短径 0.3m、深さ 0.1m である。東側は土坑 42、西側は土坑 45 に切られ、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 44（図 12・23・図版 2）　調査区西側で検出した楕円形になるとみられる大型の土坑である。検出面で長径 1.6m、短径 0.6m、深さ 0.25m である。大半は井戸 35 に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

土坑 45（図 12・図版 2）　調査区北西隅で検出した土坑である。検出面で長径 0.64m、短径 0.3m、深さ 0.1m である。北側は北壁にかかり、東側は土坑 43 を切る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 46（図 12・図版 2）　調査区南西隅で検出した土坑である。検出面で長径 0.9m、短径 0.5m、深さ 0.23m である。西側は西壁にかかり、南側は南壁にかかり、全体は不明である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は磁器、瓦が出土している。

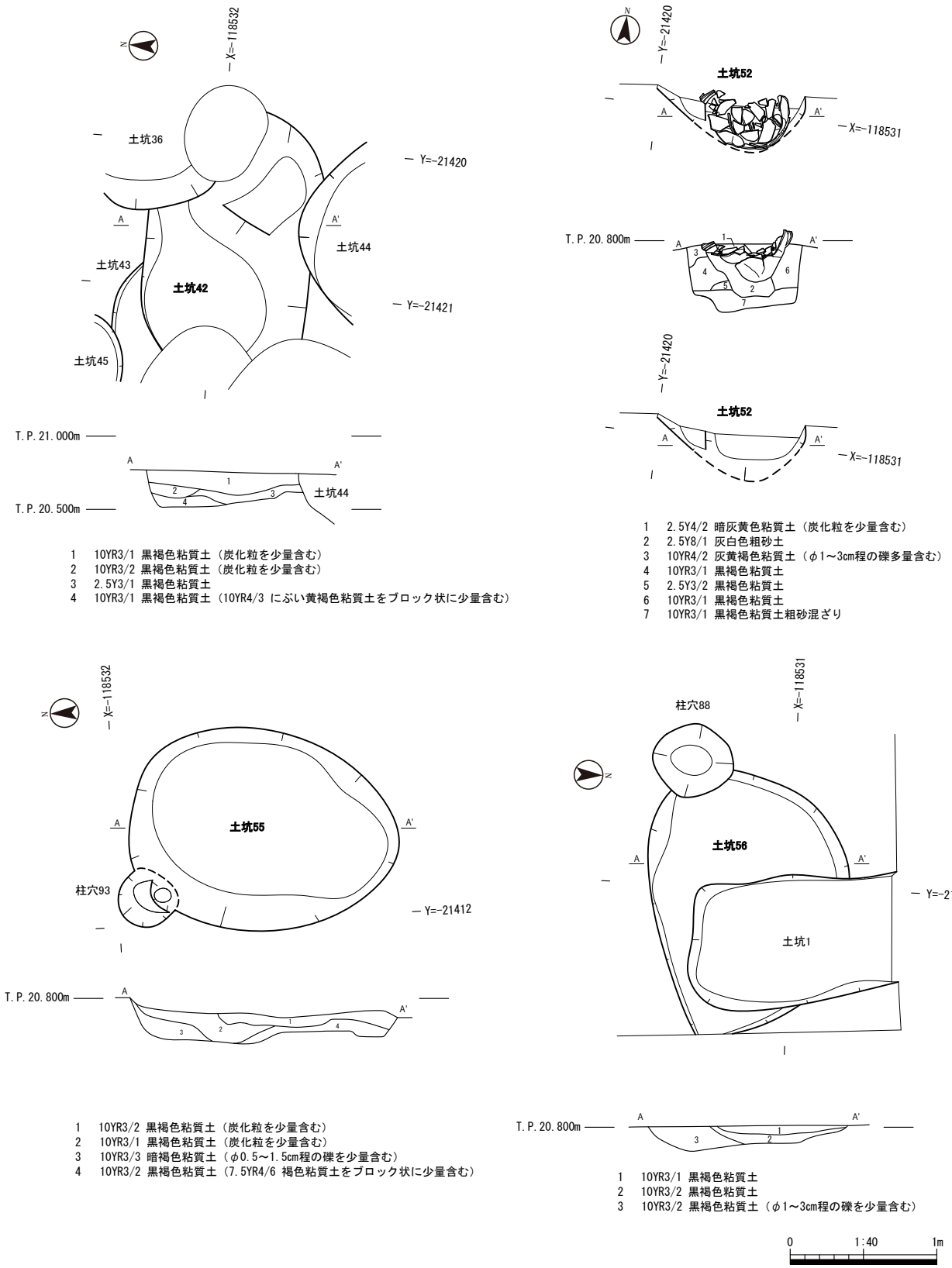


図 21　土坑 42・52・55・56 平面・土層断面図

土坑 52（図 12・21・図版 2）　調査区西側で検出した土坑である。検出面で長径 1 .0m、短径 0.24m、深さ 0.5m である。北側は北壁にかかり、全体は不明である。当初は土坑 36 上層埋土と類似しているため同一の遺構と考えていた。掘削中に土坑内に陶器の甕が埋められていることを

確認したため、再度精査したところ検出した。陶器の甕は立てられて埋められており、便所として使用していたとみられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦が出土している。

土坑 55（図 12・21・図版 4）　調査区東側で検出した楕円形の土坑である。検出面で長径 1.8m、短径 1.4m、深さ 0.15m である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、磁器、瓦が出土している。

土坑 56（図 12・21・図版 4）　調査区東側で検出した楕円形の土坑である。検出面で長径 1.7m、短径 1.1m、深さ 0.1m である。東側は土坑 1、西側は柱穴 88 に切られる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

溝状遺構 3（図 12・22・図版 2）　調査区東側で検出した南北の溝状遺構である。検出面で長さ 4.2m、幅 0.7m、深さ 0.2m で、調査区北側に延びる。東側は柱穴 88、柱穴 93、土坑 55、西側は堀状遺構 33 に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、桟瓦が出土している。

溝状遺構 53（図 12・図版 2）　調査区東側で検出した南北の溝状遺構である。検出面で長さ 1.9m、幅 0.4m、深さ 0.32m である。西側は堀状遺構 33 に切られる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は土師器、陶器、磁器、瓦が出土している。

井戸 35（図 12・23・図版 2）　調査区西側で検出した不整形な楕円形の井戸である。検出面で長径 1.5m、短径 1.0m、深さ 2.7m である。検出面から－1.3m まで半割した段階で下層に空洞が確認されたため、掘削を止め、危険防止のために調査終了後に重機により断割りをし、下層の状態のみを確認したところ、底部ま

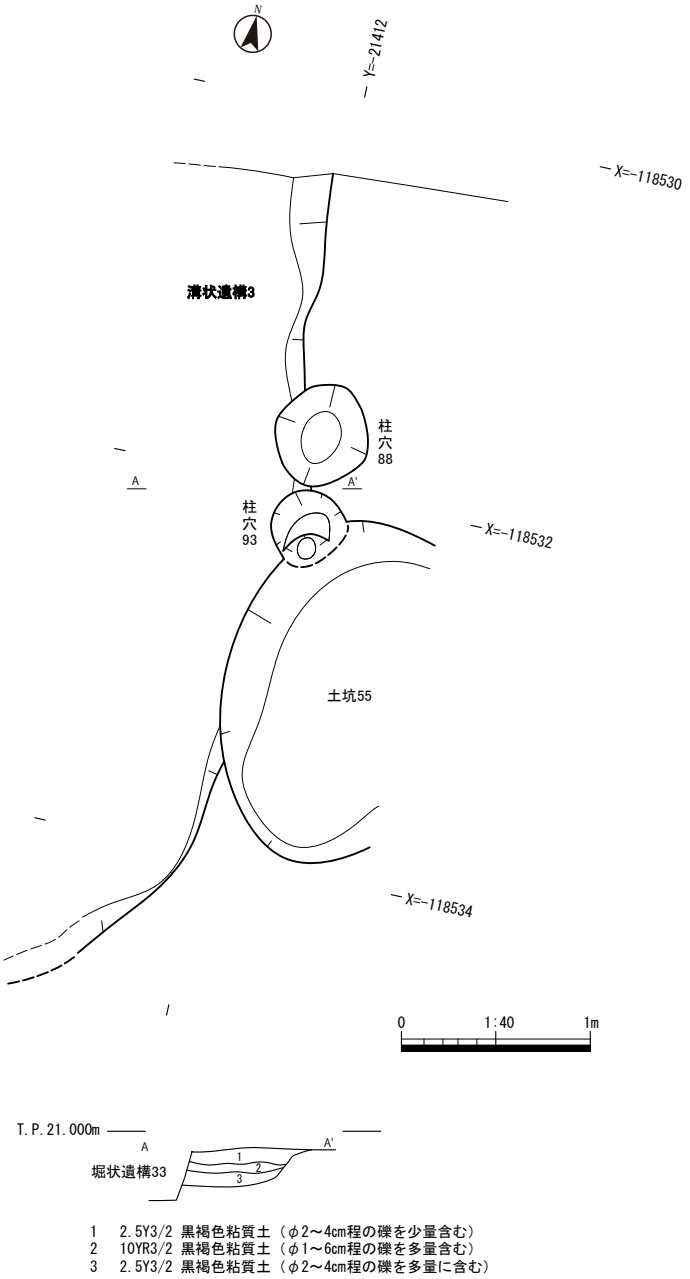


図 22　溝状遺構 3 平面・土層断面図

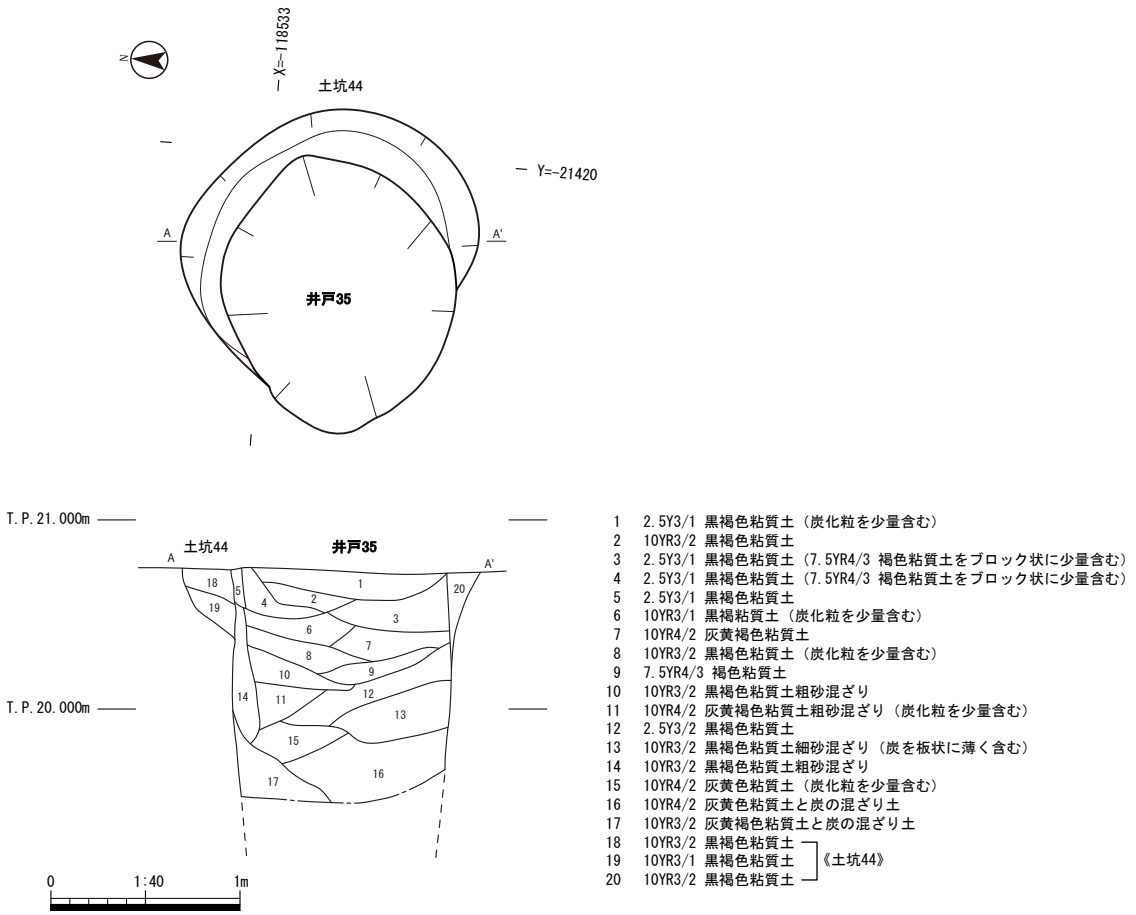


図 23　井戸 35 平面・土層断面図

でほぼ直線状に掘り下げられており、石組や木枠はなく痕跡も確認できなかった。埋土は黒褐色粘質土が主体で、炭が混ざっている。遺物は土師器、土師質土器、瓦器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土している。

3.　近代の遺構

近代の遺構には堀状遺構がある。いずれも明治時代以降の工兵第十六大隊に関連するものと考えられる。

堀状遺構 32（図 8・9・24・図版 2）　調査区中央で検出した南北の堀状遺構である。検出面で長さ 6.5m、幅 2.0m、深さ 0.64m である。土層断面で東側は堀状遺構 33 に切られており、東側、西側とも撹乱土坑に一部切られる。当初は近代整地土層と考えていたが、一部断割りの結果、堀状遺構となることが確認できた。西側に段があり、底部の断面は階段状になっている。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、土製品、ガラス製品が出土している。中には鳥羽･伏見の戦いで焼けたとみられる瓦がある。

堀状遺構 33（図 8・9・24・図版 2）　調査区中央で検出した南北の堀状遺構である。検出面で長さ 6.8m、幅 3.5m、深さ 1.38m である。東側は撹乱土坑に一部切られる。堀状遺構 32 同様に当初は近代整地土層と考えていたが、一部断割りの結果、堀状遺構となることが確認できた。東側

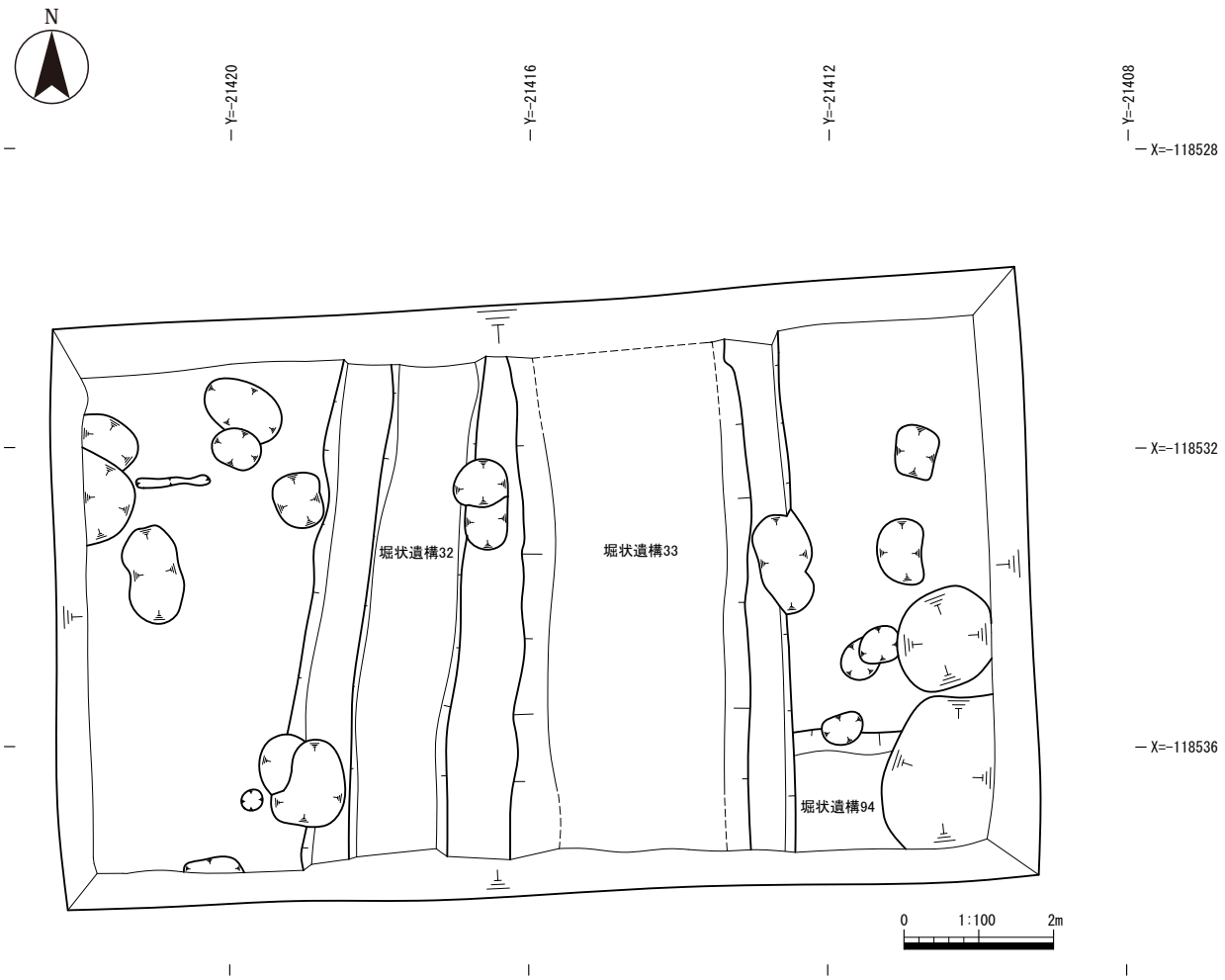


図 24　3. 近代遺構平面図

に段があり、底部の断面は階段状になっている。埋土は黒褐色粘質土が主体である。遺物は土師器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、桟瓦、金属製品がある。中には鳥羽･伏見の戦いで焼けたとみられる瓦、桟瓦が出土している。

堀状遺構 94（図 9・24・図版 4）　調査区東側で検出した東西の堀状遺構である。検出面で長さ 1.4m、幅 1.2m、深さ 0.28m である。南側は南壁にかかる。東側は撹乱土坑に切られ、西側は堀状遺構 33 に切られる。埋土は黒褐色粘質土が主体で礫が多く混ざる。遺物は土師器､土師質土器、磁器、瓦が出土している。

第 3 節　第 1 調査区の遺物

今回第 1 調査区で出土した遺物はコンテナ総数 15 箱で、土器類、瓦類、土製品、ガラス製品、金属製品、礎石が出土している。この内、平安時代の遺物は土師器、黒色土器、須恵器、瓦、中世の遺物は土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、磁器、瓦、銭貨がある。近世の遺物は土師器、土師質土器、瓦質土器、軟質施釉陶器、焼締陶器、備前、信楽、丹波、常滑、志野、唐津、瀬戸美濃、京焼、京焼系の陶器、輸入磁器、伊万里、肥前系の磁器、瓦、桟瓦、礎石がある。近代の遺

物は陶器、磁器、土製品、金属製品、ガラス製品、瓦、桟瓦、骨である。

近世の遺物では土器編年[21]で京XII [京都XI] 期～京XIII [京都XII] 期のもので、17 ～ 18 世紀のものが多く出土している。しかし、遺物を伴う遺構は少なく、小破片が多かった。平安時代、中世の遺物は近代の整地土層や撹乱、近世の整地土層や遺構に混入して若干出土している。今回は近世の遺物を中心に図示した。その中には小破片のもので口径復元した土器も含まれる（表 4）。

時　代	内　容	コンテナ箱総数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、瓦	15 箱		8 箱	2 箱
中世	土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器、磁器、瓦、銭貨		銭貨 1 点 中世・近世 5 箱		
近世	土師器、土師質土器、瓦質土器、軟質施釉陶器、焼締陶器、陶器、磁器、輸入陶磁器、瓦、桟瓦、礎石		土師器 20 点、土師質土器 7 点、焼締陶器 1 点、陶器 10 点、磁器 8 点、輸入磁器 3 点、桟瓦 1 点 中世・近世 5 箱		
近代	陶器、磁器、土製品、ガラス製品、金属製品、瓦、桟瓦、骨				

表 4　第 1 調査区出土遺物の概略表

1.　中世の遺物

土坑 76 出土銭貨（図 25・図版 8）　1 は哲宗元祐元（1086）年初鋳の宋銭で「元祐通寶」である。

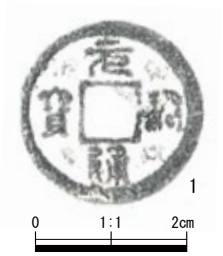


図 25　土坑 76 出土銭貨

2.　近世の遺物

土坑 1 出土土器（図 26・図版 7）　2 は塩壺である。外面、内面ともにナデ調整され、内面には布目痕が残る。体部は直線的に立ち上がる。

土坑 36 出土土器（図 26）　3 は唐津の椀である。体部は湾曲して立ち上がる。4 は肥前系の染付椀である。高台内に「大明年製」とある。体部は緩やかに湾曲し立ち上がる。

土坑 38 出土土器（図 26・図版 8）　5・6 は土師器皿 S である。外面、内面ともにナデ調整され、口縁部に煤が付着している。7 は志野焼の皿である。外面、内面ともに施釉され、内面には呉須絵がみられる。口縁部は外側に折り曲げられている。8 は明の青磁椀かとみられる。外面、内面ともに施釉されている。体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

土坑 42 出土土器（図 26・図版 9）　9 は土師器皿 S である。外面、内面ともにナデ調整されている。体部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がる。

土坑 52 出土土器（図 26・図版 7）　10 は鉄釉の信楽の甕である。外面、内面ともに施釉されている。口縁端部は内側に折り曲げられている。底部外面にはΛ状の字を二つ重ねた墨書がある。

土坑 55 出土土器（図 26・図版 9）　11 は土師器皿 Sb である。外面、内面ともにナデ調整されている。体部から口縁部にかけて緩やかに外反して立ち上がる。

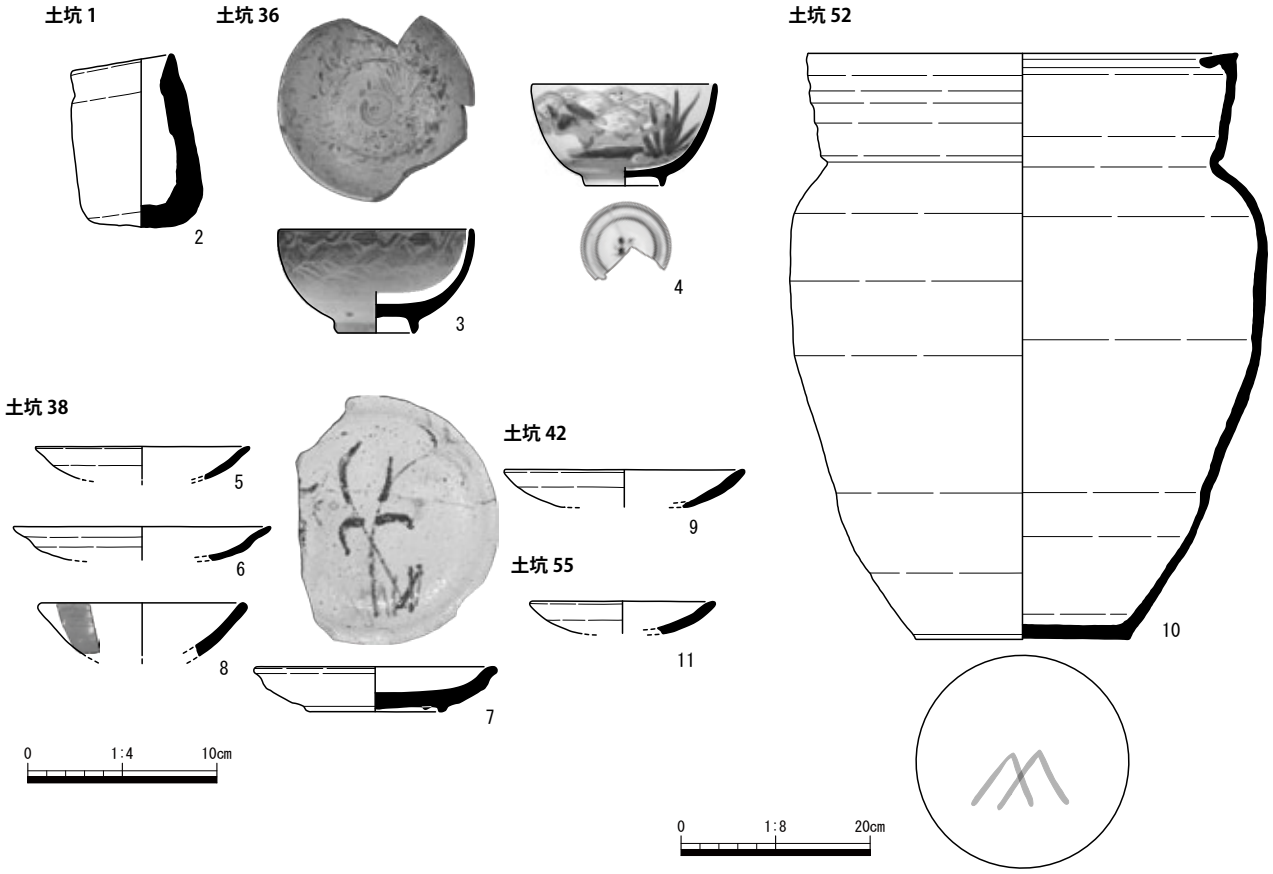


図 26　土坑 1・36・38・42・52・55 出土土器

溝状遺構 3 出土土器（図 27・図版 9）　12 は土師器皿 Sb である。外面、内面ともにナデ調整され、口縁部は大きく外反する。

溝状遺構 53 出土土器（図 27・図版 7）　13 は擂鉢である。小型で体部内面には 13 条 1 単位の擂目がある。信楽焼のものか。

井戸 35 出土土器（図 28・図版 8・9）　14 ～ 25 は土師器皿である。14 ～ 21 は皿 Sb、22 ～ 25 は皿 S である。いずれも、外面、内面ともにナデ調整され、22・24・25 は見込みに圏線がみられる。体部は緩やかに湾曲して立ち上がるものと、外反しながら立ち上がるものがある。15・23 の口縁部は大きく外反する。26 は土師質の火鉢である。外面、内面ともにナデ調整されている。口縁部の器壁は厚く、内側上方に立ち上がる。27 は土師質の摂津系の焙烙である。外面、内面ともにナデ調整されている。口縁部の器壁は厚く、内側上方に立ち上がる。28 は土師質の火

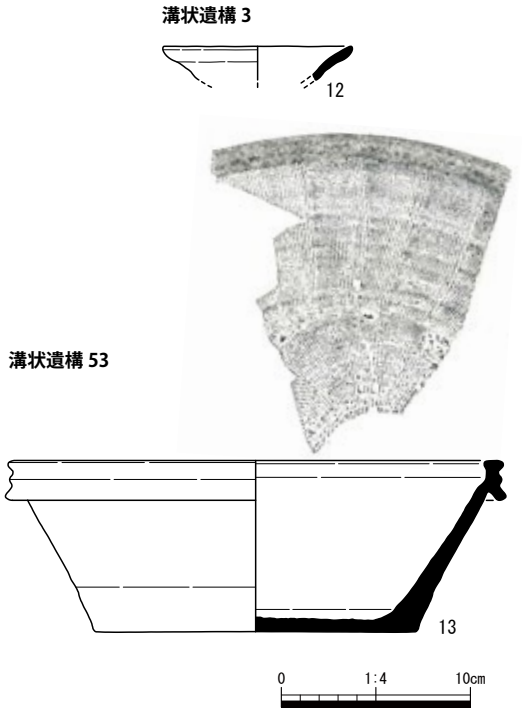


図 27　溝状遺構 3・53 出土土器

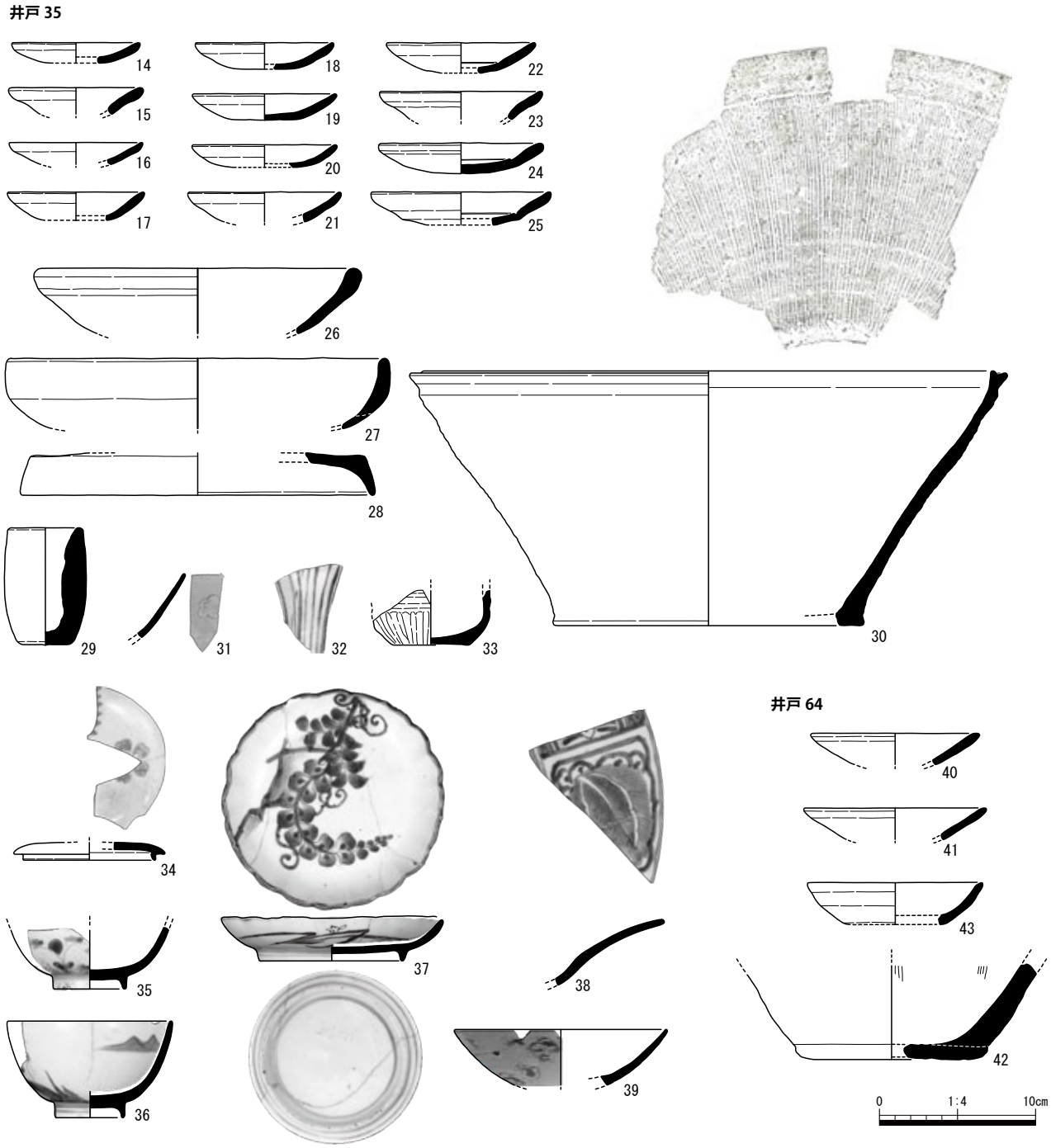


図 28　井戸 35・64 出土土器

消し壺の蓋である。外面、内面ともにナデ調整されている。29 は塩壺である。粘土輪積成形で、外面、内面ともにナデ調整されている。体部は直線的に上方に立ち上がる。30 は信楽焼の擂鉢である。体部内面には 18 条 1 単位の擂目がある。口縁端部上面に沈線が 1 条廻り、断面 Y 字状になる。31・32 は京焼である。31 は色絵の鉢とみられ、32 は色絵の手鉢把手である。33・34 は京焼系のもので、33 は香炉で外面に施釉されている。底部から高さ 2 ㎝程は縦向きの凹凸をもつ。34 はひょう足の蓋で、外面に施釉されている。口縁部から中心にかけて、２ヶ所が半円形に切り取られている。35・36 は伊万里の染付椀である。37 は肥前系の染付皿である。口縁部は波打つ。38 は明染付の大皿である。体部から口縁端部にかけて大きく外反しながら立ち上がる。

39 は伊万里の赤絵の鉢で、上絵である。

井戸 64 出土土器（図 28・図版 8・9） 40 は土師器皿 Sb である。外面、内面ともにナデ調整されている。41 は土師器皿 S である。外面、内面ともにナデ調整され、口縁部には煤が付着している。42 は信楽の焼締陶器の鉢である。内面は使用により磨滅しており、煤が付着している。43 は唐津の皿である。体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

近世、近代整地土層・撹乱出土土器（図 29・図版 8）44 は土師器皿 Sb である。内面から口縁部外面にかけてナデ調整され、体部外面は外反しながら立ち上がる。口縁部に煤が付着する。45 は土師質の皿である。体部外面は工具によってなでられ段が付く。46 は土師質の火入れである。外面、内面ともにナデ調整されている。47 は漳州窯系の染付皿である。体部は外反しながら立ち上がる。48 ～ 50 は肥前系の染付椀である。いずれも体部は湾曲しながら上方に立ち上がる。高台内に「大明年製」とある。

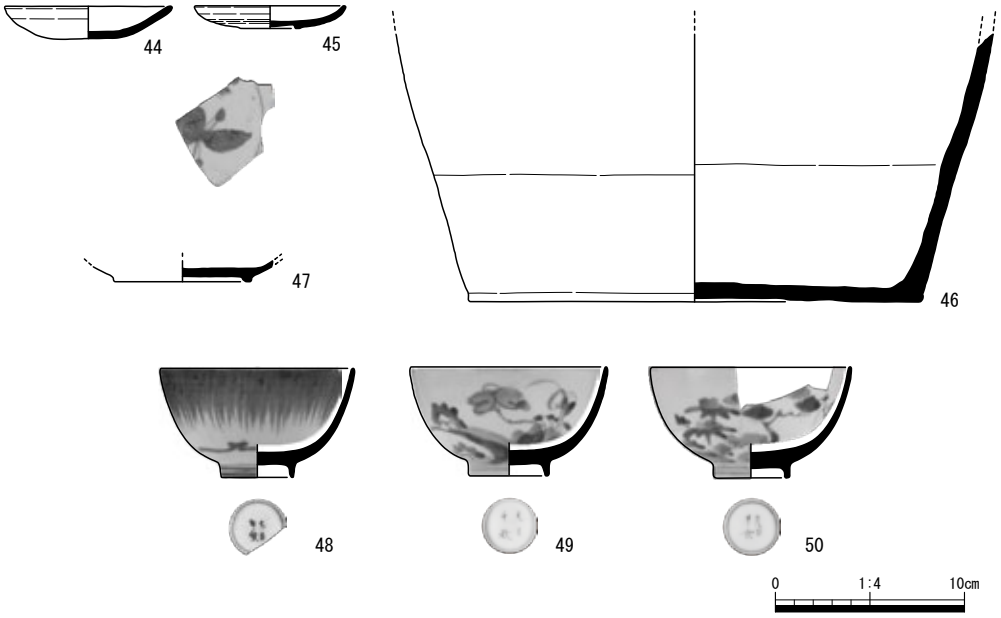


図 29　近世、近代整地土層・撹乱出土土器

近世、近代整地土層・撹乱出土瓦（図 30・図版 9）51 は桟瓦の前端の破片である。前端面には「こづや」かとみられる刻印がある。

図 30　近世、近代整地土層・撹乱出土瓦

註

21)　小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年
以下、土器編年はこれに従う。

第５章　第２調査区の遺構・遺物

第１節　第２調査区の基本層序

調査区の基本層序は現代整地土層、近世整地土層、地山層となる。地山層は青灰色、黄褐色、褐色の砂礫層からなる。

調査前の標高は 21.00m 前後で、現代整地土層の厚さは 1.3 ～ 1.8m ある。この整地土層は、コンクリートを含み調査区全体に広がる。また、調査区東側には建物基礎が格子状に残っている。

その下層の近世整地土層は撹乱および削平を受けている。東半の近世整地土層上では遺構は検出せず、遺構面は地山層となり、近世、中世の遺構を検出した。西半には近世整地土層の下層に古墳の墳丘盛土の可能性がある褐色粘質土があり、褐色土上面で近世、中世の遺構を検出した。調査区東半は近世整地層掘削後、標高 19.00m 前後でほぼ平坦面となるため、近世でも安土桃山時代の伏見城の城下町整備時以降に削平されたと考えられる（図 31）。

第２節　第２調査区の遺構

検出した遺構は、近世の土坑、溝、中世の柱穴、土坑、古墳時代の古墳周濠である。遺構は東半では地山層で近世、中世の遺構、西半では褐色粘質土上で近世、中世の遺構、地山層で古墳周濠を検出したため、第 1 調査区同様、層位ごとではなく時期ごとに報告する（表 5）。平面図は古墳時代を 1 とし、中世を 2、近世を 3 として図示した。

時　代	遺　構	備　考
古墳	周濠 1 基	古墳時代
中世	柱穴 2 基、土坑 1 基	安土桃山時代以前
近世	土坑 3 基、溝 1 条	安土桃山～江戸時代

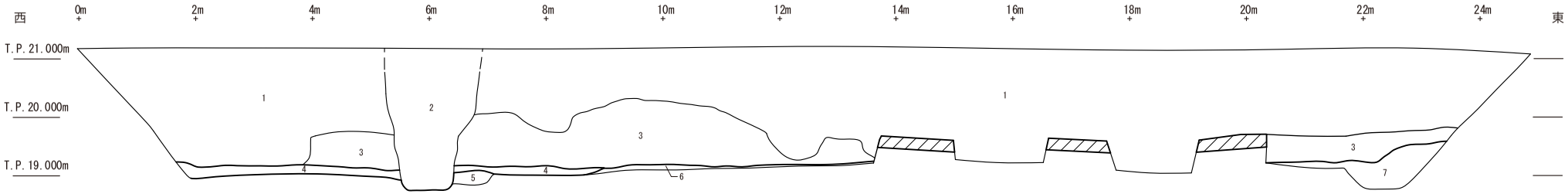
表５　第２調査区遺構一覧表

1.　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には古墳周濠がある。

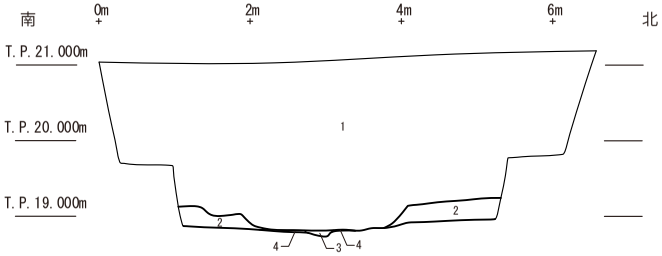
古墳周濠４（図 32・33・図版 6）　調査区西側で検出した古墳周濠である。検出面で幅 0.5 ～ 1 .9m、深さ 0.2 ～ 0.7m で、調査区の西と東に弧を描いて南へ延びる。西壁側の幅はかなり狭く、また、西側は浅く南側に向かって深くなる。埋土は上層が黒褐色粘質土が主体で、下層は黒色粘質土に粗砂が混ざる。遺物は上層で埴輪が出土している。

北壁土層断面図



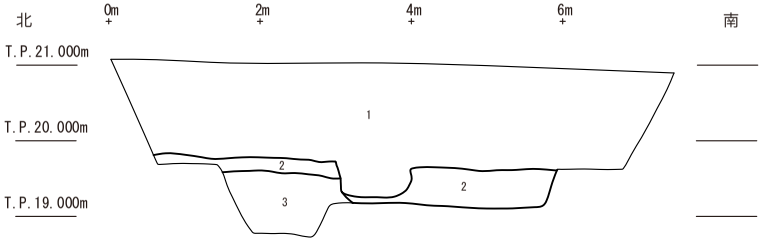
1　現代整地土層・撹乱
2　試掘撹乱
3　10YR4/4 褐色粘質土
4　10YR3/3 暗褐色粘質土
《近世整地土》
5　10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫土（φ1～8cm程のの礫含む）
6　10YR4/6 褐色砂礫土（φ2～8cm程のの礫含む）
7　10YR3/3 暗褐色粘質土（φ2～8cm程のの礫含む）
《地山》

西壁土層断面図



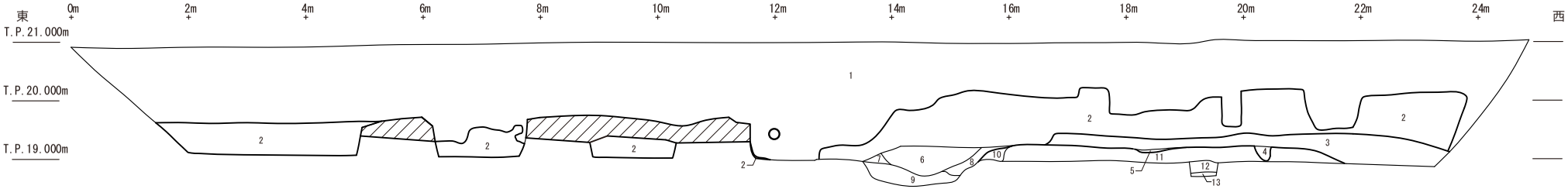
1　現代整地土層・撹乱
2　10YR3/3 暗褐色粘質土《近世整地土》
3　2.5Y5/3 黄褐色粘質土《古墳周濠4》
4　10YR6/4 にぶい黄褐色砂礫土《地山》

東壁土層断面図



1　現代整地土層・撹乱
2　10YR4/4 褐色粘質土《近世整地土》
3　10YR3/3 暗褐色粘質土（φ2～8cm程の礫含む）≪地山≫

南壁土層断面図



1　現代整地土層・撹乱
2　10YR4/4 褐色粘質土
3　10YR3/3 暗褐色粘質土
《近世整地土》
4　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土《溝7》
5　10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土《土坑6》
6　10YR1.7/1 黒色粘質土（上方は10YR3/2 黒褐色粘質土）
7　10YR3/1 黒褐色粘質土（φ1～2cm程の礫含む）
8　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（φ1cm程の礫少量含む）
9　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土（φ2～5cm程の礫少量含む）
《古墳周濠4》
10　2.5Y3/2 黒褐色粘質土
11　10YR4/6 褐色粘質土《墳丘盛土か》
12　7.5YR4/4 褐色砂礫（φ2～8cm程の礫含む）
13　10YR4/4 褐色粗砂
《地山》

コンクリート

0　1:100　5m

図31　第2調査区壁面土層断面図

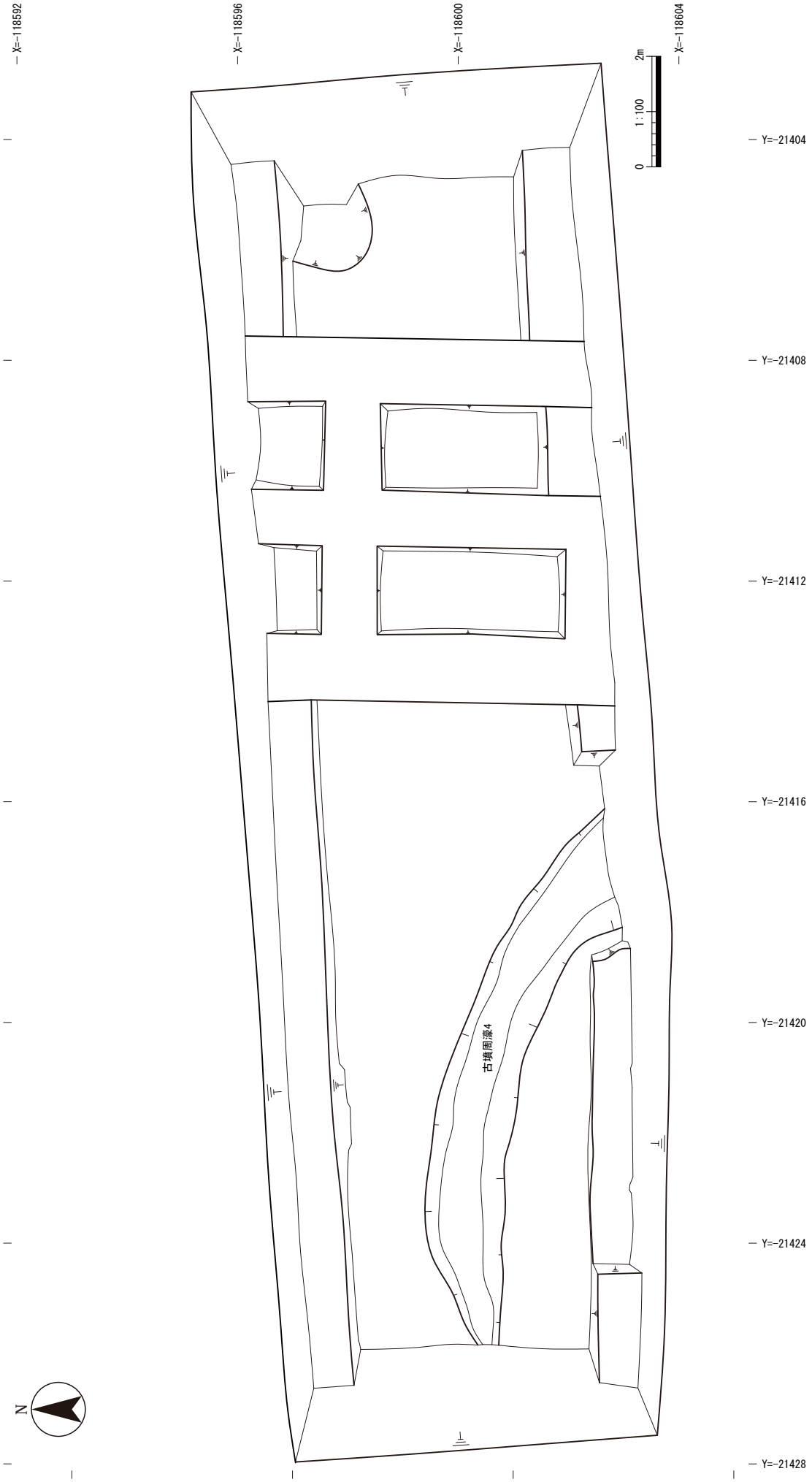
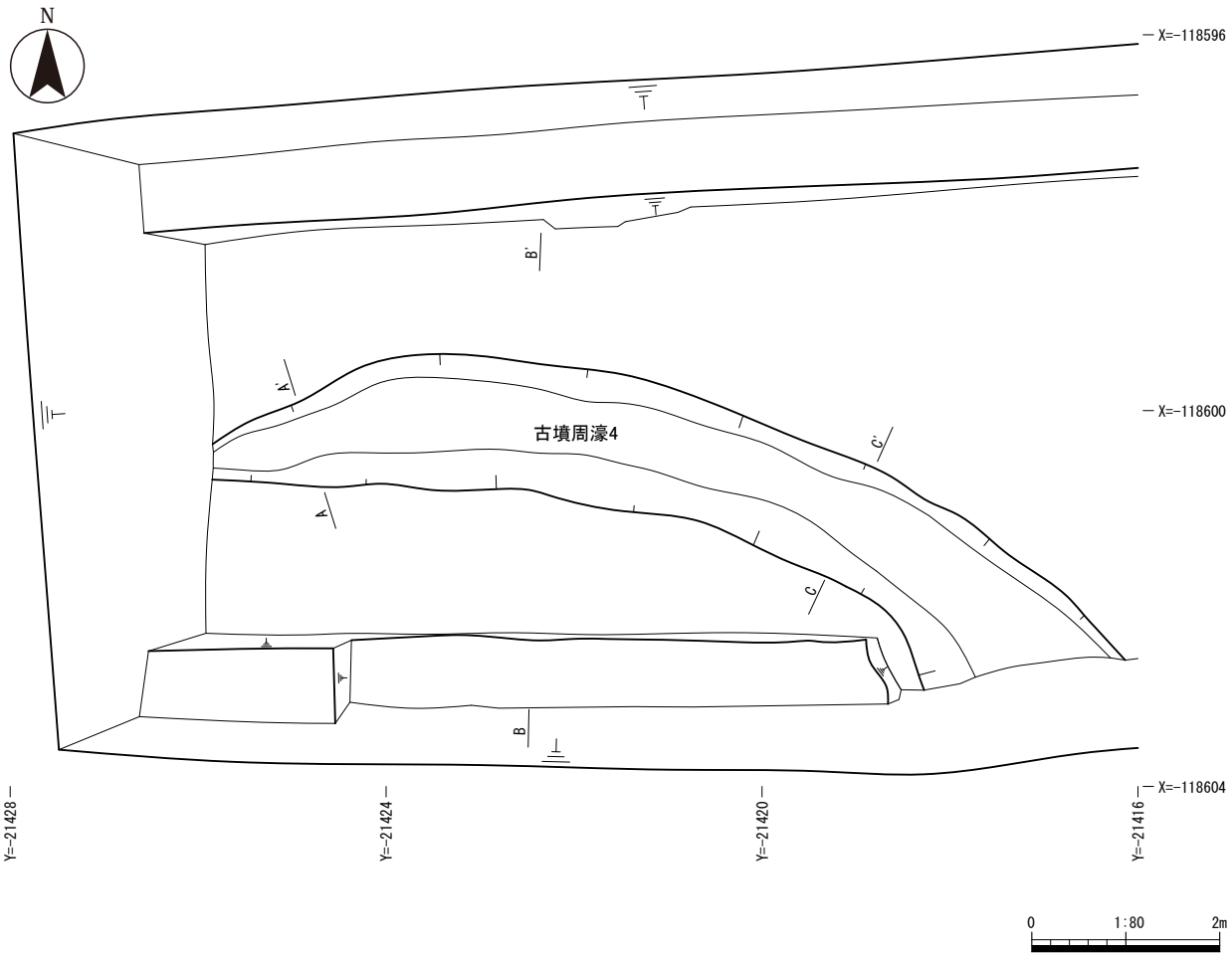
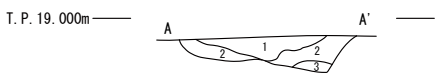
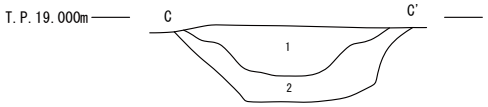


図 32　1．古墳時代遺構平面図

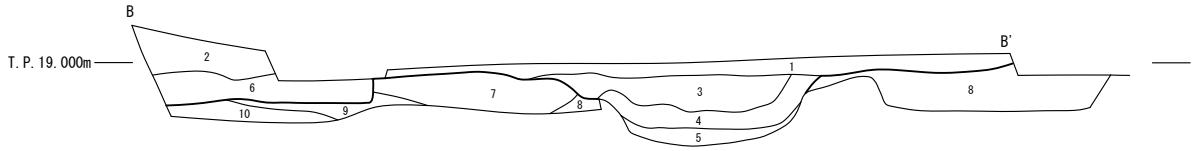




1　10YR2/3 黒褐色粘質土（φ1～3cm程の礫やや多量含む）
2　10YR3/4 暗褐色粘質土（φ3cm程のの礫少量含む）
3　2.5Y3/3 黄灰色粘質土《地山》



1　10YR3/3 暗褐色粘質土
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土



1　10YR3/3 暗褐色粘質土《近世整地土層》
2　10YR4/6 褐色粘質土《墳丘盛土か》
3　10YR2/3 黒褐色粘質土
4　10YR4/4 褐色粘質土
5　2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土
《古墳周濠4》
6　7.5YR4/4 褐色粘質土（φ2～8cm程の礫多量含む）
7　10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂土（φ2～5cm程の礫多量含む）
8　10YR5/4 にぶい褐色粘質土
9　7.5YR5/4 にぶい褐色細砂土
10　10YR4/4 褐色粗砂土
《地山》

0　1:40　1m

図 33　古墳周濠 4 平面・土層断面図

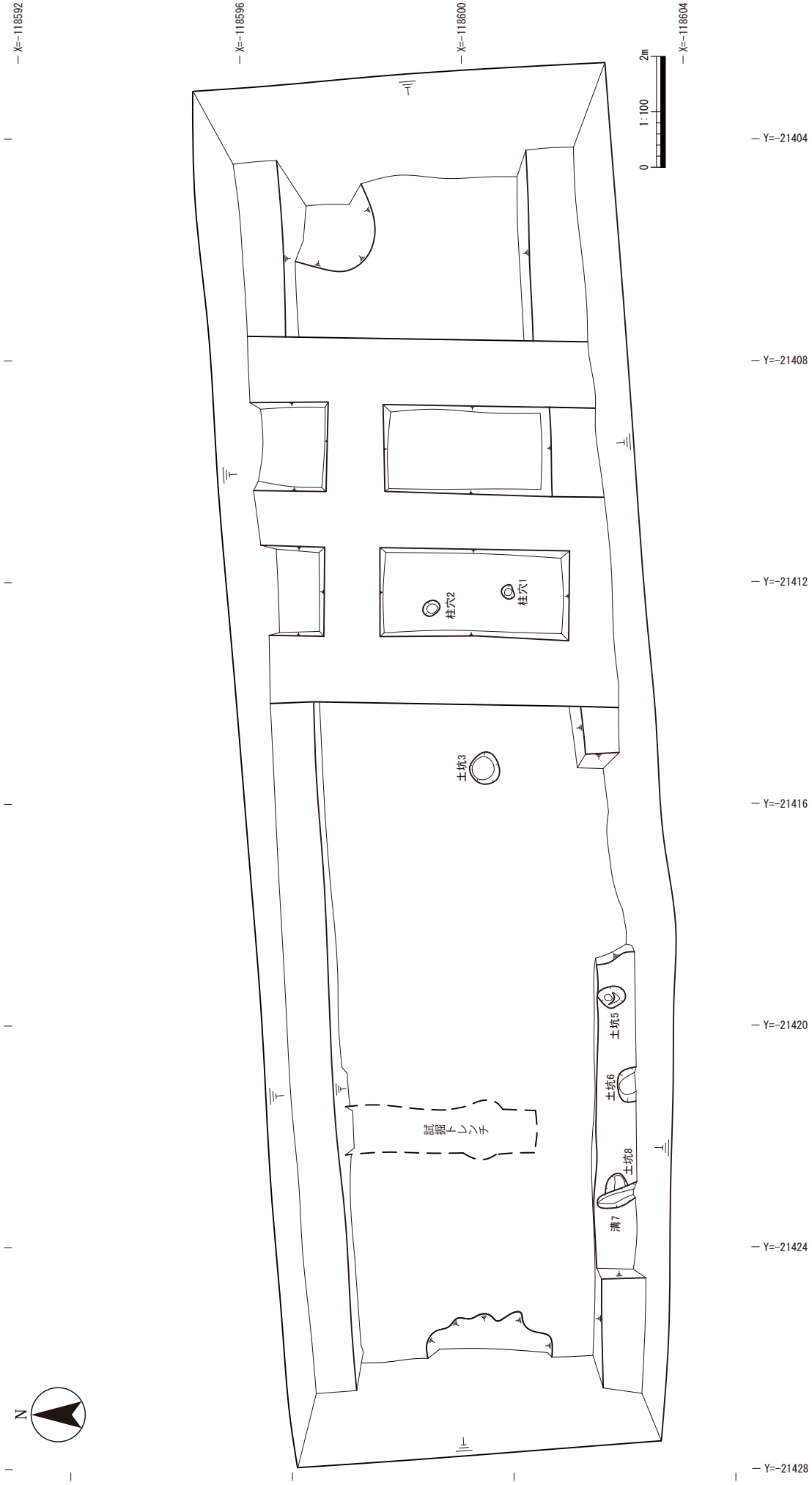


図 34　2 中世・近世遺構平面図

2.　中世の遺構

伏見城及び城下町が整備される以前の中世の遺構には柱穴、土坑がある。

柱穴 1（図 34・図版 5）　調査区東側で検出した不整形な円形の柱穴である。検出面で長径 0 .25m、短径 0.2m、深さ 0.1m である。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

柱穴 2（図 34・図版 5）　調査区東側で検出した楕円形の柱穴である。検出面で長径 0.3m、短径 0.25m、深さ 0.19m である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

土坑 5（図 34・図版 6）　調査区西側で検出した不整形な楕円形の土坑である。検出面で長径0.5 m、短径 0.4m、深さ 0.28m である。埋土は褐色粘質土である。遺物は土師器、瓦が出土している。

3.　近世の遺構

近世の遺構には土坑、溝がある。

土坑 3（図 34・図版 6）　調査区中央東寄りで検出した不整形な円形の土坑である。検出面で長径 0.6m、短径 0.5m、深さ 0.09m である。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は土師器が出土している。

土坑 6（図 34・図版 6）　調査区西側で検出した土坑である。検出面で長径 0.6m、短径 0.3m、深さ 0.08m である。南側は南壁にかかり、全体は不明である。埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していない。

土坑 8（図 34・図版 6）　調査区西側で検出した土坑である。検出面で長径 0.4m、短径 0.3m、深さ 0.09m である。西側は溝 7 に切られており、全体は不明である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

溝 7（図 34・図版 6）　調査区西側で検出した溝である。検出面で長さ 0.7m、幅 0.3m、深さ 0.1m で、調査区の南に延びる。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は出土していない。

第 3 節　第 2 調査区の遺物

今回第 2 調査区で出土した遺物はコンテナ総数 4 箱で、土器類、瓦類、埴輪が出土している。この内、中世の遺物は土師器、瓦がある。近世の遺物は土師器、磁器、瓦がある。近世整地土層からは平安時代の土師器が出土している。全体の割合的には古墳周濠から出土した埴輪が多くを占める。第 2 調査区においては遺構、整地土層から出土した遺物はごく小さい破片が多かった。今回は古墳周濠の埴輪を中心に図示した。近世整地土層、遺構で出土した遺物は小破片のもので口径復元した土器も含まれる（表 6）。

1.　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、古墳周濠、近世整地土層の地山直上から出土した円筒埴輪、朝顔形埴輪、人形埴輪

時　代	内　容	コンテナ箱総数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
古墳時代	円筒埴輪、朝顔形埴輪、人形埴輪	4 箱	円筒埴輪 5 点、朝顔形埴輪 3 点、人型埴輪 1 点 古墳時代・平安時代・中世・近世 1 箱	2 箱	1 箱
平安時代	土師器		土師器 4 点 古墳時代・平安時代・中世・近世 1 箱		
中世	土師器、瓦		土師器 1 点 古墳時代・平安時代・中世・近世 1 箱		
近世	土師器、磁器、瓦		磁器 1 点 古墳時代・平安時代・中世・近世 1 箱		

表 6　第 2 調査区出土遺物の概略表

がある。

古墳周濠 4 出土埴輪（図 35・図版 10・11）　いずれも埋土上層で出土している。52 ～ 53 は円筒埴輪である。52 は口縁部の破片である。外面はナデ調整され、内面はヨコハケ。53 は体部の破片である。外面は 1 次

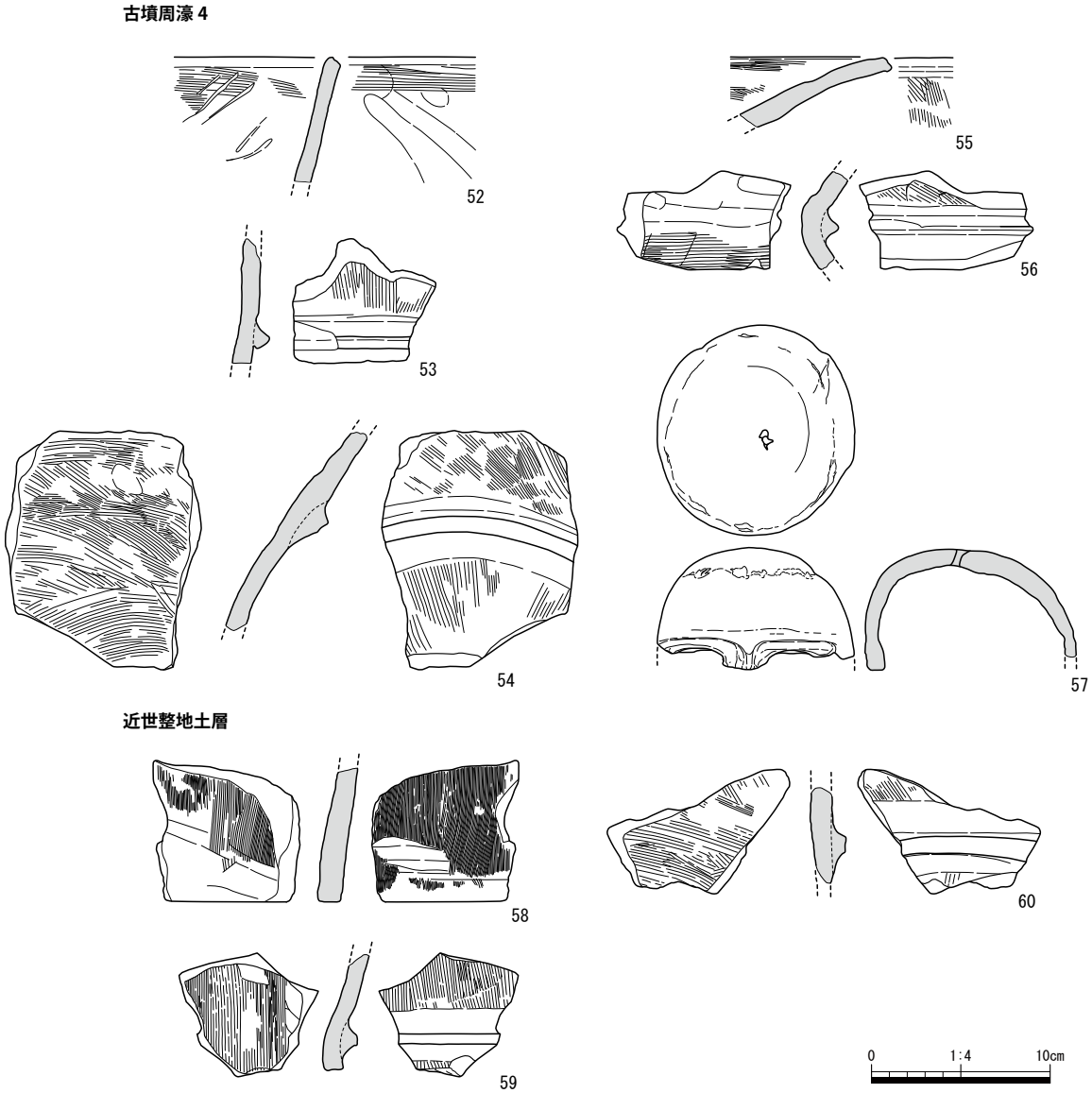


図 35　古墳周濠 4・近世整地土層出土遺物

タテハケのみされ、内面はナデ調整されている。突帯の断面は不均整な三角形状で、下側には粘土を貼りつけた痕跡が残る。54 ～ 56 は朝顔形埴輪である。54 は口縁部の破片である。外面は 1 次タテハケのみされ、内面はタテハケ後、一部はヨコハケされ、指頭圧痕が残る。突帯の断面は不均整な台形状をしている。 55 は口縁部の破片である。外面は 1 次タテハケのみされ、口縁端部は横方向にナデ調整されている。内面はヨコハケ、口縁端部は横方向にナデ調整されている。56 は頸部の破片である。外面は 1 次タテハケのみで、内面はヨコハケ、口縁部はナデ調整されている。突帯の断面は三角形状である。57 は人形埴輪の頭部の破片である。外面、内面ともにナデ調整されている。また、頭頂部には穿孔されている。

近世整地土層出土埴輪（図 35・図版 11） 調査区東側断割時と古墳周濠検出時に出土した埴輪である。58 ～ 60 は円筒埴輪である。58 は基底部の破片である。外面は 1 次タテハケのみ、内面はタテハケである。59 は体部の破片である。外面は 1 次タテハケのみ、内面はタテハケである。突帯の断面は不均整な台形状をしている。60 は体部の破片である。外面は 1 次タテハケのみ、内面はヨコハケである。突帯の断面は不均整な台形状をしている。今回出土した埴輪の焼成は軟質であった。このような特徴から円筒埴輪は川西宏幸氏の編年[22]でⅤ期に属するものである。

2. 平安時代の遺物

柱穴 2 出土土器（図 36・図版 11） 61 は土師器皿 N である。外面、内面ともにナデ調整されている。体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。

近世整地土層出土土器（図 36・図版 11） 62・63 は土師器皿 A である。ともに外面、内面はナデ調整されている。いわゆる「て」字状口縁で、62 の口縁端部は外側上方に引き上げられ、63 の口縁端部は内側上方に引き上げられている。64・65 は土師器皿 N である。ともに外面、内面はナデ調整されている。口縁端部は外反する。京Ⅴ [京都Ⅳ] 期中～新の範疇に属するとみられ、整地土層に混入した古い時期の遺物である。

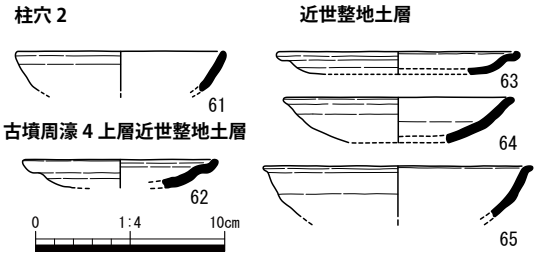


図 36　柱穴 2・近世整地土層出土遺物

3. 近世の遺物

近世整地土層出土土器（図 37） 66 は肥前系の染付椀である。見込みにコンニャク印判五弁花文がみられる。

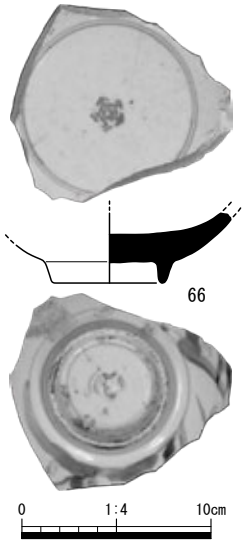


図 37　近世整地土層出土遺物

註

22)　川西宏幸「第四章　円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房 1988 年

第６章　総　括

当調査地は、伏見城跡・桃陵遺跡に当たり、周辺では弥生時代から近代に至るまでの遺構を確認している。桃山丘陵西側は、安土桃山時代～江戸時代初期にかけては豊臣秀吉や徳川家康により伏見城城下町として整備される。その後、江戸時代前半には当調査地を含む周辺に伏見奉行所が設置され、奉行所本庁、与力、同心の組屋敷が建てられる。明治時代以降は工兵第十六大隊兵営地となり、連合国軍の駐屯地となる。安土桃山時代以降は土地の改変を幾度も受けていると考えられる。

当調査地においても北側の第１調査区では近世の整地土層は近代に削平され地山層上に薄く残っていたのみであった。また、南側の第２調査区では近世後半の整地土層が地山層まで残っていたことから、豊臣秀吉による伏見城築城から現代に至るまで土地の改変がなされていたことが確認できた。

今回、当調査地で検出した遺構は古墳時代、中世～近代の遺構である。近代の遺構を除き、同一平面上で異なる時期の遺構を検出した。そのため、各層位ごとではなく、各遺構の検出状況、埋土や遺物から遺構の変遷を考え、大きく４期に区分し、報告の総括としておく（図 41）。

古墳時代　古墳時代には２トレンチ古墳周濠４がある。検出面で幅 0.5 ～ 1.9m で西壁と南壁に弧を描いて延びる。調査範囲に限りがあるため全形は不明であるが、検出した周濠外周に同心円を当て、径を予想すると外周 20.0m 程度の円形となるとみられる（図

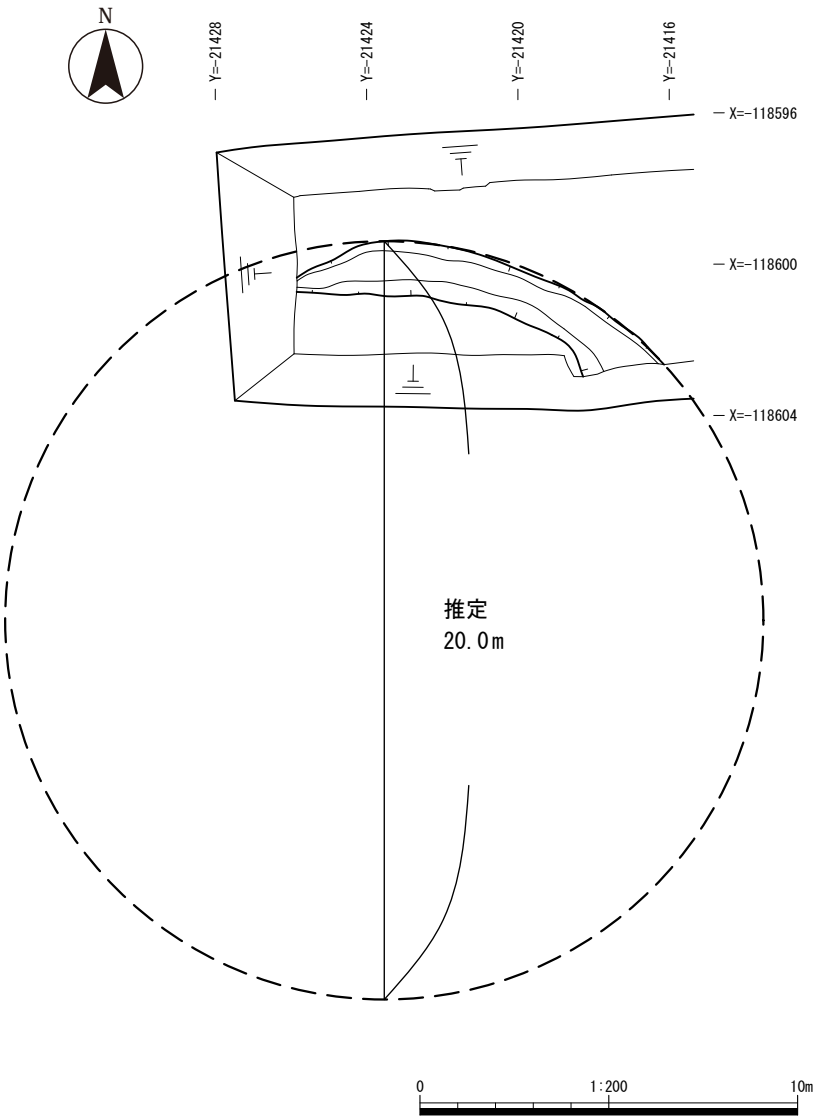


図 38　古墳半径復元予想図（1：200）

38)。遺物は埋土上層から円筒埴輪、朝顔形埴輪、人形埴輪が出土している。円筒埴輪の外面には一次タテハケのみが確認され、突帯は不整形なものになっている。これらの特徴から、出土した円筒埴輪は川西宏幸氏の編年ではⅤ期に当たるもの[23]で、古墳時代後期に製造されたと考えられる。だが、出土遺物に土器を伴わないため細かな時期は特定できない。

調査区南壁の土層断面で墳丘盛土とみられる褐色粘質土があり、その上面で中世の遺構を検出したため、中世の段階にはすでに削平されていたと考えられる。

中世　中世の遺構には柱穴、土坑があり、鎌倉、室町時代に属す。検出した遺構はごく僅かであるが、建物跡、柵跡などの施設の存在が窺える。遺物は土師器、瓦器、須恵器、瓦、銭貨等が出土している。

近世　近世の遺構には柱穴、土坑、溝、溝状遺構、井戸がある。当調査地は安土桃山時代の豊臣秀吉による指月伏見城築城（文禄元(1592)年）から、大地震の後、木幡山に築城され江戸時代初期の徳川家康、秀忠を経て家光の時に伏見城が完全に破却（元和九(1623)年）されるまでその城下町として生駒讃岐守の屋敷推定地[24]である。また、江戸時代前期に小堀遠江守により伏見奉行所が清水谷から当地に移転設置され（寛永二(1625)年)、江戸時代末の鳥羽･伏見の戦い（慶応四(1868)年）により焼失するまでは与力組屋敷地[25]であった。

（安土桃山～江戸時代初期）　生駒讃岐守（1555～1611）は父親正と共に織田、豊臣に仕え、秀吉死後は徳川家に接近している。親正は豊臣家の中老職にあり、讃岐国を所領として与えられていたため、伏見城城下町整備以降は他の大名たち同様伏見に屋敷地を与えられていたと考えられる。生駒讃岐守は一正といい、病身の父に代わり徳川家康の会津征伐に従軍し、その後関ヶ原の戦いでは徳川方に味方したため、父の所領である讃岐国を受け継いでいる[26]。

伏見城及び城下町を復元した加藤次郎氏、山田邦和氏は「豊公伏見城図」などの絵図は伏見城廃城後に描かれたもので、豊臣秀吉期の大名屋敷の配置ではなく、基本は徳川家康期に存在していた大名屋敷の配置としている[27]。そのため、当調査地も少なくとも徳川家康期（慶長六(1601)年以降）には存在していた屋敷地と推定される。

遺構としては柱穴、土坑、井戸がある。中には礎石柱穴 70 があり、そこを南東隅として見た場合、南北二間、東西三間以上の建物跡になるとみられる。礎石柱穴 70 以外には礎石はなく、抜き取られている。位置としては屋敷推定地の東となり、規模は南北 5.0 m、東西 5.5m 以上である。遺物は出土しておらず、伏見奉行所期の建物跡とも考えられるが、整地土層の最下面で検出し、江戸時代前期以降の遺構、中世の遺構埋土とは異なる明るめの黒褐色粘質土、褐色粘質土を埋土としていたため、大名屋敷内にあった建物跡と判断した。

柱穴 91 からは 16 世紀末～17 世紀初の肥前系の灰釉陶器が出土しており、大名屋敷に関連する施設の柱穴と考えられる。

井戸 64 では京Ⅻ [京都Ⅺ][28]期に属するとみられる土師器皿、また、17 世紀代の瀬戸などが出土している。そのため大名屋敷廃絶までは使用されていたと考えられる。

その他遺構に関しては遺物が出土したものはほとんどなく、江戸時代前期以降の遺構、中世の

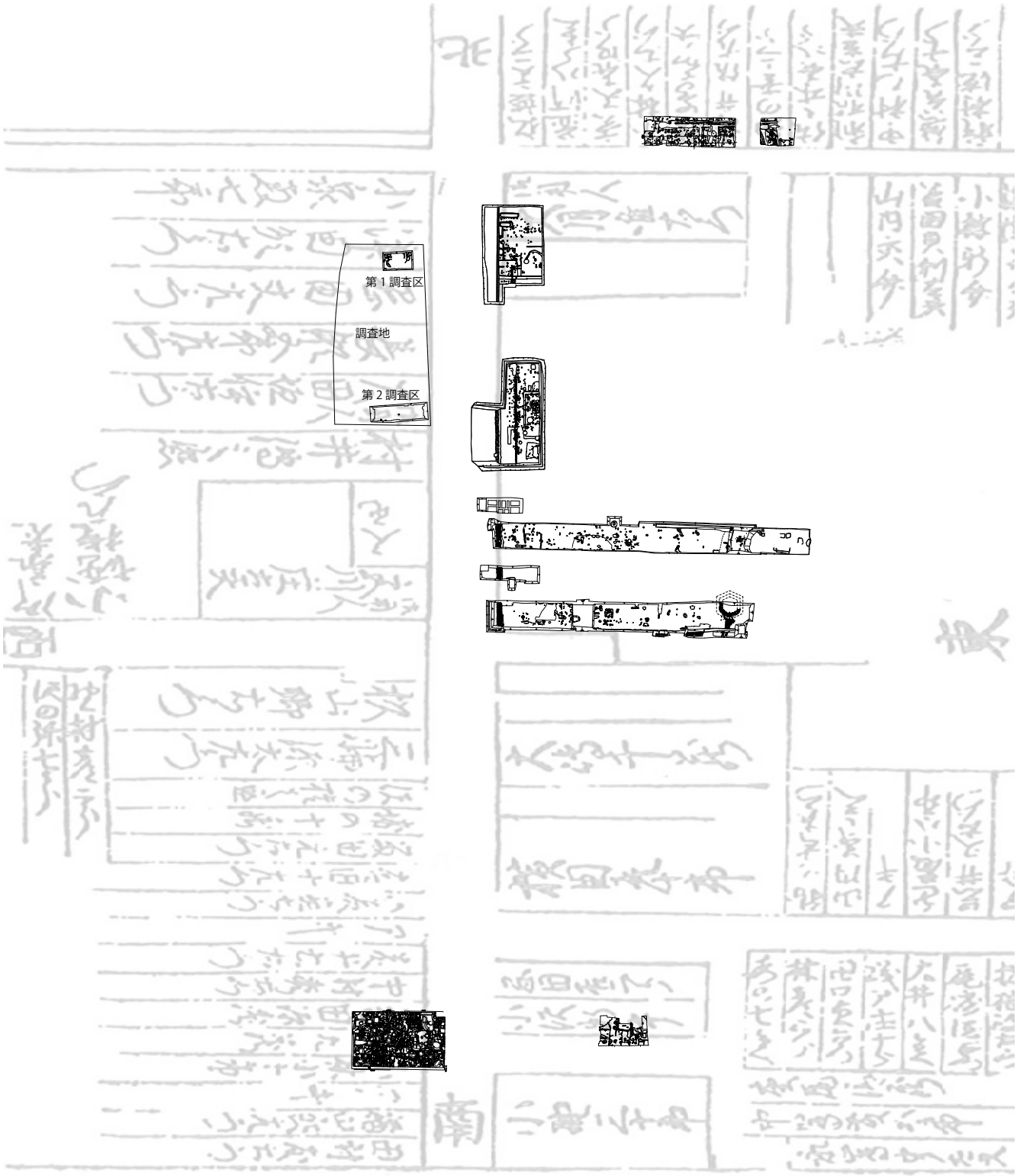


図 39　伏見奉行所敷地内における推定配置図

西近畿文化財調査研究所『伏見城跡・桃陵遺跡』2010 年にて伏見奉行所庁舎の正面石垣南限が示されているため、それを基に『伏見鑑』の配置図を拡大した。各発掘調査地は註 6、16、18、19、20 を基に配置した。各調査地の位置は図 6 を参照

遺構との埋土の差異によって判断したもので、屋敷地内の改築や建替え、土地の改変を示すものとみられる。

（江戸時代前期以降）　伏見城破却後、小堀遠江守により清水谷から東隣の富田信濃守屋敷推定地に伏見奉行所が移転設置される。そして、当調査地は伏見奉行所与力の組屋敷地となったとみられる。富田信濃守屋敷推定地内の調査[29]では、伏見奉行所移転設置の際に大規模な造成が行われたことが確認されており、当調査地も組屋敷地を配置する際に大きく造成されたものと考えられる。

『伏見鑑』[30]中には安永九（1780）年時点の奉行小堀政方の家老、公用人、伏見奉行所与力、同心の組屋敷配置図（図 39）があり、調査地のある奉行所敷地西側の区画は北から小泉恵七郎、津田順右衛門、岡田文左衛門、長瀬五郎左衛門、公用人太田垣伊右衛門、村井伝之丞、公用人宮川庄太夫、家老小堀権左衛門とある。その中で、当調査地は津田順右衛門（第 1 調査区）、岡田文左衛門、長瀬五郎左衛門、公用人太田垣伊右衛門（第 2 調査区）の組屋敷地に推定される。

遺構は柱穴、土坑、溝、溝状遺構、井戸がある。土坑 38 から 16 世紀末～17 世紀前半内の範疇にはいる土師器、志野焼、青磁が出土している。土師器Ⅲは京Ⅻ［京都Ⅺ］期に属している。土坑 38 はかなり大型の土坑であり遺物の出土は少ないため、廃棄のための穴ではなく、奉行所本庁を建設する際の土取り穴が組屋敷建設のための造成過程で埋め立てられたと考えられる。

井戸 35 では土師器、備前、信楽、丹波、瀬戸美濃、京焼の陶器、明染付、肥前系の磁器、染付が出土している。土師器Ⅲは京ⅩⅢ [京都Ⅻ] 期に属し、陶磁器は 17 世紀中～17 世紀後半範疇に収まり、埋没時期が 17 世紀後半以降と考えられるため、伏見奉行所の移転時期からやや経過して使用されたと考えられる。

土坑 52 では 18 世紀後半以降に属する信楽の便所甕が出土している。甕は掘方内に粗砂と共に埋められていた。

その他土坑は土取り穴、溝状遺構は、当調査地が組屋敷地西側に当たることから、側溝として機能していた可能性が考えられる。

近代　慶応四（1868）年の鳥羽･伏見の戦いにより、伏見奉行所は焼失し、その跡地は新政府軍の兵営地を経て、陸軍工兵第十六大隊の兵営地となる。

遺構は堀状遺構がある。堀状遺構 32、33 はいずれも底部の断面は階段状になっており、近代整地土層、近世整地土層を切って、地山層を深く堀下げている。遺物には土師器、肥前系の陶器・磁器、丸瓦、平瓦、桟瓦等が出土している。桟瓦には二次焼成を受けているものが出土している。これは、鳥羽･伏見の戦いにより焼けたものと考えられるが、当調査地では近代整地土層下層に東隣の桃陵市営団地、伏見合同宿舎での発掘調査[31]で確認された鳥羽･伏見の戦いの痕跡である焼土

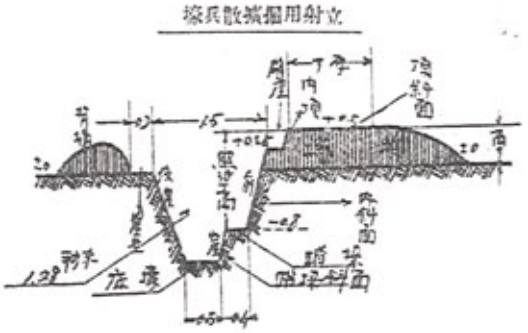
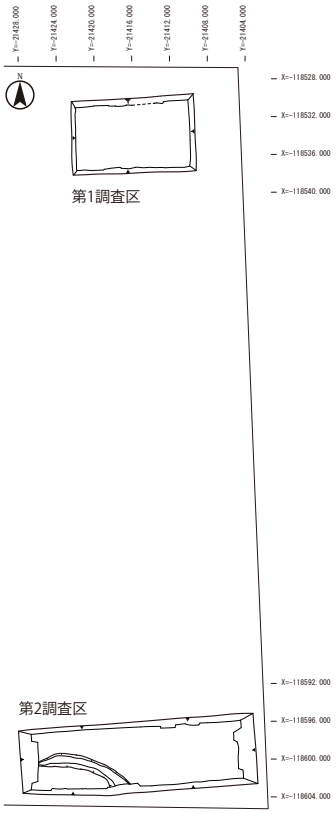
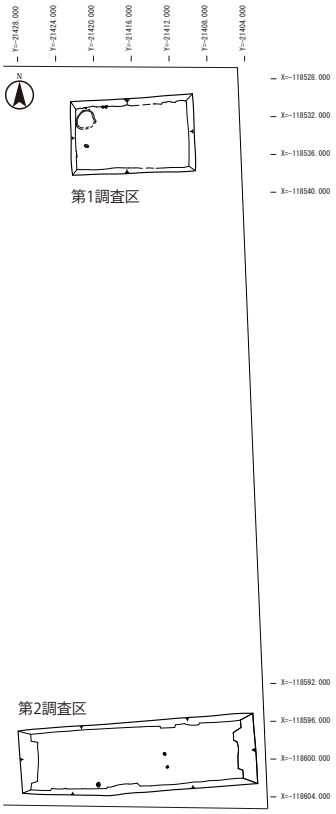


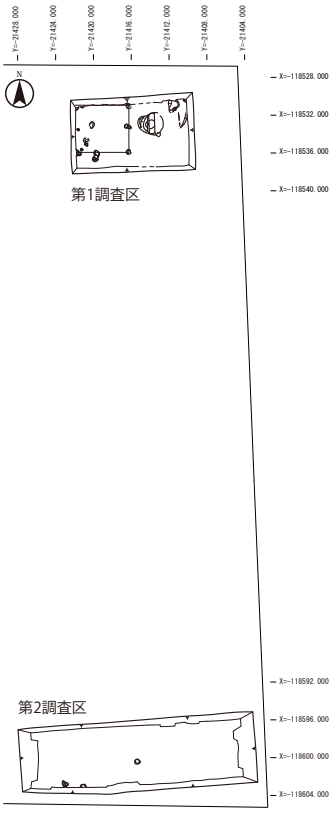
図 40　立射用散兵濠断面図（註 31 より）



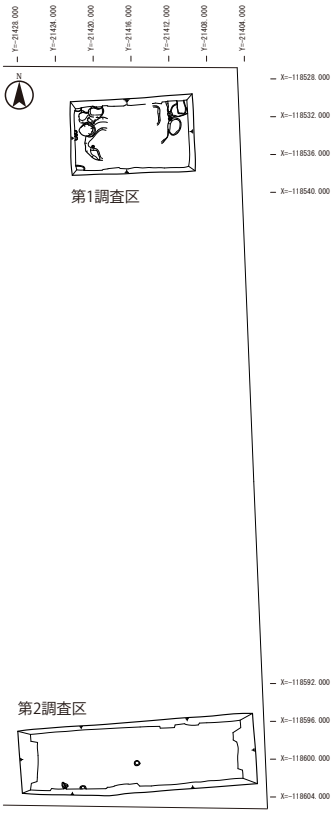
古墳時代



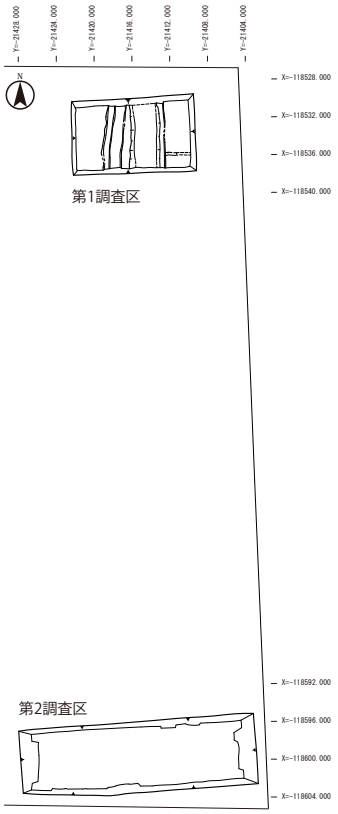
中世



近世１（安土桃山～江戸時代初期）



近世２（江戸時代）



近代

0　1:800　20m

図 41　調査区遺構変遷図

層は確認できなかったが、

堀状遺構のような形状は『改訂工兵須知』[32]などの工兵教練本などに「野戦築城」の一節として記されている散兵壕（図 41）と類似するもので、堀状遺構 32、33 も教錬の一環として掘られたものと考えられる。

このように当調査地は、遺物を出土する遺構が少なく時期を特定する決め手に乏しいが、古墳時代には墓域として利用され、一時的な遺構の断絶はあるが、近代、近世の整地層中から平安時代の遺物が出土しているため、平安時代にも土地は利用されていたと考えられる。そして、中世には集落の一部となり、近世になると大名屋敷、伏見奉行所組屋敷地、近代では陸軍工兵第十六大隊兵営地として移り変わっていたことを知ることができる。

今回の発掘調査の成果としては、古墳周濠を検出したことで弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である桃陵遺跡の中で、古墳時代は墓域として利用されていたことを示すことができた。近世には大名屋敷から伏見奉行所与力組屋敷地への変遷を明確に捉えることはできなかったが、関連する礎石のある掘立柱建物跡、井戸、便所を検出したことである。

註

23)　川西宏幸「第四章　円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』塙書房 1988 年
24)　註 7)、11) に同じ
25)　註 14) に同じ
26)　註 12) に同じ
27)　註 11) に同じ
28)　小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年
29)　註 18) に同じ
30)　註 14) に同じ
31)　註 6)、8）に同じ
32)　註 6)、8) に同じ軍事学研究会『改訂 工兵須知』武揚社出版部 1926 年

表 7　遺物観察表 (1)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図番号	出土遺構	器種	口径（cm）			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
1	第 1 調査区 土坑 76	銭貨 宋銭	径 2.4							「元祐通寶」
2	第 1 調査区 土坑 1	土師質土器 塩壺	5.2	9.0	5.0	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	外面はナデ調整。 内面はナデ調整、布目痕残る。	体部は直線的に上方に立ち上がる。	完形	
3	第 1 調査区 土坑 36	陶器 椀	(10.1)	5.5	4.1	内面は 2.5Y7/2 灰黄（釉） 外面は 10YR8/2 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は湾曲しながら上方に立ち上がる。	底部 完形	唐津
4	第 1 調査区 土坑 36	磁器 染付 椀	9.6	5.4	4.0	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は緩やかに湾曲しながら上方に立ち上がる。	3/4	肥前系 高台内に「大明年製」
5	第 1 調査区 土坑 38	土師器 皿 S	(11.2)	(1.7)	—	内外面ともに 10YR8/6 黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に折り曲げられて外反する。	1/8	口縁部に煤付着
6	第 1 調査区 土坑 38	土師器 皿 S	(13.4)	(1.7)	—	内外面ともに 2.5Y8/3 浅黄	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけては大きく外反しながら立ち上がる。	1/8	口縁部に煤付着
7	第 1 調査区 土坑 38	陶器 皿	12.5	2.4	6.5	内外面ともに 2.5Y8/1 灰白	体部外面から口縁部外面は施釉。 内面は施釉。 呉須。	体部は外反しながら立ち上がり、口縁部は外側に折り曲げられて外反する。	底部 完形	志野
8	第 1 調査区 土坑 38	青磁 椀	(10.6)	(2.8)	—	内外面ともに 10Y7/2 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/10	明
9	第 1 調査区 土坑 42	土師器 皿 S	(12.6)	(2.0)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/6	
10	第 1 調査区 土坑 52	陶器 甕	45.5	62.0	22.7	内外面ともに 2.5YR3/3 暗赤褐（釉）	内外面ともに施釉。	口縁端部は内側に折り曲げられる。	完形	信楽 鉄釉 底部に∧状の字を二つ重ねた墨書
11	第 1 調査区 土坑 55	土師器 皿 Sb	(9.6)	(1.7)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/9	
12	第 1 調査区 溝状遺構 3	土師器 皿 Sb	(10.0)	(1.8)	—	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	口縁部は大きく外反する。	1/10	
13	第 1 調査区 溝状遺構 53	陶器 擂鉢	(26.2)	9.1	(17.0)	内外面ともに 7.5YR4/4 褐	体部内面には 13 条 1 単位のスリ目。 外面はナデ調整。	体部は外反しながら立ち上がる。	1/5	信楽 鉄釉
14	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(8.0)	(1.3)	—	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/6	
15	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(8.4)	(1.7)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	口縁部は折り曲げられて大きく外反する。	1/6	
16	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(8.4)	(1.4)	—	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部は外反しながら立ち上がる。	1 /5	
17	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(8.6)	(1.8)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/5	
18	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(8.8)	(1.7)	—	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。	1/8	
19	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(9.0)	1.7	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/2	
20	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(9.2)	(1.4)	—	内外面ともに 10YR6/4 にぶい黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/7	
21	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 Sb	(9.6)	(1.9)	—	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/8	
22	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 S	(9.4)	(2.0)	—	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。 見込みに圏線。	体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/5	

表 8　遺物観察表 (2)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図番号	出土遺構	器種 器形	口径（cm） 口径	器高	底径	色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
23	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 S	(10.2)	(1.8)	―	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	口縁部は大きく外反する。	1/10	
24	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 S	(10.2)	2.0	(7.2)	内面は 7.5YR8/6 浅黄橙 外面は 10YR8/3 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。 見込みに圏線。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/4	
25	第 1 調査区 井戸 35	土師器 皿 S	(11.4)	(2.1)	(7.4)	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。 見込みに圏線。	体部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方に立ち上がる。	1/8	
26	第 1 調査区 井戸 35	土師質土器 火鉢	(20.5)	(4.7)	―	内面は 7.5YR7/6 橙 外面は 10YR5/3 にぶい黄褐	内外面ともにナデ調整。	体部は斜め上方に立ち上がり、口縁部の器壁は厚く、上方に立ち上がる。	1/12 以下	
27	第 1 調査区 井戸 35	土師質土器 焙烙	(24.0)	(4.4)	―	内面は 10YR8/4 浅黄橙 外面は 10YR5/3 にぶい黄褐	内外面ともにナデ調整。	体部は外反して立ち上がり、口縁部の器壁は厚く、上方に立ち上がる。	1/7	摂津系
28	第 1 調査区 井戸 35	土師質土器 火消し壺蓋	(22.4)	(2.7)	天井 (21.0)	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて直線的に下方へ向かう。	1/7	
29	第 1 調査区 井戸 35	土師質土器 塩壺	(4.3)	7.5	3.6	内外面ともに 2.5YR5/6 明赤褐	内外面ともにナデ調整。 粘土輪積み成形。	体部は直線的に上方に立ち上がる。	口縁 1/3 底部 3/5	
30	第 1 調査区 井戸 35	陶器 擂鉢	(36.4)	(16.4)	(20.0)	内外面ともに 5YR3/3 赤褐	内面は口縁部ナデ調整。 体部には 18 条 1 単位のスリ目。 外面はナデ調整。	体部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口縁端部の上面に沈線が 1 条廻り、断面 Y 字状になる。	1/5	信楽
31	第 1 調査区 井戸 35	陶器 色絵 鉢か	―	(4.1)	―	内外面ともに 5Y7/2 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/12	京焼
32	第 1 調査区 井戸 35	陶器 色絵 手鉢把手	―	長さ (5.6)	幅 (3.0 ～ 4.5)	内外面ともに 2.5Y8/1 灰白（釉）	内外面ともに施釉。 呉須。			京焼 写真のみ
33	第 1 調査区 井戸 35	陶器 香炉	―	(3.5)	4.8	内面は 10YR8/3 浅黄橙 外面は 2.5Y8/1 灰白（釉）	内面はナデ調整。 体部外面は施釉。	底部から高さ 2cm程は縦向きの凹凸を持つ。	底部 完形	京焼系
34	第 1 調査区 井戸 35	陶器 ひょう足 蓋	(8.4)	1.2	天井 (7.2)	内面は 2.5Y8/4 浅黄 外面は 2.5Y 浅黄（釉）	内面はナデ調整。 外面は施釉。	口縁部から中心にかけて、2 ヶ所に半円形に切り取られている。	1/3	京焼系
35	第 1 調査区 井戸 35	磁器 染付 椀	―	(3.9)	4.2	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は湾曲しながら立ち上がる。	底部 完形	伊万里 高台内に圏線
36	第 1 調査区 井戸 35	磁器 染付 椀	(10.4)	(6.2)	4.2	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は緩やかに湾曲しながら上方に立ち上がる。	底部 完形	伊万里
37	第 1 調査区 井戸 35	磁器 染付 皿	14.1	2.8	9.0	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部から口縁端部にかけて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。 口縁部は波打つ。	完形	肥前系 高台内に圏線
38	第 1 調査区 井戸 35	磁器 染付 大皿	(36.0)	(4.2)	―	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部から口縁端部にかけて大きく外反しながら立ち上がる。	1/8	明
39	第 1 調査区 井戸 35	磁器 赤絵 鉢	(13.6)	(3.5)	―	内外面ともに 7.5Y8/1 灰白（釉）	内外面ともに施釉。 上絵。	体部は緩やかに外反しながら立ち上がる。	1/6	伊万里
40	第 1 調査区 井戸 64	土師器 皿 Sb	(10.8)	(2.0)	―	内外面ともに 7.5YR7/6 橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる	1/8	
41	第 1 調査区 井戸 64	土師器 皿 S	(11.6)	(1.9)	―	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部から口縁部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がる	1/6	口縁部 に煤付着
42	第 1 調査区 井戸 64	焼締陶器 鉢	―	(6.0)	(11.6)	内面は 10YR5/3 にぶい黄褐 外面は 10YR8/4 浅黄橙	体部内面は使用により磨滅。 外面体部はロクロナデ調整。	体部は外反しながら立ち上がる。	底部 1/3	信楽
43	第 1 調査区 井戸 64	陶器 皿	(11.2)	(2.7)	―	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白	内外面ともにナデ調整。	体部は緩やかに湾曲しながら上方に立ち上がる。	1/6	唐津
44	第 1 調査区 整地土層	土師器 皿 Sb	8.6	1.7	3.5	内外面ともに 10YR7/6 明黄褐	外面は口縁部ナデ調整。 内面はナデ調整。	体部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。	完形	口縁部 に煤付着

表 9　遺物観察表 (3)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図番号	出土遺構	器種 器形	口径（cm） 口径	器高	底径	色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
45	第 1 調査区 整地土層	土師質土器 皿	8.0	1.1	2.6	内外面ともに 2.5Y8/3 浅黄	内面はナデ調整。 体部外面は工具ナデ調整。	体部は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。	1/2	
46	第 1 調査区 整地土層	土師質土器 火入れ	—	(14.2)	23.9	内外面ともに 10YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	体部は上方に向かって立ち上がる。	底部 完形	
47	第 1 調査区 撹乱	磁器 染付 皿	—	(1.1)	(7.2)	内外面ともに 10G7/1 明緑灰（釉）	内外面ともに施釉。	高台の断面は台形状。 体部は外反しながら立ち上がる。	底部 1/4	漳州窯系
48	第 1 調査区 撹乱	磁器 染付 椀	(10.2)	5.75	3.8	内面は N8/0 灰白 外面は 2.5GY8/1 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は湾曲しながら立ち上がる。	口縁 1/3 底部完形	肥前系 高台内に「大明年製」
49	第 1 調査区 撹乱	磁器 染付 椀	10.3	5.75	4.1	内外面ともに N8/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は湾曲しながら立ち上がる。	口縁 2/3 底部完形	肥前系 高台内に「大明年製」
50	第 1 調査区 撹乱	磁器 染付 椀	10.5	5.9	4.0	内外面ともに N7/0 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は湾曲しながら立ち上がる。	口縁 2/3 底部完形	肥前系 高台内に「大明年製」
52	第 2 調査区 古墳周濠 4	円筒埴輪	—	(7.0)	—	内面は 7.5YR6/6 橙 外面は 10YR8/3 浅黄橙	内面はヨコハケ。 外面はナデ調整。		1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
53	第 2 調査区 古墳周濠 4	円筒埴輪	—	(7.0)	—	内外面ともに 7.5YR7/6 橙	内面はナデ調整。 外面は一次タテハケ。	突帯は断面三角形状で、下側は丁寧にナデられておらず、粘土を貼り付けた痕跡が残る。	1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
54	第 2 調査区 古墳周濠 4	朝顔形埴輪	—	(11.2)	—	内外面ともに 7.5YR6/6 橙	内面はタテハケ後、一部ヨコハケ。 指頭圧痕残る。 外面は一次タテハケ。	突帯の断面は不均整な台形状。	1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
55	第 2 調査区 古墳周濠 4	朝顔形埴輪	—	(3.4)	—	内外面ともに 7.5YR6/6 橙	内面はヨコハケ、口縁端部は横方向ナデ調整。外面は一次タテハケ、口縁端部は横方向ナデ調整。	大きく外反する。	1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
56	第 2 調査区 古墳周濠 4	朝顔形埴輪	—	(5.5)	—	内外面ともに 5YR7/6 橙	内面はヨコハケ、口縁部はナデ調整。 外面は一次タテハケ。	突帯の断面は三角形状。	頸 1 /12	川西編年 Ⅴ期
57	第 2 調査区 古墳周濠 4	人形埴輪	—	(6.8)	—	内外面ともに 7.5YR6/6 橙	内外面ともにナデ調整。	頭頂部に穿孔。	頭部 1/3	
58	第 2 調査区 整地土層	円筒埴輪	—	(7.5)	—	内外面ともに 5YR6/8 橙	内面はタテハケ。 外面は一次タテハケ。		1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
59	第 2 調査区 整地土層	円筒埴輪	—	(5.0)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内面はタテハケ。 外面は一次タテハケ。	突帯の断面は不均整な台形状。	1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
60	第 2 調査区 整地土層	円筒埴輪	—	(6.6)	—	内面は 7.5YR7/4 にぶい橙 外面は 7.5YR8/4 浅黄橙	内面はヨコハケ。 外面は一次タテハケ。	突帯の断面は不均整な台形状。	1/12 以下	川西編年 Ⅴ期
61	第 2 調査区 柱穴 2	土師器 皿 N	(10.8)	(2.1)	—	内面は 10YR8/4 浅黄橙 外面は 10YR8/2 灰白	内外面ともにナデ調整。	体部は緩やかに湾曲しながら上方に立ち上がる。	1/12	
62	第 2 調査区 整地土層	土師器 皿 A	(9.8)	(1.6)	(4.8)	内外面ともに 7.5YR7/6 橙	内外面ともにナデ調整。	いわゆる「て」字状口縁。 口縁端部は外側上方に引き上げられる。	1/7	
63	第 2 調査区 整地土層	土師器 皿 A	(12.4)	1.2	(9.2)	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	いわゆる「て」字状口縁。 口縁端部は内側上方に引き上げられる。	1/12 以下	
64	第 2 調査区 整地土層	土師器 皿 N	(11.6)	(2.4)	(8.0)	内外面ともに 7.5YR8/6 橙	内外面ともにナデ調整。	口縁端部は外反する。	1/12 以下	
65	第 2 調査区 整地土層	土師器 皿 N	(13.8)	(2.7)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙	内外面ともにナデ調整。	口縁端部は外反する。	1/12 以下	
66	第 2 調査区 整地土層	磁器 染付 椀	—	(5.7)	(3.7)	内外面ともに 5GY8/1 灰白（釉）	内外面ともに施釉。	体部は外反しながら立ち上がる。	底部 完形	肥前系 コンニャク印判五弁花文

図　版

1　調査地全景（南西から）

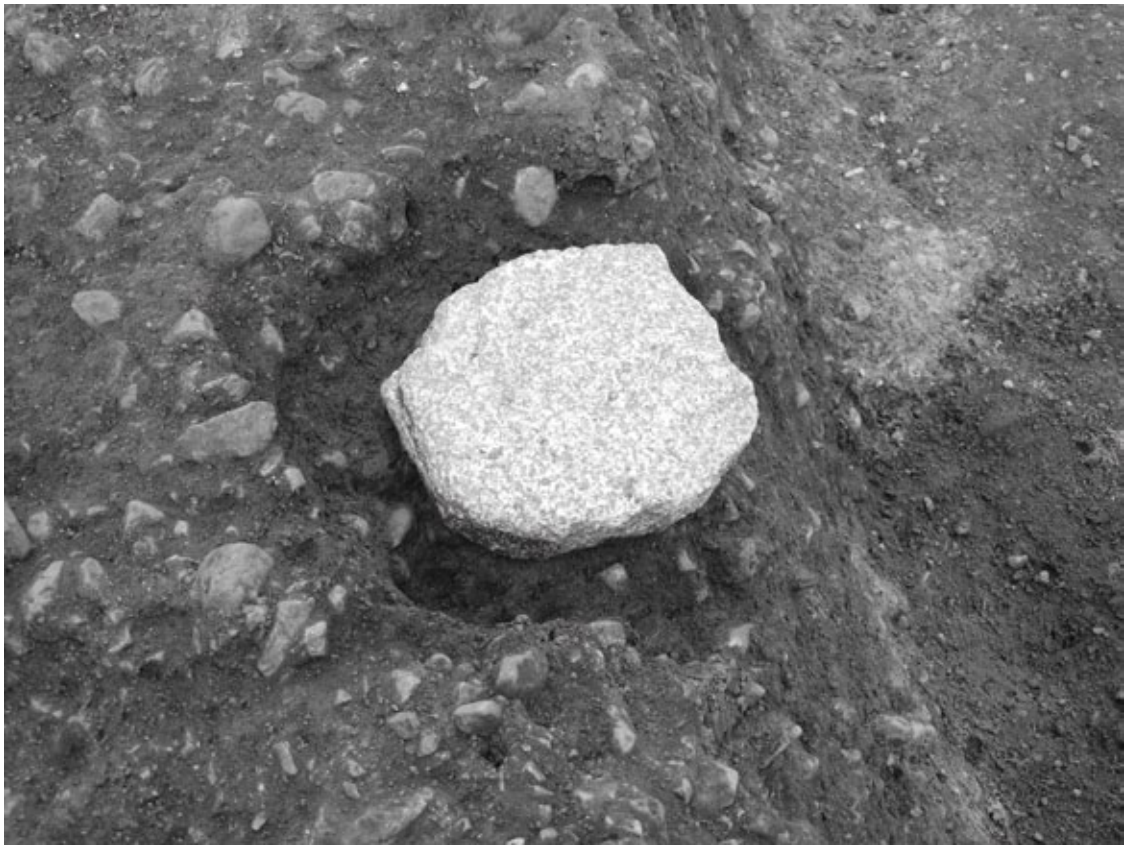
2　調査地全景（南東から）

図版 2 遺構

1　第 1 調査区近代遺構完掘状況（東から）

2　第 1 調査区近世遺構完掘状況（東から）

1　第 1 調査区西側柱穴（南から）



2　第 1 調査区柱穴 70 礎石検出状況（南から）

図版 4 遺構

1　第１調査区中世･近世遺構完掘状況(西から)

2　第１調査区中世・近世遺構完掘状況（東から）

1　第２調査区中世・近世遺構完掘状況 (北東から)

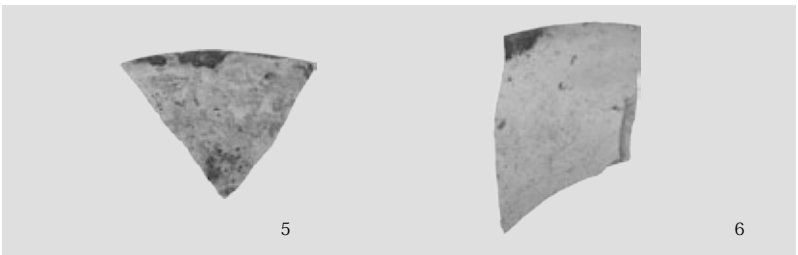
2　第２調査区古墳周濠４遺物出土状況（東から）

1　第２調査区古墳周濠４完掘状況１（西から）

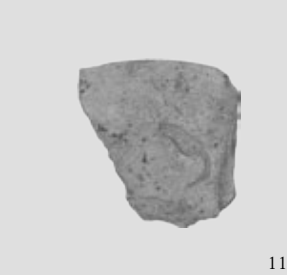
2　第２調査区古墳周濠完掘状況２（北から）

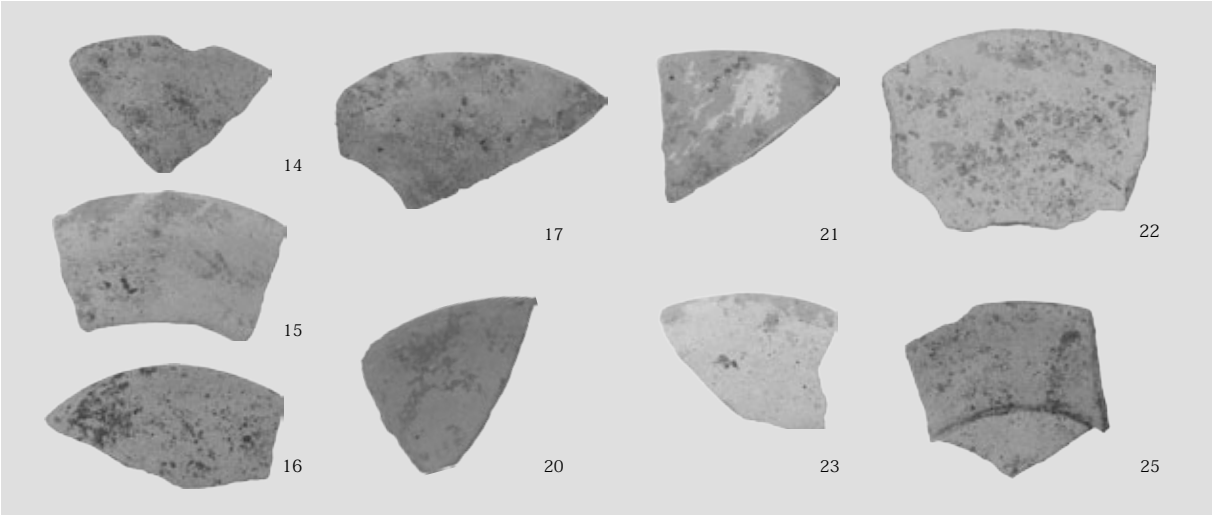
土坑 1（2） 土坑 52（10） 溝状遺構 53（13）

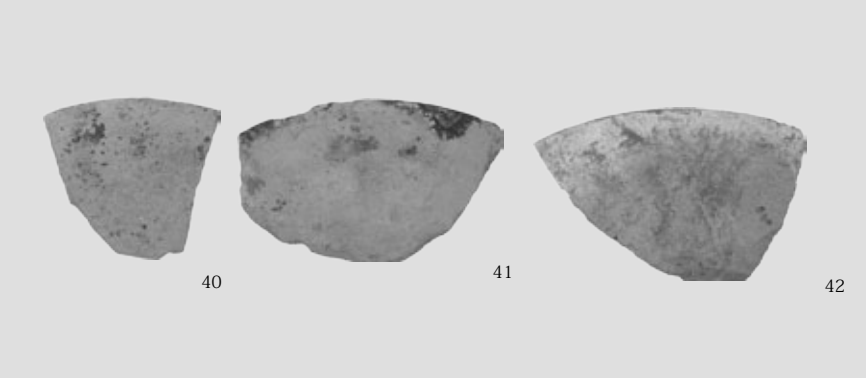
図版 8 第1調査区出土遺物



井戸 35（18、19、24、27、28、29、33）井戸 64（43）近世・近代整地土層（44 ～ 46）土坑 76（1）土坑 38（5、6）



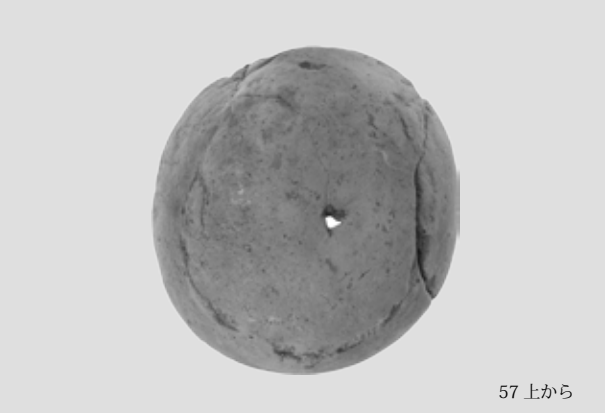


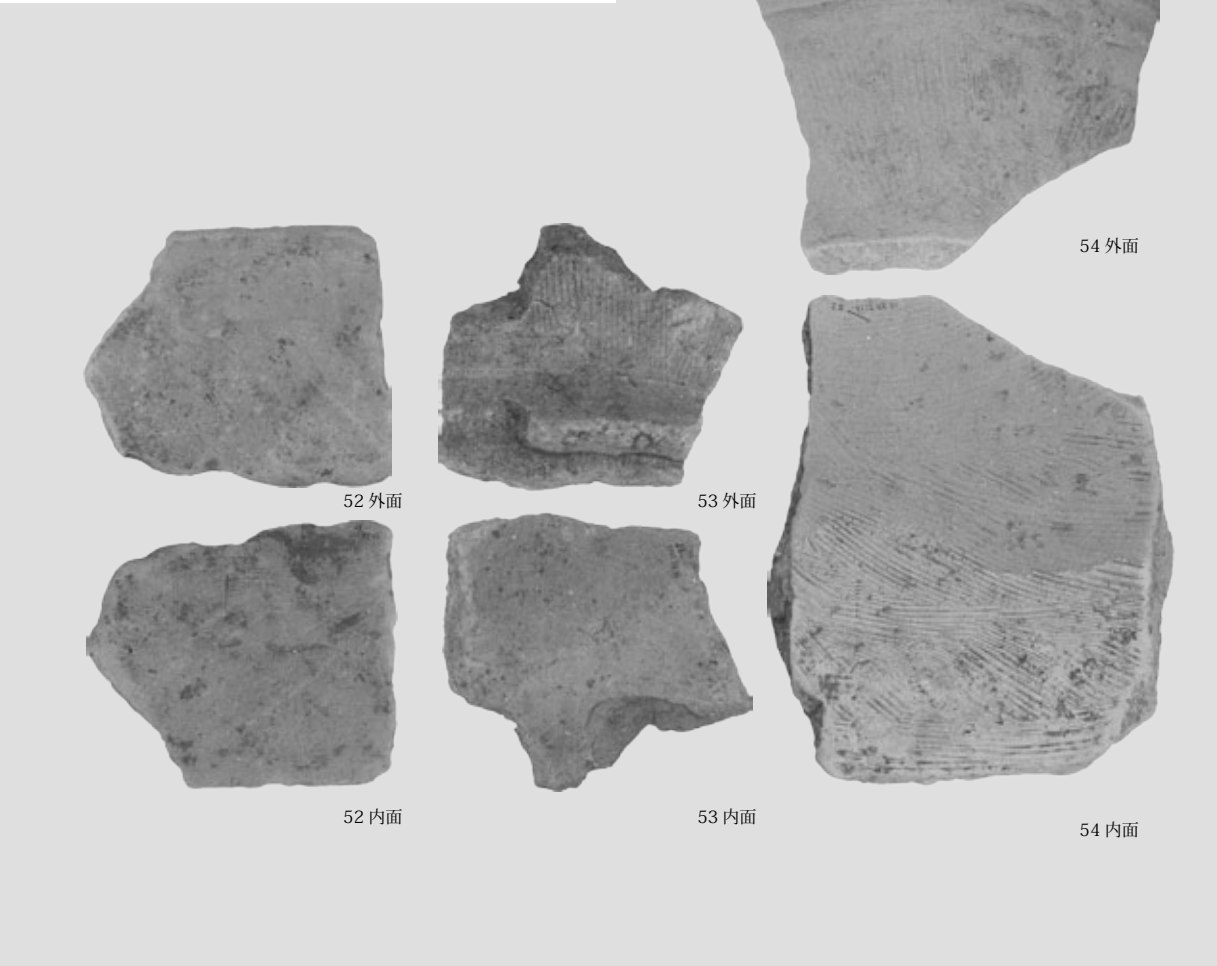


土坑 42（9）土坑 55（11）溝状遺構 3（12）井戸 35（14 ～ 17、20 ～ 23、25、26、30）
井戸 64（40 ～ 43）近世・近代整地土層（51）

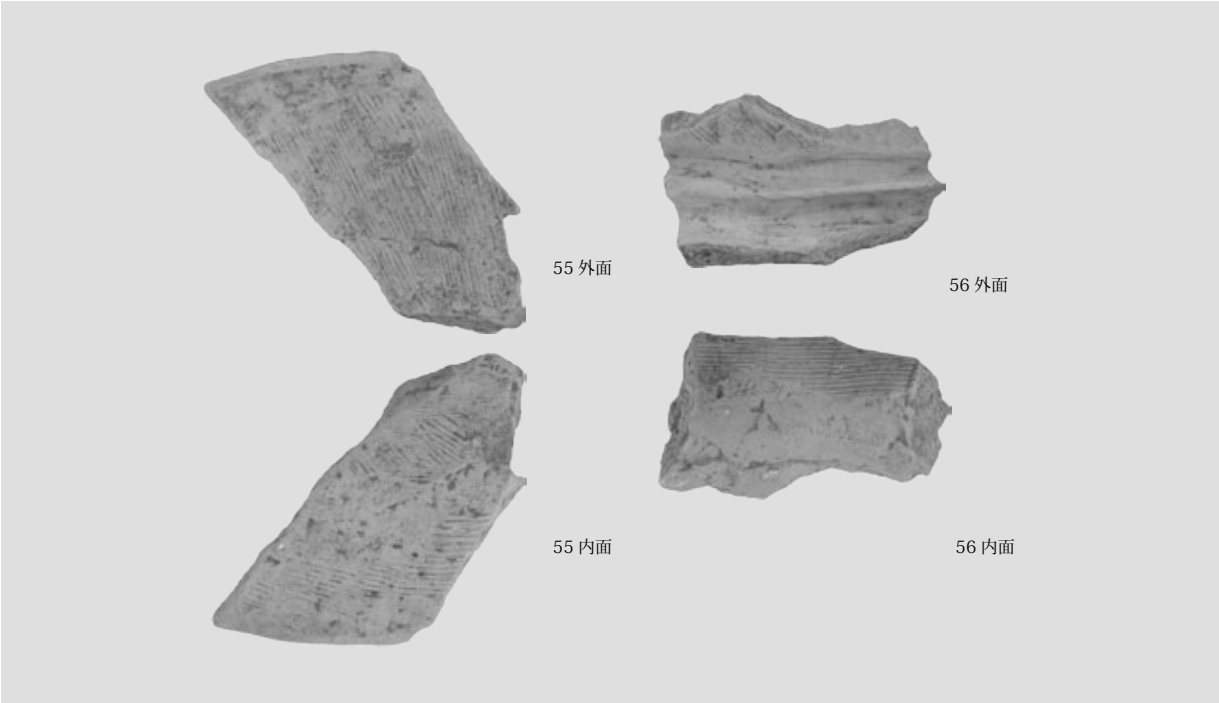
57 正面

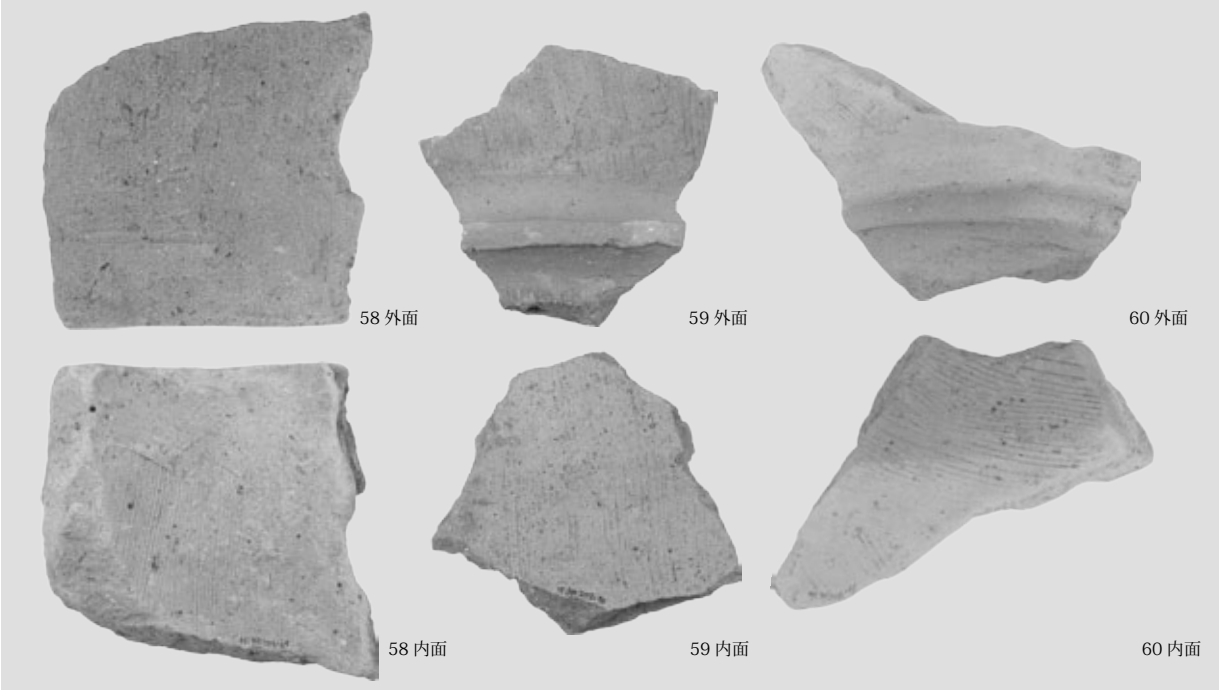
57 右側面

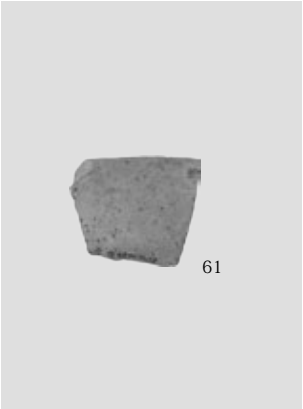

57 上から

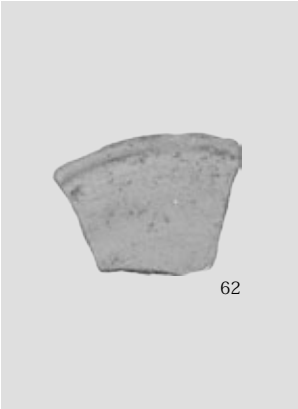


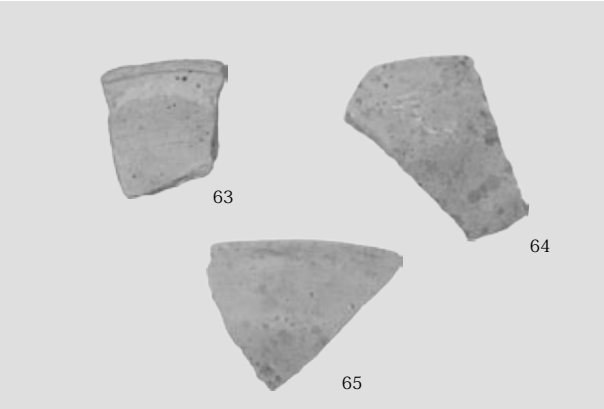
古墳周濠 4（52 ～ 54、57）











古墳周濠 4（55、56） 柱穴 2（61）近世整地土層（58 ～ 60、63 ～ 65）古墳周濠 4 上層近世整地土層（62）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ふしみじょうあと・とうりょういせき
署　　名	伏見城跡・桃陵遺跡
副　署　名	
巻　　次	
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第２集
編 著 者 名	河野凡洋　卜田健司
編 集 機 関	有限会社 京都平安文化財
所　在　地	〒612－8018　京都府京都市伏見区桃山町丹後 20－4
発行年月日	西暦 2014 年 4 月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
伏見城跡（ふしみじょうあと）・桃陵遺跡（とうりょういせき）	京都市伏見区（きょうとしふしみく）奉行前町（ぶぎょうまえまち）２、５番地（ばんち）	26109	1172 1181	34 度 55 分 51 秒	135 度 45 分 55 秒	2013 年 11 月 5 日 ～ 2013 年 12 月 20 日	287.89㎡ 1 トレンチ 104㎡ 2 トレンチ 183.89㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記記事
伏見城跡 桃陵遺跡	平城跡 集落遺跡	古墳時代	古墳周濠	円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪	桃陵遺跡に関連する古墳の周濠を検出。
		平安時代	なし	土師器・黒色土器・須恵器・瓦	
		中世	柱穴・土坑	土師器・瓦器・須恵器・瓦	中世の集落に関連する遺構の検出。
		近世	建物跡・柱穴・土坑・溝・溝状遺構・井戸	土師器・陶器・磁器・輸入磁器・瓦	伏見城城下町の大名屋敷・伏見奉行所与力組屋敷に関連する遺構を検出。
		現代	堀状遺構	土師器・陶器・磁器・瓦・土製品・金属製品・ガラス製品	工兵第十六大隊に関連する遺構を検出。

平成 26年 （２０１４年） ４月３１日 発行

伏見城跡・桃陵遺跡
発掘調査報告書

編集　有限会社 京都平安文化財
発行　〒612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後20-4
電話　075-644-6600

印刷　株式会社 あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15
電話　075-813-3350